

天正十一年十月五日

條ニ見ユ、

〔參考〕

〔甲斐國志〕

國法之部

秤子

守隨彦太郎代甲府八日町ニ居住シテ、坂本

清九郎ト云、本皆武田ノ秤子ナリ、神祖御入國ノ後、守隨ハ江戸ニ召サル、文書ノ寫五通清九郎藏之、

是ヨリ先、信濃松本ノ小笠原貞慶、屢同國木曾ニ木曾義昌ヲ攻メ、捷ヲ德川家康ニ報ズ、是日、家康、其功ヲ褒ス、

〔譜牒餘錄〕

三十四 小笠原遠江守

被對石川伯耆守來札具遂披見候、抑木曾谷義昌居城其外宿中悉有放火、敵數多被討捕之由、無比類儀共候、殊凶徒搦籠山城無程可爲落居之由、本望此事候、彌無油斷御行肝要候、委細伯耆守可申候、恐々謹言、

十月五日

家康 御判

貞慶 小笠原右近大夫殿○笠系大成附錄書并證文集同ジ、

木曾義昌
興禪寺ニ
籠ル

一 同年九月、貞慶木曾へ押寄、左馬頭義昌居城之福嶋を責落、義昌岩泉寺へ

石川數正

坂本清九郎

引籠、貞慶又追詰之、板敷野上松まで放火、十月初、參州へ注進申上之處、御感狀被成下候、則寫差上候、

〔寛政重修諸家譜〕

百八

小笠原貞慶

小僧丸、喜三郎、右近大夫、從五位下、

天正

十一年九月、木曾

左馬頭義昌の籠りし信濃國福嶋城をわとしい、是、板敷野、上松等ふ放火し、敵あまとうちと、十月五日、御感狀をせぬ、○上下略、貞慶、深志ヲ復ス、トニカ、ル、

〔岩岡家記〕

○笠系大成附錄所收

一 八月、貞慶公木曾へ御出馬被成、義昌居館福嶋

（朱書）興禪寺

を御破り被成候、付、義昌ハかんせん寺へ引籠被申候故、貞慶公御馬を

被入候、其後廿日ほど過候て又御出馬被成、板敷野、あけ松まで放火被成候、其引足此時、古畑伊賀鐵砲足輕を引連、川を巻いて鐵砲抜打りけ申候、時味方のまゐりあり、二木六右衛門、同彦兵衛、岩波平左衛門、松島善兵衛、飯田右馬助、拙者、其外合て貳拾騎あり、川を一文字、乗越申候へハ、古畑伊賀味方ニ被捨、其上跡を取切候故、山へ引上ケ候ハんと仕候處に、馬ころひ申候、付、無是非ふとまり、腹を切候ハんや仕候處を、右之衆無透走りより、いとき取申候、貞慶公御眼前ニ而御覽被成、御悅不斜思召候

古畑伊賀

天正十一年十月五日

芋頭

天正十一年十月五日

一五六

後藤彌左衛門尉所持候水指芋頭之儀、差上之候、喜悅之趣能々可申聞候、謹言、

天正八年九月
閏三月五日

輝元 御判

國司對馬守殿

輝元

後藤彌左衛門尉、芋頭之水指先度差上之候、一廉重寶候、留置之令祕藏候、祝著之趣委細申聞候條、其旨可申與候、謹言、

九月廿五日

輝元 御判

內藤與三右衛門尉殿

輝元

後藤彌左衛門尉手前之儀、以壽印並之儀被仰付可被遣之由候、其分可被成御調候、此由可申旨候、恐々謹言、

九月廿五日

判

內藤與三右衛門殿

佐世與三左衛門

兒玉市之允殿

元祝

坪役
細工役

後藤彌左衛門尉事、芋頭之水指致上進付而、別而被成御褒美候、然間坪役細工役其外町並諸役被成御免除候條、向後可被得其心之通、能々可申旨候、恐々謹言、

天正十一

內藤與三右衛門尉

十月五日

元榮 判

兒玉市之允

元貫 判

國司對馬守殿

同 雅樂允殿

黑河三河守殿

六日、卯、羽柴秀吉、丹波船井郡及比河内讚良郡ノ地ヲ、松下之綱ニ宛行フ、

〔松下文書〕

波〇丹

丹波國船井郡所々知行目錄事

一八拾參石貳斗六升

佐々江村

天正十一年十月六日

一五七

天正十一年十月六日

一百九石七升 大藪村
 一百六拾八石 越方村
 一百貳拾壹石壹斗 新石田村
 一百拾貳石 下山之内
 一百九拾石七斗 片山村
 一貳拾四石五斗 寺谷村
 一七拾五石九升 國府村
 一六拾五石 木崎村
 一四拾壹石貳斗五升 觀音村
 一八拾四石貳斗 横田村内
 一百拾貳石貳斗貳升 千書村
 一七石八斗 大戸村之内
 一參拾六石 高田村
 一五拾參石 夜賀村
 一參拾五石七斗 蘭部村
 青戸村

一四百石
 一貳百五拾石
 都合貳千石

志和賀村
河内國はららの郡内(安泰村)
 うつまさ村

筑前守

秀吉(花押)

天正拾壹年拾月六日
 松下賀兵衛尉殿

〔寛政重修諸家譜〕

四百十二

松下之綱加兵衛、石見、豊臣太閤につゝへ、天正

十一年十月六日、丹波國船井、河内國讚良兩郡此うちをいて、采地二千石
 を宛行はるゝの判物被あゝへら、其餘伊勢國乃うちみして千石被添ら

註、○上略

七日辰丙、羽柴長秀長秀、播磨清水寺ヲシテ、寺領ヲ安堵セシム、

〔清水寺文書〕

〇八播磨

御寺領儀百石、御陰居様被成御意候、付而ハ無別儀相濟候條、如前々可有御
 寺納候、爲其如此候、恐惶謹言、

天正十一年

小堀新介

天正十一年十月七日

伊勢ノ地ヲモ與フ

小堀正次

天正十一年十月七日

十月七日

正次(花押)

一六〇

清水寺

御行事

御同宿中

德川家康、駿河庵原ノ石切市右衛門ヲシテ、石切屋敷ヲ安堵セシム、

〔青木文書〕

河〇駿



庵原郷

市右衛門
駿河國
石切
大工
ト切
ナ

庵原郷坂下村石切屋敷貳間分、如前々無相違被下候、然上四分一人足諸役共御免ニ候、是者御納馬之刻、於江尻天野三郎兵衛殿前々之筋目被成御披露候、依其駿國中可爲石切大工候、彌守此旨、無々沙汰可被勤奉公者也、仍如件、

天正十一未

十月七日

小栗二右衛門  倉橋三郎五郎  名倉若狭(花押)

石切

市右衛門殿

島津義久ノ弟同征久等、再ビ肥後堅志田ヲ攻ム、

〔上井覺兼日帳〕

〇日向 九月

一廿四日、地藏へ別而讀經等仕候、肝付彈正忠殿御酒被持、只今越著之由候而來入也、即御酒參會也、其後彼方へ禮ニ參之候、種々肴よて御酒也、本田大炊太夫殿、宮原筑州、伊集院掃部助殿同座也、從夫忠棟宿よて談合也、濃^(平田)劔伊野上長拙者、新右、本刑此衆也、豐福地頭其外地下衆各被罷出、堅志田口破御役之談合也、大方相澄候而各罷歸候也、夕食忠棟各へ振舞被成、^(略)略、家久、八代ニ到著スルコトニカ、ル、八月二十四日ノ條ニ收ム、
一廿五日、^(略)對スル略、上村肥前守、八代ニ於ケル諸將ニ、義久ノ阿蘇氏ニ收ム、明後日御働之事ハ、諸軍衆未差揃候間、先々被指延候而可然之由定候也、
一廿六日、忠棟御宿よて談合也、先々堅志田口ニ遠陣ヲ被著候而、從夫御働をと輒させらる候而肝要之由出合候、可然拵ニ可罷成處見せ可有とて、山田新介、二階堂阿波介、敷根越中守、上原勘解由兵衛殿、此外諸所劫者、一兩人ツ、被出合、明日拵ニ可成地見させられ候するとして打立候、地下衆奥野越前守劫者よて候とて案内者也、

天正十一年十月七日

一六一

伊集院忠棟等會議

山田有信等附城ノ地ヲ索ム

天正十一年十月七日

一六二

一廿八日、○中略、覺兼等、茶湯ノヲ條附録ニ收ム、此日拵所見ざらば候衆歸候也、一向左様之地無之由也、此晚山新、二阿被來候而拵候地無之之通細々物語共也、最中喜入式部(久遠)太輔殿御出也、良久雜話也、平田新左衛門殿(宗基)も被來候也、

〔上井覺兼日帳〕

○十一日 拾月

一二日、○中略、忠棟等、阿蘇氏ニ對スル方策ヲ議ス、此朝一昨日堅志田口見切の爲、衆中拙者悴者合而廿人餘遣候、昨日朔日懸野伏仕候て、敵五人被討候、中村内藏介、松本又八左衛門、丸田左近將監、加治木治部左衛門、此衆分捕仕候、豐福より之案内者一人討候、然者已上五人也、於關之麓(マ)まで召寄せ、新納右衛門佐被捨候也、

一三日、毘沙門へ別而看經仕候、此朝めし振舞候衆、新武州(忠元)、本田大炊太夫殿、阿多掃部助殿、伊地知勘解由殿、山田新介殿、猿渡越中守殿、野村備中守殿、一王雅樂助此衆也、めし過候而、御酒之時分忠棟與風御出被成、從夫境目行之談合也、左候而陳城見ニ諸所より劫者被仰付被遺也、○下略、征久、忠十八日ノ條附録ニ收ム、

堅志田攻ノ圖

諸兵小野ニ著ス

堅志田町村ヲ破ノ平田光宗ノ部下

一五日、○中略、忠棟茶湯ノヲ條附録ニ收ム、ル、從夫肝付彈正忠殿宿へ忠棟同心申參候、今日諸地頭平田殿へ被相揃談合之由定候間、茶數之談合共申、拙者草案仕候、雖而本知被來候間、書せ候て、稅新、新右にて被申出候也、終日霜臺會尺共被成候、此日平田殿より稅新、新右にて、當所御拵御談合肝要候、落書ちと見せちされ候、とく當所衆之事繰替ちされ候する處、又其儘ニ置せられ候する處、殊之外御隙入とるへく候間、先々堅志田口へ御行候て、其後御談合可然之由定也、伊野州、新武と此由也、此夜忠棟より明後日御働之御圖、輒ち候間、談合之由候而、兩人參合候而、終夜衆盛等仕候、

一六日、如常、早朝より於忠棟御宿、打立之談合共也、大雨霰不歇候へ共、各未之刻計打立候也、小野へ著候諸軍衆、豐福、山野、林木、小川、高津賀所々へ宿也、
一七日、夜を籠打立候也、堅志田町村之破却ニて、敵數十人被討取候、破口之衆、平田濃州被召列候、其所之麓、八代、豐福、世喜、高津賀、高田、比奈古、田之浦、久多、良木、佐敷、湯之浦、津奈木、羽月、曾木、平泉、日州、高城、帖佐、此衆ちり、中取

天正十一年十月七日

一六三

天正十一年十月七日

一六四

拙者罷居候其衆大口一山菱刈本城福島宮崎曾井清武藏岡眞幸衆栗
 野加治木横川飯田細江田野野尻紙屋飢肥木脇富吉右之諸所拙者手
 り(征久)典厩圖書頭殿忠棟是モ同所ニ御衆たまり也其衆清水串良高山鹿屋
 鹿兒島伊作田布施阿多加世田永吉日置川邊踊曾於郡大崎伊集院吉田
 此所々也輒堅志田町破却候蓮生寺之上陳城ニ可然と哉与存候而我々
 手より見せニ登せ候然處ニ不慮ニ敵四人討取候栗野衆二人飯野衆一
 人宮崎衆勝目但馬守一人被討取候勝吐氣新納右衛門佐被作候左候而
 各打歸候也此夜ニ小野へ留候諸軍衆も此所ニ留也

一八日小野より如八城罷歸あり肝付彈正忠殿同道申候○下略名和顯孝

トニカ、ル、本月
八日ノ條ニ收ム、

一九日○中略北郷忠虎等竹宮ヲ攻ムルコ從合志義書狀を以此口之様子
 尋也是又有之儘ニ返事申候也○下略合志親重合志口ヨリ御舟へ魚鹽
カ、ル、本月
日ノ條ニ收ム、

○忠棟等堅志田ヲ攻メ克タズシテ八代ニ還ルコト九月十七日ノ條
 ニ忠長等花山ニ砦ヲ築キテ堅志田ニ迫ルコト本月二十八日ノ條ニ

見ユ

八日、織田信雄、大神宮ニ供料ノ地ヲ寄進シ奉ル、尋デ、又祭主大中臣
 廣忠ニモ替地ヲ與フ、

〔藤波文書〕○伊勢

目錄

- 一 齋宮 一同上野
- 一 竹河 一有爾中村

已上

右四ヶ郷合貳千五百貫文、大神宮内外爲御供料奉神納畢、全社務不可有相違
 之狀如件、

天正拾壹年拾月八日

信雄 ○朱印 加海内文威

宮司殿

一 神主殿

同 神主中

〔河邊家譜〕

舊大神宮
司祿法

天正十一年十月八日

一六五

天正十一年十月八日

惣官引付云、

先度山田宮司神主中へ貳千五百貫通申付候、然者此内五百貫（大中臣氏也）祭主方へ可相渡旨可申届候、謹言、

十一月十八日

織田玄蕃頭殿

信雄 判

織田玄蕃頭

今度神領貳千五百貫被仰付候、然者五百貫之餘慶、其分祭主殿神領爲替地被遣之候、則御書進之候條、早々五百貫之分可被引渡候、爲其如此候、恐々謹言、

十一月十九日

織田玄蕃頭 判

宮司殿
兩宮
神主御中

○織田信雄、伊勢上福院、延命寺等ニ寺領ヲ寄進スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔賜蘆文庫文書〕

飯福田寺文書

飯富田郷後山郷

飯富田郷、後山郷、都合百拾五貫文遣之候、全可寺納之狀如件、

天正十一年

拾月十日

信雄 朱印
○印文威
加海内

大夫殿

上福院

〔勢陽五鈴遺響〕

飯高郡

愛宕山龍泉寺上福院、愛宕町街道ノ傍ニアリ、

古義真言宗洛西大覺寺末、○中織田信雄卿寄附狀、

以四目指郷内三十貫文令寄進訖、全令寺納之狀如件、

天正十一年十月十五日

信雄 朱印

上福院

延命寺

〔勢陽五鈴遺響〕

飯野郡

延命寺

同處

ニアリ、淨土宗、○中

又北畠信雄ノ

寄附狀ヲ藏ス、表装ノ今ニ存セリ、其文曰、

以四目指郷之内永樂五十貫文令寄附畢、永代可爲寺務者也、

天正拾一年拾月

信雄 印

延命寺

大友義統ノ將一萬田統賢、朽網鎮官等、豊前佐野ヲ攻メテ之ヲ拔ク、尋

天正十一年十月八日

天正十一年十月八日

一六八

デ、義統、其戰功ヲ褒ス、

〔大友家文書錄〕

義統

義統作感贖賞在豊前陣諸士軍功、

一萬田統賢

去八宇佐郡長峯村

佐野切寄打崩之刻、自身別而依被碎手、家中之人等被疵著到、銘々加

披見、以袖判申候、向後彌被申進、可預馳走、夏肝要候、必至統賢一稜可賀申候、恐々謹言、

十月十一日

義統 在判

一萬田金部民部少輔殿

袖判

天正十一年十月八日、豊前國宇佐郡佐野切寄挫刻、一萬田民部少輔統賢被官被疵著到、銘々加披見畢、

廣瀬左近允 （鑑カ下向シ）

衛藤主計允 （鑑カ）

都甲市兵衛尉 （鑑カ）

以上

一萬田市進

去月廿四、下毛郡之内間田切寄打崩之刻、分捕高名、殊前八宇佐郡佐野切寄挫之砌、被疵粉骨之次第、旁以忠儀無（義下向シ）比類候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

十月十一日

義統 在判

一萬田市進殿 （〇義統ノ兵、間田ヲ攻ムルコト見ユ、九月二十四日ノ條ニ見ユ、）

豊前國發向之刻、被遂出陣、於所々軍勞、就

寄挫之砌、被官被疵戰

爲祝著候、必取鎮一段可賀之候、

統 在判

右衛門尉殿

林左京允

與力

發向之刻、被遂出張、於所々軍忠、殊（字）郡之内佐野切寄挫候之砌、與力被官分

天正十一年十月八日

一六九

天正十一年十月八日

一七〇

骨吏感悅候、向後彌可被加諫、祝著候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十月十一日

義統 在判

林左京允殿

朽網鎮官

今度宇佐郡之内佐野切寄被打崩候之刻、鎮官家中工藤主膳正勵粉骨戰死之由候、忠儀感心無極候、寔不便之儀候、彼子孫於在之者、能々可被賀之事、肝要候爲御存知候、恐々謹言、

十月十五日

義統 在判

朽網常陸介殿

上野左介

前八當郡之内佐野切寄被打崩候刻、別而軍勞之次第感入候、向後彌可勵馳走事、肝要候、必追而一段可賀之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

十月十五日

義統 在判

上野左介殿

久保大藏少輔

前八當郡之内佐野切寄被打崩候之刻、被勵粉骨之由感入候、彌向後馳走肝要候、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

十月十五日

義統 在判

久保大藏少輔殿

島津義久ノ屬將肥後宇土ノ名和顯孝、同國隈莊ヲ攻ム、

〔上井覺兼日帳〕〇十一日 十月、

一八日、〇中略、覺兼等、小野ヨリ八代ニ歸ル、此晚宇都ヨリ隈庄口へ働共候、其見者ニ野村備中守被遣候、罷歸、彼方之様子物語也、先朝立然々村々と不被破候事を、備中守悴者共見取候間、其分地下へ被申候、然處ニ日下ニ談合共被仕、物義候村破却之由候間、野備頻無用之由被申候、得共、喜悅飛驒守打立候者、隈庄近く指寄、村破却共候、然處ニ敵手痛懸候間、宇都衆敗軍ニおよび、筑麻左近、岩佐兩人を始として、三四十人戰死之由也、笑止之事共也、

一九日、〇中略、城一要、合志口ヨリ御船方ニ魚鹽運搬ノコ、此日從宇都殿使僧よて、彼口之様子戰死之衆を、と委承候也、使僧見參仕、相應之返事申候

天正十一年十月八日

一七一

隈莊附近ノ村落ヲ破却ス

顯孝ノ注進

天正十一年十月十日

一七四

ト相議シ若干ノ兵師ヲ帥イテ、村里ヲ燒テ得勝利、略上

十日、未勸修寺晴豐ニ命ジテ、外様ノ御番ヲ結改セシム、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲百九十八

とさぬの

御せん家ゆくの事

きん久をの巻られ、もとのとくきんありのあそんをいられ候へのよし申
とて候、正親町三條公仲

くまんと志ゆ寺勸修寺

大納言とのへ備前

興、福寺別當大乘院尋憲、羽柴秀吉ヲ訪ハントシテ、大坂ニ之ク、

〔多聞院日記〕三十八 十月十日、大門様大坂へ筑州見廻ニ被越了、爲御祈

念、仁王經修之、賢良房法印、南井坊、良勤房律師、金勝院圓城坊長印房請了、

廿日、 一大坂ヨリ御門跡御使ニ治太夫來、御書在之、畑御訴訟昨夕相調ト聞了、無

畑莊ノ訴

治定者宜敷由、則銀子三枚調、明日ニ可越由被仰出候間、相調遣了、於事實

ニ悲喜相半也、いゝ、

廿一日、○中 治太夫ニ銀子三枚渡遣之、返事申上了、

廿二日、

一大乗院殿へ、大坂へ治太夫ニ銀三枚遣之、御請取之由狀在之、畑事ハ未一

決と聞了、

廿六日、

一大乗院殿大坂へ御歸座了、訴訟無一途不可調事ト聞へ了、

上杉景勝、狩野秀治ノ所領信濃田中ノ地ヲ、郡司不入ト爲ス、

〔上杉年譜〕二十八 同月十日、狩野讚岐守ハ年來ノ忠信淺カラス、感稱ノ

餘リ、其賞トシテ田中地ヲ賜リ、郡司不入ニシ充行ル、其御書云、

田中一繩手郡司不入成置之者也、仍如件、

天正十一年

景勝

十月十日 狩野讚岐守殿

天正十一年十月十日

一七五

天正十一年十月十一日

一七六

十一日、庚申織田信雄、所領ヲ一族津田國信ニ與フ、

〔阿波國古文書〕名一東郡

折文以井塞郷内貳百貫文令扶助訖、全可領知之狀如件、

井塞郷

天正十一年

拾月十一日

信雄朱印○加海内文威

津田國殿

○信雄、海東郡ノ地ヲ雜賀猿ニ與フルコト、便宜左ニ合致ス、

〔輯古帖〕六

○伊勢

かう田の郷

海東郡之木ゆの木の湯し

右兩郷爲御扶助被仰付候、全可有知行旨、被仰出候、已上、

天正十一年拾月五日

曾我 又六花押

矢部甚兵衛花押

雜賀猿殿

肥後八代ノ守將島津忠長、伊集院忠棟等、筑後鷹尾ニ糧食輸送ノコトヲ

鷹尾へノ使歸ル

田尻鑑種切腹ヲ覺悟ス

議ス、

〔上井覺兼日帳〕

○十日向 九月、

一七日、如常、此晚坂上伊賀極來候趣ハ、田尻殿へ使として山をくゝり、土橋城介と兩人被指遣候、容易彼籠城ニ通候而、歸ニハ舟より參候由也、彼籠城之躰折角と見得候、併二三ヶ月之中ニ兵糧ちと盡候する様ニハ無之由也、何として一御行相待候、然共左様ニ候而も、御安否ちとハ御無用之由也、何としても兵船を指登られ候ハ、鑑種事ハ一圖ニ腹を切た忽候する、さて子息を此方へ上置度之儀也、菟角彼兩人被見候分ハ、海陸共ニ御行輒難有由也、此夜近邊ニ火事出來候へ共、臆而消候也、

一廿五日、○中略、覺兼、天満天神ヲ祈ルコト、忠棟よ本刑を以、今日諸地頭圖書頭殿御宿よて、有馬表之様子、又ハ田尻殿折角之由聞得候、彼是談合候而可然被思之儀也、御下ニ我々も存候由返事申候也、○下略、上村肥

〔上井覺兼日帳〕

○十一日 十月、

一十一日、如常、忠棟於御宿各談合也、○中略、堅志田攻談合ノコトニカ、田尻

天正十一年十月十一日

一七七

再ビ使ヲ
鷹尾ニ遣
ス

天正十一年十月十二日

一七八

へ者、荷籠之儀相定候、然ハ船盛并上乘衆と諸處へ被仰付候、
一十二日、○中略、吉田東安、覺兼ヲ訪フコトニカ、此内よ、諸境目談合等者
聊無緩候、此晚田尻殿へ使者ニ土橋城介殿可被遣候、左候ハ、向後御佗
かとの儀、寄合中被頼成之由、忠棟よ承候也、忠棟御一門衆よて候、御校
量よ過ましく候、一大事折角之在所へ被罷通儀候間、我々被人能候す
るとハ難申候、向後御佗之事ハ、無是非之由返事申候也、使野邊將監殿也、
一十三日、如常、三官かよしぬより越候間、脈頼候て取せ候、從夫朝食振舞候、
土橋城介田尻へ可通由よて被來候間、同參會候也、○下略、覺兼、忠利、忠澄
ル、本月二十八日、
ノ條附録ニ收ム、

十二日、酉京都ノ奉行前田玄以、相國寺光源院ヲシテ、東山慈照寺看坊分
以下ヲ安堵セシム、

〔光源院文書〕○山城

東山慈照寺之儀、（貞勝）村井如折紙不可有相違候、然者看坊分并山林竹木其外下
行等、無他妨堅有守護、佛供燈明勤行造營已下可相勤事肝要候、恐々謹言、

半夢齋

十月十二日

玄以在

光源院侍司下

東山慈照寺山林竹木之儀、任玄以折昏之旨、（并貞勝）如春長軒時、諸事不可有相違候、
恐惶謹言、

松田勝右衛門尉

十一月六日

政行（花押）

光源院侍者御中

十三日、（壬戌）京都ノ奉行前田玄以、大覺寺門跡領山城高田村ノ本役年貢以
下ヲ同門跡尊信ノ直務ト爲ス、尋テ、尊信ヲシテ、生田村年貢以下ヲ安
堵セシメ、又海老名下司給ヲ其直務ト爲ス、

〔天正十一年折紙跡書〕○淡路

大覺寺御門跡領高田村御本役、年貢、草錢、地子錢等之儀、向後御直務申定上
者、下司給五段半事も一職可爲御直務、自然誰々雖望申、御直納之上者、別號
下司給事不入儀候、御寺領之妨、（仁）可成儀者、自今以後も御停止尤候、恐々謹

天正十一年十月十三日

一七九

松田政行

本役

下司給

天正十一年十月十三日

一八〇

言、

天正十一

十月十三日月ノ玄間ニ法印下知狀十一月ニ作リ、十月ノ誤寫カ、十

大覺寺殿御雜掌

中澤右近大夫殿

公事物

大覺寺御門跡領生田村年貢地子、公事錢等事、如先々被任御當知行之旨、可有御寺納候、次海老名下司給貳段半、諸公事物等、今度改而申付上、於自今以後者、全可爲御直務、永不可有相違候、恐々謹言、

天正十一

十一月二日

大覺寺殿御雜掌

勢田備前守殿

信濃上田ノ眞田昌幸、長井權助ノ忠節ヲ賞シテ、同國小縣郡ノ地ヲ與フ、

〔長井文書〕

濃〇信

別而抽忠節、殊當地へ妻子引越、堪忍誠奉公之至、無比類候、因茲爲重恩、竹石(小縣郡)之内拾五貫文出置候、猶依忠節一所可出置者也、仍如件、

天正十一年(癸丑)

十月十三日(未カ)

昌幸 朱印

長井權助殿

十五日子、甲月食、

〔兼見卿記〕

五

十月十五日甲子、今夜月蝕、九分、酉ノ初刻歟、〇下

〔言經卿記〕

四

十月十五日甲子、天晴、月蝕、

筑前高祖ノ原田信種、同國志摩郡ノ地ヲ烏越刑部丞ニ加フ、

〔兒玉韞採集文書〕

〇二 筑前

北崎之内(志摩郡)なるの蘭名之事壹町、大屋敷相副爲御加恩被仰付候、彌馳走肝要

候者也、

天正十一年

松隈越中守

十月十五日

種正判

禪定寺

天正十一年十月十五日

一八一

名たるの蘭

天正十一年十月十六日

鳥越刑部丞殿○改正原田記附録同ジ

周林判

一八二

十六日、乙丑三河形原ノ松平家忠歿ス、

〔家忠日記〕四 十月十六日、乙丑略、○形原紀伊守死去候由候、

〔形原松平記〕(家忠) 甲州御陳之事、紀伊守様、又七郎様御父子御立被成、御組頭酒

井左衛門尉(忠次)と也、信長様ハ木曾路を御押被成、權現様ハ駿河路を御押候、山

道被成御入、小山田と申者、四郎殿を我ウ城へ御移り被成候(程脱力)ふと、深く御約

束申、其後心替仕、四郎殿を甲州郡内へ入不申、たて出し申候、無詮方天目澤

比會下ふて御腹被召、下々ハ散々ハ罷成候、御合戦もさく其陳御引取被成

候、前紀伊守様者御陳の納也、御年三十六、形原ふて御果被成候、又七郎様御

陳始也、此合戦之年號ハ天正十壬午三月十一日、武田勝頼切腹也、

〔譜牒餘録〕四十一 松平豐前守 一家忠代

永祿七甲子年、參州吉田城主小原肥前守(實長)を、家康公御攻之時、了念寺口ニ

家忠岩を構相戦候、則吉田落城、其々御手ニ入申候、

永祿十二己巳年、遠州掛川城ニ、石川日向守家成被差置候時、家忠ハ真蟲

家忠形原ニ歿ス

家忠ノ履歴

吉田城攻撃

塚と申處ハ敵防ニ被仰付、首尾能鎮申候、

元龜年中、遠州小山城を請取可申旨被仰付、罷越候、

右同比、遠州小笠山と申所ニ、取出を構申候、此節ハ總人數を被遣、家忠も

參候、

元龜三壬申年十月、遠州二俣城を武田信玄より攻時、家忠加勢被仰付、罷

越候、此時城代青木又四郎を被籠置候處、甲州方以大勢嚴數日責之、又四

郎難保付而乞和、城を渡し、士卒無恙引取候、依之味方原大菩薩と申所ニ

て家忠家來松平新介(新助)を信玄ハ人質ニ遣申候、又甲州方ハも人質を取ル

ハし候、其名ハ知不申候、

同年十一月廿二日、味方原合戦之時、供奉仕相働候、

天正三乙亥年五月、參州長篠合戦之節、組頭酒井左衛門尉(忠次)と共に、松平上

野介、紀伊守等ニうらかけ被仰付、先掛仕、設樂より出、野田川を渡、鹽澤、吉川

所々難所を越へ、鳶巢山之下ニ取出二構申候、其節長篠城代ハ、奥平九八

郎信昌、加勢ハ、鵜殿八郎三郎、松平彌三郎、右三人被籠置候處、武田勝頼出

張頻攻之、此時松平上野介、紀伊守兩人共敵之砦を燒拂、得勝利申候、其節

天正十一年十月十六日

一八三

二俣開城

三方原役

長篠役

天正十一年十月十六日

一八四

甲州陣

分捕數多有之候得共、皆討捨し仕候、

天正十^壬午年、甲州陳之節、紀伊守家忠、又七郎家信父子共ふ、酒井左衛門

尉組ふて罷立候、其外御出陳不殘御供仕候、○寛永諸家系圖傳、松平家忠傳異事ナシ、

〔寛政重修諸家譜〕

二十 松平形原

家廣 又七、今此呈

家忠 左太郎、又七

家信 初家副、紀太郎、又七、
早稲字、又七、今の、紀伊守、

家忠 母、忠政の女、永祿七年、吉田乃城主小原資良を攻たまひしと記、家

忠、了念寺口より砦を構へて、まをく相せし、相せし、十二年五月、遠江國掛川城を攻とり給ひ、家忠より仰て、今川氏眞を伊豆國戸倉へ送りしめ給ふ、此月、鈞命よりて、石川家成を掛川城をまゐり、家忠ハ馬伏塚乃要害、守は、元龜三年十月、武田信玄遠江國二股城をせむ、家忠援兵として發向せしに、甲軍多勢を以て急ふせめしかと、城代青木又四郎某、和を乞て城を避け、お、お、お、にをいて、家忠も三方原乃大菩薩といふところふて、質をせりかたす、家臣松平新介廣房、質と取りて武田の陣よりいとは、十二月

二十二日、三方原此合戦も軍忠を勵まは、天正三年五月、長篠乃役もは、松平上野介康忠と、を、に、酒井忠次より副將を先かきして、鷺巢山乃要害をせぬをぬき、あまよ此首級を得たり、此ち仰をうきたるは、は、遠江國小山城をとり、同國小笠山より砦をかまへて、おは、お、守は、十年七月、甲斐國にうちいらせを、お、ひしよは、男家信とも、お、忠次より部下に屬す、其餘御出陣おとに、お、お、お、十月十六日、形原にをいて死す、年三十

六、法名淨雲、妻は酒井雅樂頭正親の女、

〔丹波松平家譜〕家忠 左太郎、後又七郎ト云、後又紀伊守ト改ム、家廣ノ嫡子

ナリ、母ハ水野氏、天文十六丁未年某月日生ル、

永祿六癸亥年十月、一向門徒參州ニ蜂起シ、家康公ニ敵對ス、累世恩顧ノ家

人等モ彼ニ與シ、野寺、佐崎、土呂、針崎ノ邊ニ砦ヲ構ヘ、攻戰ヲ專トス、唯松平

一家ノ輩ニハ、我家忠ヲ始トシテ、竹谷家清、玄、番、福釜康親、右、京、深溝家忠、主、殿、

助、藤井信一、勘、四、此等ノミ心ヲ變セ、ス軍忠ヲ勵ス、

同七甲子年、家康公參州吉田ノ城ヲ攻ム、家忠吉田龍拈寺口ニ砦ヲ構ヘテ

敵ヲ防ク、時二十八歳、

天正十一年十月十六日

一八五

家忠十年ノ説

一向一揆

天正十一年十月十六日

一八六

同十一戊辰年、家康公遠州宇津山ノ城ヲ攻ム、小原肥前守某防戦ニ疲レテ
逃去、此時一書ヲ家忠ニ賜フ、其詞ニ云ク、

入手^(番名郡人出)被陣取之由、不相屈儀共候、早速宇津山城被相移、番普請等可被
仕候者也、仍如件、

二月十日

御朱印 圓形

松平紀伊守殿

同十二己巳年五月、今川氏眞遠州掛川ノ城ヲ落テ、北條氏政カ許ニ赴カン
トス、家康公、義元ノ好ミヲ存セラレ、小田原氏政居城ニ送ラシメ給フ、時ニ
家忠命ヲ受テ、氏眞ヲ送り、伊豆州戸倉ニ至ル、或云、此時石川日向守家成ヲ
命^ニ命^ト、遠州蝮蛇塚^ニ家忠^ハ以^テ伏^ル、敵^ヲ防^カシメ、悉^ク擊^退ト云々、又^ハ或^ハ氏眞ヲ
送^ルト、蝮蛇塚ノ事^トハ、以^テ家^廣勸^トス、然^レ共、十一年宇津山ノ御書モ、
此^ニ紀^伊守^ニ賜^ハル^事、但^シハ、父^子同^時ニ^此命^{アル}ナ^ラハ、其^以後^ヲ送^ルタル^ハ家^忠ニ^シテ、
中^ニ收^メ録^ス、但^シハ、父^子同^時ニ^此命^{アル}ナ^ラハ、其^以後^ヲ送^ルタル^ハ家^忠ニ^シテ、
蝮蛇塚ノ功^ハ、家^廣ナ^ルヘ^キカ、
元龜元庚午年、家康公小笠山ニ砦ヲ構テ、高天神ヲ攻ム、家忠此役ヲ勤ム、或
高^神ノ^近邊^ナリ^ト攻^シ、爲^ニ、大^サカ^ト云^所ノ^落城^スト^イヘ^リ、
同三壬申年十月、武田信玄遠州二俣ノ城ヲ圍テ、緊ク攻メ、城兵青木又四郎

某保チ難シ、時ニ家康公、家忠ニ加勢ヲ命シ玉フ、程ナク青木和ヲ乞テ、互ニ
質ヲ納テ引退ク、我家ヨリモ味方原大菩薩ト云所ニ於テ、新助廣房ヲ質ト
シ出ス、勘右衛門、此役ニ、家臣小笠原久大夫某ト云者戰死ス、武田カ質、姓名
役^ス、名^{アル}者^ノ由^ヲ云[、]或^云、此^是歲^{十二}月[、]遠^州味^方原^ノ役[、]家^忠軍^功アリ、^詳
ナ^ル傳^説、
天正三乙亥年五月、或云、二、武田勝頼カ兵、奥平九八郎信昌カ楯籠ル遠州長
篠ノ城ヲ攻ム、鶴殿八郎三郎某、松平彌九郎景忠、命ヲ奉テ奥平ニ加ハルト
イヘ共、武田カ兵急ニ攻ム、時ニ酒井左衛門尉忠次、松平上野介康忠、我家忠
ト相共ニ、長篠山ノ險難ヲ踰ヘ、深谷ヲ涉テ、鷲巢山ニ上リ、或云、設樂ヨリ田
鹽澤吉川所々ノ難、武田カ兵ノ後ロヨリ急ニ進テ攻戦フ、^參州^ノ俗^ニ、家^忠
我兵ニ告テ云ク、今日ノ戰太ハタ急ナリ、首級ヲ論スルニ暇アラス、手ニ從
テ擊棄ヘシト、是故ニ數多ノ敵ヲ討取ト雖共、家臣等令ヲ守テ功ヲ顯サス、
但シ松平但馬貞治、松平新助廣房、坂部藤藏、市川甚五郎、角田久右衛門、市川
次大夫等戰功アリ、時ニ戸田半平ハ甲冑ヲ脱キ、長篠川ニ水垢離トリ、再又
甲冑ヲ著シ、山上ニ進ミ登テ敵ト組合、谷底ニ陥リ、遂ニ其首ヲ得タリ、家康

天正十一年十月十六日

一八七

天正十一年十月十六日

一八八

公遙ニ見玉ヒテ、ソノ働ヲ賞セラル、後年幕下ニ召出サル、是戸田備後守重利カ高祖父ナリ、

家忠ノ室

天正十午年、或云三月家忠命ヲ受テ、酒井左衛門尉忠次ニ屬シ、甲斐州ノ役ニ赴ク、嫡子家信隨從ス、是家忠出陣ノ終ニシテ、家信ノ初陣也、家信時ニ十七歳、或云味方ノ兵イマタ甲州ニ著セサル前ニ、武田已ニ敗亡ス、故ニ戰ニ及ハス、是歳十月十六日、形原ニ於テ卒ス、時ニ三十六歳、夫人ハ酒井雅樂助正親ノ女、河内守重忠ノ妹、備後守忠利ノ姉也、寛永十五年三月二十五日、下總州佐倉ニ於テ卒ス、時ニ九十三歳、男子一人、女子二人、嫡子ハ家信ナリ、女子一人ハ參州ノ住足助某ニ嫁ス、足助ハ一人ハ加賀爪甚十郎某ニ嫁ス、家康公岡崎在城ノ時、年始ノ禮、諸初出禮、著座ノ次第アリ、五人衆アリ、傳説多シ、七人衆ハ一云安祥、是我家也、

是ヨリ先、大友義統、豊前ニ出陣ス、是日、是則ノ砦ヲ攻メテ之ヲ拔ク、

〔大友家文書錄〕

義統 義統授書于衛藤統門、小佐井藤十郎、以告軍事、先是

命其出勢事於諸士、未定其期、是出勢未詳何處、按言豊前進發乎、

各出張之儀、先日以著到申候、然者先陣衆之事、昨日廿六、以乘陣、今日一動可相催之通注進到來候、今一左右次第、日限之儀聞次衆迄可申出之條、

被聞合、不移時日、出陣肝要候、聊不可有油斷候、恐々謹言、

九月廿七日

義統 在判

衛藤又右衛門尉殿

古後玄蕃允

十六日、義統在豊前、攻是則砦、是毛郡水尾陷之、古後玄蕃允負創獲首級、其被官二人、小田民部少輔僕從等亦被創、

今度豊前國發向之刻、從最前在陣、殊前十六、是則切寄挫候之砌、分捕高名被疵、同被官兩人被疵之由、旁以軍勞無比類候、感入候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日

義統 在判

古後玄蕃允殿

義統 小田民部少輔ノ被官ノ是則ニ於ケル、戦功ヲ褒スルコト、九月二十四日ノ條ニ見ユ、

十七日、丙寅德川家康、三河二連木ノ戸田康長ヲシテ、同國深溝ノ松平家忠ニ代リテ、駿河江尻城ヲ守ラシム、

〔家忠日記〕 四 天正十一年十月、

十七日、丙寅江尻番松平孫六郎ニ渡シ候て、島田迄歸候、

○家忠、西郷家員ニ代リテ、江尻城ヲ守ルコト、九月七日ノ條ニ見ユ、

天正十一年十月十七日

一八九

天正十一年十月十八日

十八日、武藏長傳寺住持存應源ニ香衣ヲ賜フ、

〔増上寺文書〕一

著香衣、令參内、宜奉祈寶祚延長者、依天氣執達如件、

天正十一年十月十八日

長傳寺住持源譽上人御房

萬里小路充房
左中辨〔花押〕

一九〇

文のやうひろうして候へハ、あうぬんまつ寺むさしのくにちやうてん寺
ちうしけんよまゆつせ事、ちよつきよよて、めてとく候、うさいとしハ、まて
のこうち辨よて候よし申とて候、かしく、

〔参考〕

〔三縁山志〕九

尙

十二世中興貞蓮社源譽上人普光觀智國師存應慈昌大和

采

同十一年十月十八日、勅して香衣上人を賜り、長傳寺名、又生實大巖寺世四岩瀬大

羽柴秀吉、毛利輝元ノ弟穂田元清ニ書ヲ送リテ、其物ヲ贈レルヲ謝シ、

安國寺惠
環

併セテ、伊豫來島ノ村上通昌ノ歸國ヲ報ジ、其所領ヲ舊ニ復センコトヲ
求ム、

〔諸將感狀下知狀并諸士狀寫〕一

雖未申通候令啓候、抑今度貴國此方入魂申付而、各御上國候、就其御太刀一
腰馬一疋并銀子百枚贈給候、怡悅之至候、隨而來嶋歸國之儀、委細對（惠環）安國寺
申渡候條、領知者如先々無異儀、様御馳走專要候、殊貴所御間柄之由候條、別
而可被入御精事尤候、猶峰須賀（正勝）、黒田（孝高）可申候、恐々謹言、

十月十八日

秀吉 御書判

穂田治部（元直）太輔殿 御宿所

○通昌輝元ノ屬將村上武吉ト戦ヒ、敗レテ京都ニ走ルコト、十年六月
二十七日ノ條ニ、輝元武吉ニ、通昌歸國ノ風説アルモ許サル旨ヲ告
グルコト、本年十一月十一日ノ條ニ見ユ、

十九日、（成）京都ノ奉行前田玄以、雲母座座人ノ外、雲母ノ賣買ヲ禁ズ、尋
デ、博多打座モ亦、座人以外ノ者ノ猥ニ之ヲ打ツヲ禁ズ、

〔天正十一年折紙跡書〕

路○淡

天正十一年十月十九日

一九一

天正十一年十月二十日

一九二

雲母座事、任本所之補任之旨、如座法可有其沙汰、若座人之外、仁於令賣買輩者、急度可申付之狀如件、

天正十一

十月十九日

雲母座九人中

博多打事、座中、無案内打之輩在之者、如（并長軒）春長軒折昏、可加成敗之狀如件、

天正十一

十月廿二日

博多打座中、○玄以法印下知狀
轉多打座ニ作ル

二十日、（記）上杉景勝ノ老臣直江兼續、越後根知城將西片房家ニ、物ヲ贈レ
ルヲ謝シ、益守備ヲ嚴ニセシム、

〔歷代古案〕 六

就御納馬早々御書中、殊御樽肴送給、快然之至候、其口彌無事之由、肝要候、雖無申迄候、御番御不審等、不可有御油斷候、恐々謹言、

直江

兼續

十月廿日

西方二郎右衛門殿

大友義統、筑後長岩ノ問注所統景ノ忠節ヲ賞シ、明春其地ニ出兵センコ
トヲ告グ、

〔問註所町野氏家譜〕

○筑 鎮連嫡男
三善統景 問註所 刑部太輔

一國一人
ノ忠意

對朽網（宗歴）三河入道口能之趣、具令承知候、數度如申候、近年統景事、一國一人之忠意、粉骨之次第、誠ニ無比類存候、然者此度出勢之方角、依相違、統景地盤雖無別儀候、親類家中之人等存分之旨在之由ニ候、得其意候、縱組惡逆無道之族、一旦成恣之振廻、爭ウ可爲順路候哉、筑芴表於屬案利者、統景安堵不可有疑候、且鑑豐忠儀連續、且連々之懇忠、倍無變他者、忠孝之掟可爲此節候、歟、明春之行既ニ不可有餘儀候條、至右之衆中被加諫、彌貞心之覺悟、肝要候、雖無申迄候、前後之得失能々有思惟、每事無緩御才覺賴存候、仍而銀子百疋目先以進申候、猶宗歴可申候、恐々謹言、

天正十一年十月二十日

義統公 御判

天正十一年十月二十日

一九三

天正十一年十月二十一日

問註所刑部(統景)太輔殿

一九四

正月義統
八日田表
ハ田兵ス
ベシ

其表立柄重々示給、得其意候、數度如申候、今度忠儀(義)之次第難盡筆舌候、彌可被勵懇忠事頼存候、然者正月八日必至日田表發足之儀、定候、其間之儀、別而粉骨專一候、仍而黄金一枚進之候、顯寸志候、委細之趣者、猶浦上長門入道可申候、恐々謹言、

天正十一年十二月八日

義統公 御判

問註所刑部太輔殿

追而、

就請地之儀、口能之趣令承知候、今度一國一人之忠儀、無比類之條、何様可申談候、明春者可爲發足之條、於陣所重々承可得其意候、爲御存候、恐々謹言、

天正十一年十二月八日

義統公 御判

問註所刑部(天)少輔殿

二十一日(庚)午、德川家康、甲斐ノ岩間善藏ヲシテ、養父大藏左衛門尉ノ跡ヲ

請地

高納
定

繼ガシム、

〔古文書〕

○岩間善九郎正明拜領、今福伊織勝巳書上、

甲州本領善藏讓置上者、彼善藏本領村上下鹽田拾八貫文、國玉五貫文、花輪五貫文、かゝ美夫錢十五貫文、高四拾三貫文、此定納參拾七貫八百文等之事、

右領掌不可取相違、此上者於甲州奉行共相談、不憚親疎、萬事可申上者也、仍如件、

天正十一年未

十月廿一日

御朱印

岩間大藏左衛門尉殿

二十二日(辛)未、紀伊根來寺、物ヲ本願寺光佐(顯)及ビ其子光壽(教)ニ贈ル、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

○山城

一十月廿二日、歟、根來寺惣分より大樽

甘荷肴三種、こふ、こんやく、柿(ひけ)使ハ右筆トテ良永、一段ハシリマヒノ人也、織色ノ小袖ニ直綴ヲキル、御門跡様御對面、御さうち二獻、サウメンア

天正十一年十月二十二日

一九五

天正十一年十月二十二日

一九六

リ、御相伴主水刑部卿

同日、新門様惣分より御禮三百疋、これも御對面、御くきやうの由候て、御盃まいる、御相伴同前、

○光佐、物ヲ紀伊ノ湯河直春ニ贈ルコト、便宜左ニ合致ス、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

○山 十一月十八日御書ノ御日付也、

一紀伊國奥郡湯河中務大輔直春、此頃

御無音也、泉州へ御出ニ付而、御音信をさるゝ也、まづ、當年々頭之祝儀一腰千疋、息次郎太郎元服ノ祝儀鳥目五百疋、コノ元服ハ去年之時分也、又次郎太郎へ御書、一腰五百疋、元服之祝儀也、使者宮部一兵、宮一兵煩出候て、下向延引、今度大形ノ御影様紀州御坊へ御下向也、松江源三大夫罷上、

島津義久、伊地知雅樂助ヲ肥後ニ遣シテ、在陣諸將ノ勞苦ヲ犒ヒ、島津忠長ニ老中役ヲ命ズ、

〔上井覺兼日帳〕

○十一日 十月、

一廿二日、○中略、堅志田攻談合ノコトニカ、此日從鹿兒島、伊地知雅樂助殿をもつて被仰候、各寒中在陣殊ニ度々働辛勞候、御禮也、條々堺目御行之

使者ノ病
延引ス

老中役

事被仰候、并圖書頭殿老中役可被仰付之由也、吉日次第爰元よて早々可

申入之儀あり、○覺兼、茶湯ヲ催スコトニカ、ル、

一廿三日、別而看經共仕候、伊地知雅樂殿昨日御意趣者、忠棟同前被仰候、猶

細々可承之由ニ而被來候て、條々其外御物語之儀共多々承候也、○下略、

等、酒ヲ覺兼ニ贈ルコトニカ、ル、

一廿四日、別而地藏井看經共仕候、圖書頭殿へ老中役頼之由、伊地知雅樂助

を以被仰出候、御異見共被成候する間、喜入式部（久通）太輔殿相添被成候、乍勿

論一二ヶ條之分よて、何ウ御領掌候する、重而御佗被成候する由也、○下略、

兼、赤星某等ヲ招キ、酒宴ヲ催スコトニ

一廿五日、早朝伊地知雅樂助殿歸宅候間、於忠棟御宿同前ニ御返事申候、秋

月殿返事上意之儘ニ申候、兩使納得申、殊之外大慶之氣色見得候、○秋月

者ヲ島津義久ニ遣シテ、龍造寺隆信ト和セン、殊ニ田尻へ被著候諸陣も

曳せ候する由申候て、既ニ田尻殿此等之一通爲引付、我々の連署請取歸

候由申上候也、田尻へ荷籠輒事成由申候也、○島津氏、田尻鑑種ニ糧食ヲ

見ニ、有馬へ渡海之事、龍造寺へ和平之儀被仰組候て、寄合中罷居候處よ

天正十一年十月二十二日

一九七

使者鹿兒
島ニ歸ル

田尻へノ
援軍ヲ班

有馬へ渡
海

天正十一年十月二十三日

一九八

り、人數差渡一働仕候てハ、覺こ可惡之由候間、其外稻留新介よて彼方へ
申理之由也、○中略、堅志田攻ノコトニ見ユ、
一廿六日、○中略、忠棟、覺兼等、茶ノ湯ヲ催スコト等、圖書頭殿老中役御當
目出由申候て、彼御宿へ參候、ル、○忠棟、茶ノ湯ヲ催スコトニ見ユ、
十一月、

一廿二日、○中略、覺兼、深水三河守ニ一萬句連歌ノ發句ヲ麟臺よりも御使
預候、御加判役之儀御あより被成候、涯分御佗御申候する間、吾々までも
御頼之由也、○下略、覺兼、忠棟等、歸國ノ事ヲ談合スルコ
○義久、肥後ニ、家久、忠棟等ヲ遣スコト、八月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十三日、申、壬駿河三枚橋ノ松井平松康次、矢部清三郎ヲシテ、吉原渡舟ノ修
理料勸進ノ事ヲ安堵セシム、尋テ、同國興國寺ノ松平清宗モ亦清三郎
ヲシテ、之ヲ安堵セシム、

〔矢部文書〕

河○駿

吉原湊渡舟破損修理之事、拙者知行中壹升勸進之儀、如先例之不可相違若
於難澁猶可申付者也、仍如件、

加判役

渡舟修理
勸進ノ一升

天正十一

拾月廿三日

康次

黑印

矢部清三郎殿

吉原湊渡舟依修理、沼津之知行分之内壹升勸進之事、如先規不可相違、若於
難澁之輩者、猶可申付者也、仍如件、

天正十一未

松平康次

黑印 十月廿四日

矢部清三郎殿

吉原之渡舟修理之儀ニ付而、知行分壹升勸進之事、不可有異儀候、違亂之者
候ハ、可申付者也、仍如件、

朱

十一月廿六日

清宗(花押)

矢部殿

○康次、矢部清三郎ヲシテ、吉原ノ傳馬屋敷、舟越屋敷等ヲ安堵セシム

天正十一年十月二十三日

一九九

ルコト、十二年十二月二十八日ノ條ニ見ユ、

肥後八代ノ守將伊集院忠棟、上井覺兼等、議シテ有馬赴援ヲ止ム、是日、使ヲ肥前日野江ノ有馬鎮貴ニ遣シテ、之ヲ告ゲ、

〔上井覺兼日帳〕〇日向 十月、

島津義久
覺兼ノ赴
援ヲ鎮貴
ニ報ズ

島津氏龍
造寺氏ト
和スルニ
依リテ有
馬赴援ヲ
止ム

稻富新介
有馬ニ使

一十四日、〇中略、津浦某、覺兼ノ在陣ヲ見舞フコト、有馬殿ヨリ使書マテ、彼表之儀拙者渡海之由、うぶしぬ方承被成候間、万端頼由也、有馬右衛門一兩日已前指渡、爰元談合之様子具申入候間、不能重言之由、返事申候也、一十七日、如常、典厩於御宿談合也、新右、税新、上長、彼三人使マテ候、條數御神慮之事、有馬渡海之事、隈庄口之事、〇名和顯孝、隈庄ヲ攻ムル條ニ見ユ、秋月御返事之事、此等之儀共也、〇下略、堅田攻ノコトニカ、

一廿二日、如常、於忠棟談合也、有馬表渡海之儀者、秋月殿媒介マテ、龍造寺ヨリ和平之儀被仰組上者、無用之由相定候、當者此等之條有馬へ被仰越候、マテハマテ候間、稻富新介使ニ可被差渡由被仰付也、〇下略、堅田攻ノ條ニカ、

一廿三日、〇中略、義田左衛門、覺兼ニ酒ヲ贈ルコト、有馬殿へ稻富新介被

指渡由之書狀連署ニ認也、〇下略、覺兼、忠棟等ト酒宴ヲ催スコトニ

十一月、

一七日、〇中略、花山岩普請ノコト等ニカ、此夜小野へ宿候、稻富新介被來候、有馬表様子一昨日細々承候つれども、忠棟會尺又者餘ニ繁多之條、委承ましく候間、具ニ可語之由也、此表之儀龍造寺と和睦被成候而ハ、一圓ニ笑止之由、有馬殿存分之由也、併爰許御校量次第之儀也、其外此方之番衆中意分共委物語也、

〇義久、家久等ヲ肥後ニ遣シテ、有馬救援ノコトヲ議セシムルコト、八月二十四日ノ條ニ、秋月種實、島津氏ヲ説キ、龍造寺氏ト和ヲ講ゼシムルコト、九月二十七日ノ條ニ見ユ、

二十四日、〇是ヨリ先、本願寺光佐、顯如、攝津有馬ヨリ歸ル、是日、使ヲ大坂ニ遣シテ、羽柴秀吉ニ物ヲ贈ル、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

〇山 一、〇中略、光佐、有馬入湯ノコトニカ、十月十四日、御あり、小濱御とまり、十五日、堺御坊御一宿、十六日、貝塚御歸寺、

一十月廿四日、御書アリ、筑州へ湯山御ミヤケトテ、錫甘對、木地ノ食籠、五、湯山ノ引

新介八代
ニ還ル

有馬土産
挽食物木地
ノ食籠

天正十一年十月二十五日

二〇二

物也、淺野彌兵、石田佐吉へも御音信あり、綿十把ッ、歟、御使河野越中、

○光佐、有馬ニ入湯スルコト、九月二十五日ノ條ニ見ユ、ナホ興正寺佐

超室冷泉氏、山科言經ニ物ヲ贈ルコト、便宜左ニ合致ス、

〔言經卿記〕

四 十月廿三日、壬申、晴陰、

一興正院西御方ヨリ、便宜湯治ミヤケトテ、予ナツメニ、北向へ油桶、阿茶丸
印籠等給了、

廿四日、癸酉、天晴、

一興正院西御方へ返事申了、

二十五日、^甲羽柴秀吉、使ヲ遣シテ、徳川家康ニ鷹ヲ贈ル、

〔武徳編年集成〕

六二

天正十一年十月廿五日、羽柴筑前守秀吉ヨリ、神君

へ檄書ヲ送ル、

秀吉ハ家
康ヲ援助
スベシ

從甲州御歸城之由候間、以一翰申入候、仍信州御手置等丈夫被仰付候由、
肝要存候兼而又關東者無事之儀被仰調候由、被仰越候、乍去于今御遲延
ニ候、如何様之儀ニ而御座候哉、最前上様御在世之御時、何^{信長}無御疎略方
々ニ候間、早速御無事モ被仰調尤候、自然何角延引有之仁御座候者、其趣

被仰越候者、御談合申、急度其御行可有之候、隨而日向巢鷹弟鷹爰元ニ者
珍敷候間、進上候、從九州近日鷹可上候由候間、重而可進之候、委細之段西
尾小左衛門申含候、恐々謹言、

羽柴筑前守

十月廿五日

秀吉

^(徳川家康)
參河守殿人々御中

○秀吉、使ヲ遣シテ、家康ニ太刀ヲ贈ルコト、八月六日ノ條ニ見ユ、

上杉景勝ノ老臣直江兼續、越後木場ノ守將山吉景長、蓼沼友重ニ書ヲ與
へテ、警戒ヲ嚴ニセシム、

〔岡本文書〕

二 羽後

急度以飛脚申候、仍井與才覺之分者、去月下旬築地之域、自本庄則申近邊放
火之由候、如何無御心元候、重而人を指遣、様子具被聞届、御注進待入候、扱亦
從新潟寄居闕落之足輕番内与云者、其元ニ許容之由候、更無勿躰事、自然之
儀出來候者、後悔曲有間敷候、早々何方へも被越尤候、非此而已、自境目落來
聊爾扶持有間敷候、其元無爲付而も、彌無嫌日夜之物每被入念、御用心普請

天正十一年十月二十五日

二〇三

本莊繁長
築地ノ城
ヲ占領ス

新潟ノ寄
居

境目ヨリ
落來ル者
ハ扶持ス

天正十一年十月二十五日

二〇四

肝要候、雖無申迄候、不隔旁々より下筋へ人を指越せ候、彼口之模様兼日善惡共ニ□□雖□爲指義無之候、有油斷其際ニ成候て者、何事を注進申上られ候て、無人無手ニ候、少之儀も兼而被申上、御心持こも、御備こも罷成様之御分別尤候、爲其一筆令啓之候、恐々謹言、

直與

兼續(花押)

拾月廿五日

(山吉文善九景長)
山玄

(龜沼藤七友重)
藤藤

○築地資豐、景勝ニ背キテ、新發田重家ニ通ズルコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、

小早川隆景備前ノ冷泉元滿ニ、蜂須賀正勝等ノ、近ク境界決定ノ爲メニ下向スベキヲ報ジ、守備ヲ嚴ニシテ、徒ニ騷擾スルコト勿ラシム、

〔萩藩閔閱録〕百二ノ二
冷泉五郎

就其境傍爾之儀、蜂須賀有同道、安國寺、林山城守下向之由到來之條、手嶋東市助差上候、諸城諸郷之落著、以有躰之儀、檢使差出可相澄候間、聊無仰天被

相靜、堅固之御在番可爲肝要候、猶元清可申談候、恐々謹言、

左衛門佐

隆景 御判

十月廿五日

(元備)
冷泉民部少輔殿 御番所

二十七日、丙延曆寺定泉坊詮舜、大和國衆ヲシテ、日吉二宮造營ニ奉加セシメントシ、給旨ヲ筒井順慶ニ賜ハラン様奏請セラレンコトヲ、青蓮院尊朝法親王ニ請フ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲百九
延曆寺

是迄三
天正十一年十一月十四日

就日吉二宮造營之儀、大和一國之人民普奉加之事、被宛筒井順慶、被成下御給旨候之様被達奏問、速於蒙勅許者、莫太之御興隆可奉存忝候、御倫旨之儀、相原七郎左衛門尉仁申聞候之處、尤肝要之由存知候、然者本願觀音寺仁被仰調被下候之様、御披露所仰候、猶委曲法光房可得尊意候、恐惶謹言、

十月廿七日

詮舜(花押)

定泉坊

天正十一年十月二十七日

二〇五

天正十一年十月二十七日

應務御坊

詮舜

二〇六

○詮舜、大和國衆ヲシテ、延曆寺再興ニ奉加セシメントシ、青蓮院尊朝法親王、三千院最胤法親王、曼殊院良恕法親王ニ、令旨ヲ順慶ニ賜ハラシコトヲ請フコト、十二年二月二十二日ノ條ニ見ユ、

本願寺光佐顯、私ニ使ヲ和泉堺ニ遣シテ、吉川經言廣家、小早川元總秀包ニ物ヲ贈ル、尋デ、經言、元總、之ニ答フ、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

城○山

一藝州衆小早川藤四郎、吉川經言又次郎、筑

州へ爲一禮堺在津、此方ヨリ御音信アリ、内々ノ儀、大多和宗兵才覺云云、

御門跡より右ノ兩所へ、御太刀一腰ツ、馬代同并綿廿把ツ、十月廿七、

大多和河内守へ綿五把、鳥目三百疋、上様如卷より小袖一被遣之、御使平井主

水佑、安國寺ハ所用ニ付而下國云々、此度不及御音信也、井上民部少輔へ

綿五把被遣之、有馬土產ヲ贈ル條ノ次ニアリ、○本條、十月二十四日、光佐、秀吉ニ

一十一月一日、吉川藏人ヨリ先日ノ爲御返禮、使者森脇又右衛門尉、太刀一

腰、段子十卷、御對面、さい物一獻、御相伴主水、刑法、

一二日、小早川藤四郎ヨリ爲使者、桂民部大輔、自分ニ參衆、粟屋四郎兵衛、大

安國寺惠
瓊下國ス
トノ説

多和河内守、藤四郎殿ヨリ太刀一腰、段子十卷、御返禮也、御門跡御對面、肴一獻飯アリ、御相伴客人三人、主水、刑法、

○經言、輝元ノ質トシテ、大坂ニ赴カントスルコト、九月七日ノ條ニ、元總、經言等、秀吉ニ謁スルコト、十一月一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、西毛利輝元、粟屋元信ヲシテ、父元眞ノ後ヲ嗣ガシム、

〔萩藩閥閥録〕

七十三 粟屋孫次郎

父掃部助當知行分之儀、任讓狀之旨、全令領知、可抽奉公之忠者也、仍一行如件、

天正十一年十月廿八日

輝元 御判

粟屋孫次郎殿

給地之事

一 豐嶋之内正兼名

四反公田

一 同所之内四くら丸半名

壹町平田

一 吉田中村之内彈正給

壹町平田

天正十一年十月二十八日

二〇七

正兼名
公田丸
四くら
半名
平田
彈正給

天正十一年十月二十八日

二〇八

地頭分

貫石

- 一 吉田中村之内五反田
 - 一 山手之内ひそい末長
 - 一 土師あいぬさ
 - 一 山縣石井谷村除跡一圓
 - 一 備後黒川地頭分
 - 一 山里之内小枝津田
 - 一 防州山口之内市川彈正給
 - 一 伯州之内西尾津戸分
 - 一 雲州之内宇治原手郡之内
- 以上
- 五反平田
五反平田
四反平田
但五拾七貫五百前
貳拾五石前
三拾貫前
廿六石五斗定 并屋敷共こ
七拾石
五拾貫

天正十一年十月廿八日

粟屋掃部助元眞

粟屋孫次郎殿

〔附録〕

〔萩藩閥閥録〕

百四十一
島田智庵

周防國吉敷郡内四石壹斗足長門國美禰郡秋吉別府之内隨得名拾石足同

秋吉別府
隨得名

三隅莊
足地

所社家半濟公田壹段等同國大津郡三隅庄之内三石九斗足地等之事對女子竹鶴讓與之公役名代之儀國司飛驒守三男助九郎契約之由承知畢者右之地之事竹鶴女相續領掌不可有相違之狀如件

天正拾一年十月廿六日

輝元 御判

島田武通

島田肥後守殿

島津忠長、伊集院忠棟等、若ヲ肥後花山ニ築キテ、堅志田ニ迫ル、

〔上井覺兼日帳〕

○日向 天正十一年十月

- 一 十日、如常、各平田殿へ被揃、諸界目之談合也、○覺兼等、茶湯ヲ催スコト、
- 一 十一日、如常、忠棟於御宿各談合也、圖書頭殿御出也、堅志田口之御行御談合也、凡御圖次第之由定候也、○下略、鷹尾ニ糧食ヲ輸送スルコト
- 一 十七日、○中略、征久等、有馬渡海ノコト等ヲ談合ス、此朝大口郡山寺御祈念被成、堅志田口御著陣之御圖申被成、一ナラハ御陣、二ナラハ御働、今少御思案入へく候ハ、日圖如此御申さる、日圖あり候也、○忠棟等、妙見

附録ニカ、ル、本條ニ收ム、

一 廿二日、○中略、島津氏、有馬鎮貴ニ、島津龍造寺兩條ノ和平、堅志田口之事、

天正十一年十月二十八日

二〇九

圖ヲ取ル

天正十一年十月二十八日

二一〇

小分限ノ
衆ヲ歸陣
トセシメ
ス

拵取之御鬪者不下候間、御働近日中可然ニ相定候、談合衆新武伊野州上
長州、本刑稅新稻留新也、トニカ略、伊地知雅樂助、鹿兒島ヨリ來ルコ
一廿五日、ル、○中略、有馬救援ノ條ニ收ム、堅志田口之事、近陣可取を談合定
候得共、御鬪事成候、然間當庄爲ニ罷成候する、あしとの拵取近日可仕之
由也、左候而、諸軍衆不入候ハ、先々小分限衆ニ次第ニ歸候する談合仕
候由也、各事者、然々和平之儀事澄候て已後、上意次第歸陣可仕由申候也、
行ノコトニカ、ル、本條附録ニ收ム、

一廿七日、早朝より忠棟御宿より拵執ニ折立談合也、諸所衆盛ニ事果、未刻
計各打立候、忠棟ハ小川へ宿あり、我々ハ小野、守山爰ウシこニ諸軍衆此
夜ハ一宿也、

軍神勸請
始

一廿八日、早朝各打立花之山鬪取也、圖書頭殿を始、諸軍衆乘陣候、各盛を以
普請也、軍神勸請新納右衛門佐、鉄初山田新介也、此夜諸口外聞外野伏外
廻リ堅固ニ申調候也、

一廿九日、早朝より普請一返也、諸方より拵取目出之由申來候、不及記候、
拾一月、

一一日、早朝より各互ニ禮儀共申、又普請仕候也、諸口外聞外野伏等之事不
及申候、此日稅新より、平田殿へ忠棟、拙者前より申越候趣、養性氣よてい
ろ、共候哉、當拵之事大方執認候、可然見得候條目出候、然者當拵主取之
事專地下衆番より候間、濃州被成候而可然候、其下々普請等見廻候
する衆者、被仰付候する由談合候由申候也、

○島津征久等、再ビ堅志田ヲ攻メ、兵ヲ八代ニ收ムルコト、本月七日ノ
條ニ、諸將相議シ、兵ヲ留メテ花山ヲ守ラシメテ、歸國スルコト、十一月
二十三日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔阿蘇家譜〕

六 惟光 童名長
松麻呂

初メ大友義鎮、嶋津義久ト日向ノ耳川ニ戰テ敗績ス、爾後薩兵勝ニ乘シ、年
々侵掠、肥後ノ諸將士大半之ニ應シテ、義鎮制スル事能ハス、而シテ薩兵特
リ甲佐以東ヲ窺サル者ハ、天正十一年我ト和議ノ盟アリテ、此和議、且宗運
カ勇略ヲ恐ル、ナリ、然モ義陽死後、義久特ニ一將ヲ遣シテ、壘ヲ花ノ山ニ
築ク、花ノ山固ヨリ我封内益城郡ニ係ル、衆皆怒ル、宗運云、薩強敵今適和ス、

天正十一年十月二十八日

二一一

花山築壘
ニ對スル
甲斐宗運

義久阿蘇
ヲ侵サズ

天正十一年十月二十八日

我ヨリ覺ヲ開クヘカラス、況ヤ城ノ近傍皆我管内、薩軍遠ク糧ヲ運フ、是却
彼カ國力ヲ疲シテ我警ヲナスニ足ル、争フヘカラス、然モ我死セハ薩兵必
東セン、務テ一旦ノ鋒ヲ争フ事勿レ、盡ク外城ヲ棄テ矢部ニ聚リ、深溝高壘
之ヲ拒ク事三年、天下必定ル所アラン、而シテ後當ニ死生ヲ決セン而已、略

〔附録〕

〔上井覺兼日帳〕

〇十一日 天正十一年十月

一三日、〇中略、覺兼等、境目、行ノコトニツキ、談合、此晚、典厩公、忠棟へ入御也、
座躰主居典厩、御次拙者、忠棟、養田、信濃守、客居喜入式部入道太輔殿、新右衛門、
伊野州也、種々珍肴珍酒、御會尺也、御膳下同シにて打亂酒宴あり、典厩靴
と打せらる、其刻赤星殿御酒持參也、天草殿同シとも指出也、赤星殿も靴
うされ候、兎角者深更迄御酒宴也、

一四日、如常、本田刑部少輔殿より、忠棟、光宗、拙者可參之由候間、彼方よてめ
し振舞也、種々會尺共あり、此晚圖書頭殿よりも可參之由被仰候條、祇候
申候、客居栴山殿、忠棟、拙者、平田新左衛門殿、主居御亭主、平濃州、大寺大炊
介也、種々御肴よて御酒あり、御酒過候而、四帖半之座にて御茶湯也、圖書

頭殿御手前あり、忠棟、光宗、拙者御茶之座ニ參候也、左候而、臈而各同心よ
て罷歸候也、

一五日、如常、忠棟より内衆四本大學助當年上洛候、然と堺よて度々茶湯之
座ニ罷出、様子共稽古仕候、就中會席之調等承由申候間、彼調之儀之會と
る趣々候、可參之由候間參し候、奈良瓜干瓢カと種々珍物共參候、濃薄茶
共ニ忠棟之御手前也、座過候而橋普請地下役人中カせられ候、見申候、〇

一十日、〇中略、光宗宿所ニ於ケル、境目談合、此晚肝付彈兼也正忠殿より可參之
、略、諸地頭談合ノコト等ニカ、ル、本月七日ノ條ニ收ム、
由ニ候間、參候、茶湯會尺也、拙者、野村備中守、一王雅樂助、御茶極無あり、
一十二日、如恆、珠長越之由よて禮儀也、隈本よ吉田東安被來候とて禮儀
あり、新武、伊野、右之衆會尺也、終日碁將碁カにて慰候、夕食ふるまひ候也、〇

一十三日、〇中略、島津氏、鷹尾ニ使ヲ送ルコトニ
カ、ル、本月十一日ノ條ニ收ム、
汰申候間、御禮ニ參し候、成願寺可參之由承候條、伊集院掃部介殿同心申
候而參候、終日會尺也、此日又太郎殿御著也、即御酒持せられ、拙宿へ御禮

天正十一年十月二十八日

天正十一年十月二十八日

二一四

被成候、留守よて候條無是非候、

一十四日、○中略、島津氏、鷹尾ニ使ヲ送ルコトニ條ニ收ム、此晚吉利殿、川上左京亮殿、平田新左衛門殿、稻留新介殿、二階堂安房介殿、福永藤十郎殿、右之衆へめし、振舞申候、閑談共也、此日三津浦殿より使書よて、爰元逗留辛勞之由承候也、并兩種預候、○下略、有馬鎮貴ヨリ使書來ルコトニ條ニ收ム、

一十五日、夜内よて看經等申候、右馬頭殿へ御禮ニ參候、御酒御寄合也、從夫忠棟、光宗へ禮申候、肝彈へ禮申候、彼方よてめし振舞也、此日忠棟同心申、又太郎殿御宿へ參候、御酒三返也、此歸さに忠棟拙宿へ可有入御之由申候、茶湯會尺申候、忠棟、本刑、蓑田甚丞、拙者也、深更迄閑談也、

一十六日、如常、忠棟よて珠長越よて候間、一折興行可有候、一順申せ之由候條仕候て、珠長宿へ行候て尋候、可然由候而、即書被付候、彼宿ニ而御酒よて閑談也、從夫稅新宿へ禮申候、又御酒也、椋山殿、吉利殿宿へ禮申候、い此れよてを御酒也、○中略、秋月種實、島津、龍造寺兩氏ノ媾和ヲ斡旋スルコトニ條ニ收ム、

此晚肝彈へ忠棟、拙者、佐多宮内少輔茶湯寄合也、霜臺手前也、此座過候而

連歌

謠

妙見祭

歸候ニ、忠棟宿へ參候て物語申せ之由候間、參候て雜話也、謠とよて終夜戲言也、

一十七日、○中略、征久宿所ニ於ケル有馬渡海等談合ノコト及ビ堅志田攻、口圖取等ノコトニカケル、本月二十三日及ビ本日上ノ條ニ收ム、此晚忠棟よて妙見内之祭見物ニ御誘引候間、肝付霜臺、山田新介と同心仕罷出候、笠著連歌と承候、漸深更ニ罷歸候也、此夜中よりくさ振付候て、散々之躰也、

一十八日、くさ不醒候て、終日休居候、忠棟祭禮見物ニ御誘引候得共、散々之躰候間、無是非候、平田濃州社參被成、如恆例無何事御祭禮成之由、人々物語也、地下旅衆群集之儀也、所々地頭又そ一所衆とより、くさ氣如何候哉とて尋共也、○下略、名和顯孝ヨリ使書來ルコトニ條ニ收ム、

一十九日、○中略、覺兼、顯孝ニ返書ヲ贈ルコトニ條ニ收ム、此日珠長被來、終日閑談也、夕めし振舞候、

一廿日、忠棟於御宿百韻興行也、發句珠長、雲の浪遠よる月の氷り、座躰客居圖書頭殿、御次新武州吉田洞庵、伊野州奥野越前守、蓑田紀伊介、主居拙者、次珠長、忠棟、蓑田紹意、稅所新介、東四郎、右衛門也、執筆鮫島二郎三郎也、

天正十一年十月二十八日

二一五

百韻興行

天正十一年十月二十八日

深更ニ各歸也、

一廿一日、如恆、忠棟談合として御出候、新右、税新、上長、山新、めし、振舞御酒也、合志殿より使富常安へ返事山新、税新よて被仰候、此晚忠棟へ又太郎殿寄合可被成候、可參之由承候間、參候、座躰主居又太郎殿御次忠棟、本刑、蓑田、伊濃州、客居拙者、次新右市來加賀守あり、是ハ又太郎殿御内衆也、種々御酒共參候て御閑談也、

若衆中

一廿二日、○中略、秋、月種實、島津、龍造寺兩氏ノ條等ニ收ム、此晚肝付彈正

忠殿、佐多宮内少輔殿、野村備中守、右之衆へ茶湯會尺仕候あり、此夜忠棟御宿へ若衆中同心申候て、終夜閑談申候也、各沈酔こて種々戲言共也、

月待

一廿三日、○中略、伊地知雅樂助、義久ノ意ヲ覺兼等ニ收ム、蓑田左衛門御酒持之被來候也、又地下人あまゝ御酒持之被來候也、○中略、覺兼、稻留新介、書狀ヲ認ムルコトニカ、ル、忠棟宿之風呂ニ入候、此夜月待申候、伊地知、雅樂助殿御酒被持也、終夜物語也、此外若衆中曆々被來候て、月之肝候て種々戲言共也、

一廿四日、○中略、忠長、老中役トナルコトヲ承引スル、此晚赤星殿、有馬殿舍

幸若興十郎

弟天草殿舍弟へ御酒振舞申候、深更迄酒宴也、幸若與十郎來候て、一曲共申候也、

狂言

一廿五日、○中略、島津氏、鷹尾ニ兵糧ヲ送ラントスルコト、此日新納武州宿よて、珠長會尺ニ百韻興行也、其座躰主居忠棟、次珠長、税新、新武、東四郎、左衛門、奥野、越前守、客居拙者、次吉田洞庵、蓑田紹意、伊野州、蓑田紀伊介也、連歌過候て、種々戲言共よて御酒也、歸宅申候刻、肝彈來儀候て、漸久物語也、一廿六日、如恆、此朝又太郎殿よて、忠棟、拙者可參之由候間、參候、座躰客居忠棟、左近大夫殿、本刑部、主居又太郎殿、拙者、市來加賀守あり、終日酒宴也、幸若與十郎一曲申候、石原ちと狂言共仕候也、○中略、覺兼、忠長ノ老中役承クコトニカ、ル、本月、其次忠棟より茶湯之座構候、麟臺、此晚御出候へうし、拙者へ傳言被成候、其由申候、入御可有之由也、其後拙者御誘引候間、御供申忠棟へ參候、廳而四帖半之座よて、茶湯御會尺あり、麟臺、拙者、亭主三人也、忠棟手前也、種々之珍物共候キ、深更ニ罷歸候也、

二十九日、戊寅、神祇大副吉田兼和、御祓ヲ上ル、

〔兼見卿記〕

五

十月廿九日、戊寅、禁裏御祓、同御方御所、若宮御方、姬宮様、各

天正十一年十月二十九日

進上御祓方々遣大根鈴鹿修理進持遣了大典侍御局五東大御乳五東若御局五東勸亞相五東万里四東山科四東遣折紙南豐軒四東遣書狀清少納言四東遣書狀扇屋宗玖人夫ニ持遣之庭之石ヲ直之

是月近衛龍山前久新邸ヲ營ム

〔兼見卿記〕

五 十月五日甲寅略中近衛殿御屋敷見舞略下

八日丁巳略中近衛入道御作事新屋敷也壁之ヲ、イ小麥藁三東持進上

九日戊午出京參近衛殿相國入道殿四條用法寺御座也御對面屢得尊談了

十六日乙丑略中自近衛入道御書御使明日人足之儀可致馳走之由仰也御報申入人足畏之由申入御使へ對面進盃

十七日丙寅略中近衛殿御使今日人足明日可參之由意得申之由返答略下

○龍山遠江ヨリ歸ルコト九月四日ノ條ニ見ユ

〔附錄〕

〔兼見卿記〕

五 十月十三日壬戌早天退出直向盛方院音田淨勝今日近衛入道殿賀

茂へ三山在音とと御覽トシテ可被召連之旨此間仰之間爲祇候滯留今朝於盛方院朝喰清少納言相伴齋了參近衛入道殿暫相待申刻御出御供了

龍山要法
寺ニ假寓
ス

侍從罷出也彼在所數刻小鳥共御覽酉刻還御三山ニ被召置也御殿へ御

供申直歸宅侍從同前略下

廿二日辛未略中直參近衛入道殿御厩御座暫御雜談其内女房御客來之間

退出略下

廿六日乙亥略中出京參近衛殿御留守略下

廿七日丙子自近衛殿御書昨日致祇候無御對面御無念之由御懇書也鳥子

廿五枚水打今日打之自近衛殿承也略下

〔言經卿記〕

四 十月十九日戊辰陰

一近衛殿御方御所へ參了暮々也對顏同御母儀對顏也賜御酒了久近年不

參也

羽柴秀吉京都ニ新邸ヲ營ム

〔兼見卿記〕

五 九月十九一日庚寅略中妙見寺筑州屋敷ニ成寺中悉壞取云

々近日普請在之云々

十月四日癸丑略中自竹田梅松軒川原者宿へ雜識兩人爲使入來使者案内也此間妙見寺普請度々雖相觸不來之由爲催促兩人申付之由申了予云

妙顯寺ヲ
壞テテ屋
敷トナス

川原者

松田政行

兼和妙顯
寺以ヲ前田
訪

眞如堂念
佛

槇島普請

近頃不相屆唯今初而承也卒度催促不及覺悟之由申理了不相濟之間玄以之奏者松田(松田政行)右衛門尉へ遣喜介申理之處入夜罷歸梅松折紙ヲ到來催促之兩人歸京了罷歸砌召寄進盃

□日甲寅玄以へ罷向先向清三位(舟橋守賢)彼段相談令同道普請場妙見寺へ罷向今朝雨降然間今日普請無之鴨四持參奏者松右衛門か手繩一具遣之玄以面會即罷立至緣送出也奏者松右衛門ニ川原者之儀具申渡使者喜介ヲ殘置予又上京罷也直近衛殿御屋敷見舞次眞女堂罷向自明日例年念佛也佛前已下用意之住寺三位東陽防罷出請之間罷向玄以へ見舞ニ罷下也彼理之儀相談了晚ニ竹梅へ可申理之由東陽防申了向清三品只今歸宅川原者儀申理之處先年公方樣之時被召遣次ニ今度申付也其時被官之川原者不罷出者今度も不可有別義之由被申也罷歸猶可相尋之由申予歸宅則川原者召寄相尋之處公方樣之時不諸役但槇島之普請之時一人宛兩度罷出也其外無罷出(槇下町)義村井之時勿論不諸役之由慥申了明日又罷出右之條可申理覺悟也

六日乙卯早々自東陽坊書狀到來昨日相談川原者義竹梅へ致入魂之處可

川原者ノ
普請課役
ヲ免ズ

楠甚四郎

用捨相意得之由被申也猶喜介可罷出具可申之由申來云齋云出京向清三品右之條相談也松田所へ何モ遣使者可然歎之由所存之處三品尤之由被申之間遣喜介川原者先年不諸役槇島兩度罷出之通在様申遣了向(吉田守謙)盛法作事也○中略宮女田奔ノコトニカ自是歸家喜介罷歸松右衛門ニ具申渡玄以へ委細可申之由入魂了内證相調之由ハ松右衛門ニ不申也竹梅其理之間如此

十九日戊辰○中松田勝右衛門尉へ臺之物七種調之貳荷爲音信持遣之喜爲廿二日辛未玄以普請妙見寺爲見廻罷向アイ槌十繩五百把(把)持參玄以普請場

二在之則對面時分相應之持參祝著之由被申了○下略秀吉妙顯寺跡ノ月八日ノ條所收兼見卿記十一月九日ノ條ニ見ニ

〔言經卿記〕

四 十月十五日甲子天晴月蝕

一玄以へ普請見舞ニ楠甚四郎同道罷向了○言經玄以ヲ普請場ニ訪フコト八月二十一日ノ條ニ見ニ

天正十一年十一月一日

十一月 己卯 朔 盡

一日、己卯、日食、

〔兼見卿記〕

五

十一月一日、己卯、神事如常、未初刻、日蝕、即天陰、慥不見、

是ヨリ先、毛利輝元、一族小早川元總、秀包、吉川經言廣家ヲ質トシテ、羽柴秀

吉ニ致ス、是日、元總等、秀吉ニ大坂ニ謁ス、尋デ、秀吉、元總ヲ留メ、經言

ヲシテ國ニ歸ラシム、

〔常順寺文書〕

後○備

一去夏先書ニ委曲如申入候、北國西國不殘申付候故、小早川、吉川兩人、事去

朔日ニ致出仕、在大坂仕候事、○十一月五日附、宛所不明、秀吉書狀、全文ハ七月二十九日ノ條ニ收ム、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

○山城

天正十一年十月比、筑州へ爲一禮渡海也、元才菊ト云、

一小早川藤四郎秀包于今在津

吉川藏人佐經言これハ歸國、元又次郎

〔江氏家譜〕

下

秀包才菊丸、從五位下、侍從、初元總、

母乃美某女、元龜二年正月、元就賜安

藝國戸坂某斷絶之跡於才菊丸、同年五月、繼備後國大田兵部少輔英綱遺跡、

號大田才菊丸、後改市正、名元總、又秀吉公輝元和平後、爲小早川隆景人質、號

秀吉元總
敷ノ與フ

小早川藤四郎、於和泉堺馬場賜屋敷、住之、勤仕攝津國大坂城、

〔寛政重修諸家譜〕

六百

毛利秀包

初元總、筑後守、從五位下、薙髮號道叱、

母は上よあふし、

永祿十年生、才し勉備後の大田兵部少輔英綱の遺跡を繼、乃ち兄小早川

隆景の猶子となり、小早川を稱せ、天正十年、豊臣太閤、輝元と和睦あき、元總

す、あはち隆景の質となりて、大坂にいせり、乃ち太閤ふけり、諱、字、茂あさ

へらさ、秀包と名の、略

〔寛政重修諸家譜〕

六百

吉川廣家

初經言、藏人頭、侍從、從四位下、實は元春の三男、

永祿四年生

元龜元年、はしめて軍にし、さうふ、時、のち所々此役、功をあらはし、天

正十一年、毛利輝元、豊臣太閤と媾和、茲とき、父元春、ふ代りて、太閤、乃もせに

いせり、太閤、こせを賞して、藏人頭、任せ、略

〔吉川家譜〕

十

經言公ヲ大坂へ差上サル、因テ元長公ヨリ經言公御身上

ノ一件ヲ誓紙ヲ以テ、隆景公、福原元俊、同貞俊へ仰セ進セラル、○中略、天正

十三年附、隆景、元俊、貞俊、宛、元長、書狀ニカ、

經言公御上洛ニ因テ、輝元公ヨリ書并ニ進物ヲ進セラル、○中略、九月七日、經

言、宛、輝元、書狀ニカ、ル、九月七日、

天正十一年十一月一日

二二三

經言安藝ヲ發ス

堺ニ抵ル

十月三日
經言等秀
吉ニ謁ス
トノ説
經言等大
坂城天主
ニ登ル

輝元隱岐
ヲ經言ニ
與フ

經言鹽飽
ニ著ス

天正十一年十一月一日

二二四

九月下旬、人質トシテ、經言公藝州ヲ發シ、大坂へ上リ玉フ、小坂越中守、二宮
佐渡守相從フ、隆景公ヨリモ、弟元總公ニ、桂民部太輔、浦兵部丞ヲ添テ、一同
差上サル、又安國寺ヲ以テ案内トス、十月二日、泉州界ニ至リ、經言公ハ賢法
寺、元總公ハ玉蓮寺ヲ旅館トシ玉フ、秀吉公ヨリ、蜂須賀彥右衛門正勝、黒田
官兵衛孝高ヲ使トシテ、大坂ノ城ニ招請ス、三日、大坂城ニ於テ、秀吉公ヨリ、
經言公、元總公ヲ饗應シテ、種々贈物アリテ、共ニ天守ニ登ラル、從者民部、越
中等四人ニ駿馬ヲ賜フ、十一月、經言公暇ヲ告玉ヘハ、秀吉公命シテ藏人ト
改名セシム、元總公ハ大坂ニ留リ玉フ、夫ヨリ經言公吉田ニ至リ玉ヘハ、輝
元公ヨリ隱岐一國ヲ進セラル、御年譜、江氏家譜、陰徳記、
吉川家什書、異事ナシ、
按スルニ、秀吉公ヨリ、此時經言公へ槍ヲ賜ヒ、今寶庫ニアリ、
又按スルニ、九月晦日、元春公ヨリ西禪寺へ賜フ書ニ、經言去廿一日至鹽
飽上著候、然者於洲口船ハ工ニ乘懸、少々損候へ共、人數荷物無異儀之由
候間、可御心安候、懸而船仕立候而罷上之由申下候トアリ、
又按スルニ、九月五日、元春公ヨリ二宮佐渡守へ賜フ書ニ、其方事今度經
言供候事、誠辛勞之至無申計候、併其方相副候間、經言伽緩有間敷候條、於

宇都宮備
前守

經言等十
一月中旬
安藝ヲ發

我等心安候トアリ、又九月五日、元春公ヨリ宇都宮備前守へ賜フ書ニ、其
方事今度經言へ供仕候事、分別之段祝著候、寔辛勞之至更ニ無申計候、經
言未若輩之事候へハ、萬々無心元候故、供ノ事申候キ、外々トモ違、其方へ
者申モ疎候へ共、二佐へモ供之事被申付候由、定而異儀有間敷候條、彼者
申談内外トモニ萬談合候而、可罷□様氣遣頼入候、其方共之事ニ候へハ、
經言モ心ツヨク可存候、猶吾等モ心安候トアリ、又九月十二日、元長公ヨ
リ宇都宮備前守へ賜フ書ニ、其方事數年經言へ辛勞候事ハ、不及沙汰候、
然者當時上洛付而供候事、一入之辛勞無申計候、併懸而隙明可爲下向候
トアレハ、備前守モ御上洛ノ供セシコト知ルヘシ、略○下

〔佐々部一齋留書〕

○長門

一天正拾壹年

未、癸

兩川殿人質之夏、關白様ヨリ

可差上之由被仰懸、吉川殿人質ニハ、御舍弟之又次郎經玄公(言下同)御供ニハ、小

坂左衛門太夫春信、二宮佐渡守俊實、此外歷々也、小早川殿人質ニハ、御舍

弟毛利藤四郎秀包公、御供ニハ、桂民部太夫廣重、浦兵部少輔宗勝、其外歷

々爲御案内者、安國寺被指添也、吉川駿河守元春公、同治部少輔元長公、嚴

島迄御出、御滯留候而、霜月中旬之比、兩家ノ人質御出船、元春公、元長公爲

天正十一年十一月一日

二二五

天正十一年十一月一日

二二六

御見送藝州隱戸ノ瀬戸迄御類船被成、御暇乞也、元春公、元長公直様、藝州吉田ニ御越被成、輝元公御會尺御取持有之事、

一經信公、秀包公極月初ノ比、和泉至境津御上著、經玄公御宿ハ賢法寺、秀包公御宿ハ玉蓮寺、然ハ關白様ヨリ爲御使、黒田官兵衛殿、蜂須賀彦衛門殿被遣也、翌日關白様御出仕被成也、前日ハ送馬被遣、御供衆乗餘程有之、大坂御著之刻、大名小名御馬廻衆迄、多分住吉邊ニ爲御迎御出候、御會尺之段ハ非大形之由承及候、御引手物數々有之由候、御供之小坂左右衛門太夫ニ、鹿毛之一白之御馬關白様ハ被遣候、浦兵部ニ御馬被遣候、通承及候、境ニ兩殿御歸被成、一兩日有而經玄公又御目見、其時被准藏人、直様御國本御甘之御意被成、御國御辰也、其儘輝元公ニ御出被成之時、今度人質御苦勞御褒美之由、こて、隱岐國一國被進候事、

〔別黒田家譜〕

二 天正十一年、孝高三拾八歳、

秀吉を、吉川、小早川人質上せへき由被仰付、おれハ、吉川より二男又次郎經重、小早川より四郎元總を上せらき、極月初、泉州堺ニ著、上使として、孝高并蜂須賀彦右衛門を被遣、秀吉おもへらく、元春天性氣荒くし、物をやふ

人、人情に控むくへき士也、多と人質を出せ共、夫ニ抱らほして、我人質も隆景ウ人質をも共ニ捨て、約を變る事有へし、もし我人質を出さる、隆景ウ人質計を捨て、我人質出さぬとて約を變る事ハ、諸人のおもふ所をかへり見て、左も成難かるへしとおもひ計を給ひ、隆景壹人の人質よてよしとて、元春の人質をハ返し給ふとせ、是秀吉の智謀の巧成所也、安國寺も、此時人質の案内として差添上せらるる、才智辨舌そくもある者なれハ、秀吉是を悦て留置、召仕りせ給る、

○輝元、秀吉ト和スルコト、十年六月四日ノ條ニ、安國寺惠瓊、書ヲ井上春忠ニ與へテ、元總、經元ノ上坂ヲ促スコト、本年八月二十二日ノ條ニ、輝元、經言ノ忠節ヲ褒スルコト、同年九月七日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔陰徳記〕

七六

經言秀包大坂 江上給之事

去程ニ、羽柴筑前守秀吉ハ、惟任、柴田等ヲ無夏故退治シ、天下ノ武將ニ備リ給へリ、然間去年備中國高松表ニ於テ、毛利三家ト和睦シ給、其驗ニ、吉川、小早川ヨリ一禮トシテ、一人宛サシ上セラレヨカシト、秀吉、安國寺瓊西堂ニ

天正十一年十一月一日

二二七

天正十一年十一月一日

二二八

宣フユヘ、更ハトテ、元春朝臣ハ嫡子元長朝臣ヘ家督ヲ譲リ給ケル間、元長ヨリハ、舍弟民部大輔經言ニ小坂越中宮、二宮奎助ヲ被差添、隆景ハ實子無カリケレハ、舍弟藤四郎秀包ニ桂民部大輔、浦兵部丞ヲ相添、安國寺ヲ案内者トシテ差上セラレ、隆景朝臣ハ備後國三原迄送ラセ給ヒ、元春、元長ハ安藝國隱戸ノ迫門迄送り出サセ給ケリ、比ハ天正十一年九月下旬ノ事ナレハ、西吹秋ノ風迄モ、治ル御代ノ驗ニヤ、イト和カナリケレハ、舟路ニ障ル波モ無、頓同十月二日ニハ、泉芴境ノ津ヘコソ著給ヒケレ、則經言朝臣ハ賢法寺、秀包朝臣ハ玉蓮寺ニ旅宿シ給フ、其夜則秀吉卿ヨリ、蜂須賀彦右衛門黒田官兵衛尉ヲ上使トシテ、遙々是迄上ラレ候事、尤神明之至ナリ、明日三日登城可有トソ宣ヒケル、則翌日大坂ヨリ送り馬數百疋被出タリ、扱秀吉卿我今天下ノ權柄ヲ報事、吉川、小早川高松表ニ於和平セシメシ、信長討死ノ到來有ケレレ、元春、隆景會盟ノ旨ヲ守テ、彼表ヲ引拂シ故也、若渠等我カ勞ニ乗テ、跡ヨリ追懸ナハ、爭カ全事ヲ得ン、是ヲ思ヘハ、我武門ノ棟梁ト成事ハ、偏ニ彼兄弟ノ無表裏故ナリ、我爭カ此恩ハ可忘然ハ我ヲ吾ト思フン者、凡ハ一人モ不殘爲迎罷出馳走スヘキ旨宣ヒケレハ、大坂ニ有ト有ユル

元總等九月下旬出發ス

十月二日

十月三日
秀吉ニ謁
ストノ説

元總ハ男
色甚美ナ
リ

大名小名、我不劣ト住吉天王寺邊迄出向ヒケル有様、實ニ美々數ソ見ヘシ、其後登城有シカハ、蜂須賀彦右衛門尉、黒田官兵衛尉奏者トシテ、秀吉公對面シ給ヒケリ、扱自相伴ニテ饗膳給フ、其後經言、秀包ヘ太刀其外引出物數ヲ盡シテ給リケリ、小坂、桂、浦、二宮ナトニモ聞ユル駿馬給タリケリ、同霜月ニ、經言ヘハ御暇給リケルカ、此度遙々上リタル驗ニトテ、藏人ニコソ被任ケレ、秀包ハ今少罷居候様ニト隆景ヨリ申給、其上男色甚美ナリケレハ、秀吉モ是ニ耽ル御心御座ケル間、更ハ暫トテ留メ置給ヒ、翌年尾芴小牧ノ合戰、又紀芴雜賀ノ合戰ニモ召具ラレ、後ハ筑後ノ久留米ニ於六万石給リ、久留米ノ侍從ト號シケリ、又經言ハ吉川家督ノ後、秀吉公御同名ニ被任、羽柴侍從廣家朝臣トソ申ケル、

二日、庚申、阿蘇大宮司宇治惟將卒ス、弟惟種嗣グ、

〔諸寺過去帳〕

中野山過去帳

阿蘇大宮司宇治惟將

天正十一年十一月二日

〔阿蘇家譜〕

六

天正十一年十一月二日

二二九

惟將ノ世系

履歴
甲斐宗運
柱石阿蘇氏
將石ノ宿

宗運限本
賢主親
城主戰
新納忠元
等取部城

天正十一年十一月二日

二三〇

惟豐惟憲之弟

惟將母ハ宇士崎城主東氏ノ女、事蹟考ニ云ク、歴クハ代ニ、宇治惟勝從五位下ニ絃ス、然モ阿蘇氏ニ惟勝ノ名ナシ、恐ラクハ惟將ノ初名カ、此説

惟種母同上、從四位下

惟將 永祿二年、職ヲ繼キ、從四位下ニ絃ス、惟豐晚年一意大友氏ニ和シ、大略肥後半國ヲ平定ス、惟將ノ時ニアタツテ、甲斐宗運柱石ノ宿將タリ、南征北伐向フ所多ク克チ、兵威稍ク震フ、天正七年、甲斐守昌親昌、昌子、叛ク、宗運兵ヲ發シ、攻圍年ヲ踰ユ、城堅クシテ下ラス、八年春、惟將更ニ早川吉秀、越前ト稱、伊津野正俊山城ト等ニ命シテ、宗運ヲ援、守昌亦援ヲ宇士ノ伯耆顯孝ニ乞フ、顯孝、其臣大河六彌太、成松式部等ヲシテ之ニ趣カシム、早川等、宇士ノ援軍ト戰ヒ、吉秀及ヒ族渡邊吉次之ニ死ス、正俊逡巡進マス、敵勝ニ乘ル、宗運之ヲ聞キ、馳テ至、奮擊終ニ二將ヲ得タリ、田上攝津、六守昌終ニ城ヲ開テ降ル、夏四月、岩下家傳、三月、宗運限本城主城親賢ト旦過瀬ニ戰フテ之ヲ破リ、其衆三百餘ヲ斬ル、山部某、岩下某、冬十月、嶋津氏ノ兵北ニ侵ス、新納忠元、鎌田正幸之ニ將トシテ宇士ニ至リ、我矢部城狭少ナル

宗運相良
義陽ヲ斬ル

ヲ以テ不顧シテ進ム、城代中村惟冬伯耆ト稱ス、元南郷戰ヲ乞フ、二將兵ヲ還シテ、攻圍ムコト二晝夜、終ニ之ヲ屠ル、惟冬之ニ死ス、惟冬死後、妻某浦某亦同ク之ニ死ス、九年、嶋津氏ノ兵復北ヲ侵シ、相良義陽先鋒タリ、其兵萬餘、分ツテ我松尾城ヲ攻ム、城主伊津野正俊、一死以テ前年ノ敗ヲ雪カントス、即倉卒城ヲ出テ、緑川ヲ背テ戰フ、衆寡敵セス、正俊之ニ死ス、其臣伊津野四郎左衛門後レテ至ル、殘兵ヲ勵マシテ奮戰シ、敵將東掃部槍ヲ揮ツテ其乳下ヲ刺ス、伊津野絶而進ミ、遂ニ掃部ヲ斬ル、我將士ノ其近降ニ在ル者、亦皆援ケ來リ、戰尤モ劇シ、敵兵亦此ニ衆ル、（聚カ）義陽特リ麾下ノ親兵ヲ率ヒテ、響原ニ宴ス、宗運其怠リヲ窺ヒ、間道兵ヲ潛メ、急ニ馳テ掩擊ス、敵兵亂ル、甲斐親盛、宗運孫、木山紹貞先登ス、緒方喜藏、宗運臣、義陽ヲ獲タリ、田代宗傳等又後レテ至リ、其餘衆ヲ殲ス、既ニ亦嶋津氏ト和シ、國中稍ク靜定ス、十一年、惟將病有リ、職ヲ弟惟種ニ讓ツテ、十一月二日卒ス、按スルニ、系譜一本、惟將病有リ、職ヲ繼キ、未タ幾ナラス、惟種ニ讓ルト、然モ今茲嶋津氏ト贈答書皆惟將ノ名ニテ署ス、其早讓ニアラサルコト、知能ル、早ク惟種ヲシテ其家事ヲ監セシメシナルヘシ、不

天正十一年十一月二日

二三一

天正十一年十二月四日

二三二

惟種 惟將子無ク、惟種ヲ養フテ嗣トス、天正十一年、大宮司タリ、○下

○惟將、島津義久ト和スルコト、七月三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

ア之

阿蘇惟將

花押

阿

○阿蘇文書(肥後)十五

永祿三年十二月吉日附加冠狀

四日、壬午、長岡藤孝、丹後ヨリ上洛ス、尋デ、歸國ス、

〔兼見卿記〕

五

十一月一日、己卯、自丹後音信之由申來也、○下

四日、壬午、天晴、○中 午刻長岡兵部大輔入道來、鴨(藤孝) 持來、直ニ月齋へ來

跡ヨリ朽木來、卒度相談、予方へ同道、朽木路次飯京、長兵入道御方へ來、次

藤孝兼和ヲ訪フ

兼和藤孝ヲ訪フ

予方へ來、侍從ニ一腰(兼和)ウカイ、後藤作之、悉誘(マ)之遣之、侍從罷出申禮了、所望之間、燒風呂、次羞夕、次茶別義、及暮歸京、雖令抑留、明朝一會約諾之由、理之間、不及是非也、

五日、癸未、天晴、長兵へ侍從方ヨリ爲禮遣使者、兵庫助、

六日、甲申、今夕長兵入へ依約諾出京、侍從召具、先日一腰爲禮也、長兵爲茶湯

興行、他出之間、先參近衛入道殿、御對面、屢御雜談也、次向長兵旅宿、歸宿、即

面會、侍從同前、有茶之儀、次向清少(舟橋國賢)次參德大寺殿、次向盛方院、次歸家、○下

吉、龜山ヨリ大坂ニ歸ルコトニカ、ル、本月六日ノ條ニ收ム、

九日、丁亥、○中略、兼和等、秀吉ニ謁スルコト、長兵入今朝未明歸國也、○下

五日、癸未、惟住長秀、舊ノ如ク、越前北莊ノ橘屋三郎左衛門尉ガ一族ノ居

屋敷、地子錢及ビ臨時諸役等ヲ免除ス、

〔橘文書〕

前○越

其々居屋敷親類子方拾壹人分、居屋敷地子錢貳拾貫文、并臨時諸役等之事、從先規如有來、令免除訖、不可有相違狀如件、

天正拾壹

五郎左衛門尉

天正十一年十一月五日

二三三

天正十一年十一月五日

十一月五日

長秀(花押)

二三四

橘屋三郎左衛門尉との

輕物座役

長秀様去年其方被下候任御一行之旨其方居屋敷親類小うと十一人分、御地子錢貳拾貫文、臨時諸役、輕物座之役、尙以堅令免除候條、若違亂之輩於有之者、急与可申付候、仍如件、

天正十貳

大田小源五

太田一吉

七月二日

一吉(花押)

安倉孫太郎

定政(花押)

青山助兵衛尉

(花押)

戸田半右衛門尉

勝成(花押)

戸田勝成

橘屋三郎左衛門尉殿

以上

長秀様ヨリ去年其方へ御一行被遣候、然者以其筋目、御奉行衆并戸田半右衛門尉殿折番被遣候條、彌御一行各可被任御墨付之旨候、若爲下々兎角之躰申者在之付てハ、堅可申付候、爲其如此候、恐々謹言、

天正十貳

青山下代

七月二日

定久(花押)

安食下代

田彦右(花押)

太田下代

安助左(花押)

橘屋三郎左衛門尉殿

○長重、橘屋三郎左衛門尉ヲシテ、居屋敷、地子錢及ビ臨時諸役等ヲ免除セシムルコト、十三年七月二日ノ條ニ見ユ、

六日、甲、羽柴秀吉、丹波龜山ヨリ、大坂ニ歸ル、

天正十二年十一月六日

二三五

天正十一年十一月六日

二三六

〔兼見卿記〕五 十一月六日甲申、中及暮羽柴筑州、自龜山直ニ大坂へ下向云々、

○秀吉、上洛シ、尋デ、坂本ニ之クコト、本月八日ノ條ニ見ユ、
京都ノ奉行前田玄以、山城妙音坊ノ寄宿ヲ免除ス、尋デ、鞍馬寺、真正極樂寺等ヲシテ、各寺領ヲ安堵セシム、

〔天正十一年折紙跡書〕路○淡

妙音坊
當坊之義、前々我々宿之事候間、不混自餘、寄宿之義令免許之條、自然下々何
のと申族候者、此方可承候、恐々謹言、

天正十一

十一月六日

妙音坊
床下

鞍馬寺

當寺境内山林竹木并寺領所々散在段錢等、不可有違亂、次棟別人夫傳馬御
借材木惣而臨時之課役已下事、被免除之段、御代々證文分明之上者、彌不可
有相違之狀如件、

天正十一

十一月十八日

鞍馬寺山上山下

眞如堂
知德庵

當寺當知行分、東山堂領所々散在分、山林竹木當屋敷四十町分、并西岡之内
知德庵道場分事、度々被任御朱印之旨、永可有寺納、非分課役、陣取、寄宿以下
如近年除之狀如件、

天正十一

十一月十八日

眞如堂

鹿王院
龍華院

鹿王院、同諸末寺、龍花院領等事、被帶御朱印當知行無紛上者、如在來彌可被
全領知、并彼領中至仙翁寺村等、竹木人夫以下臨時之課役等、(貞勝)村井如申付時、
免除不可有相違之狀如件、

天正十一

天正十一年十一月六日

二三七

天正十一年十一月七日

十一月十八日

慶壽院

氏家直通、近江淨信寺ニ本堂修理料ヲ寄ス、

〔淨信寺文書〕江〇近

以上

本堂爲修理、於木本之内貳拾石令寄進候、雖聊之儀候、可有寺納候、尙兩人可申候、恐々敬白、

天正拾壹

氏家左京允

十一月六日

直通(花押)

淨信寺

七日、西乙丹後宮津ノ細川忠興、同國智恩寺文殊堂ニ禁制ヲ下ス、

〔智恩寺文書〕後〇丹

禁制

文珠堂

一山林竹木伐採事、

一橋立於裏向放鐵炮事、

鐵炮ヲ放
ツコトヲ
禁ズ

一於佛前責馬事、

右條々於相背輩者、可成敗者也、如件、

天正十一

十一月七日

越中守(花押)

八日、丙戌羽柴秀吉、大坂ヨリ京都ニ入ル、

〔兼見卿記〕五

十一月八日、丙戌出京、向万里、(萬里小路充所)侍從加級之義相談了、向清少

納言、暫相談了、筑州上洛之由、公家衆京中悉迎ニ罷出云々、後刻及暮上洛

云々、〇下

九日、丁亥、羽筑州へ爲禮罷出、今度玄以致普請妙見寺宿所云々、直罷向、(公維)德大

寺、(晴孝)菊亭、(公納)西園寺、(季通)久我、(長色)竹内、(有親)刑部卿、(土御門)同六條、(列)救庵、(三屯)久修、(列)本堂ニ相待、予同前、後刻

有禮之義、城中へ各罷向次第、羽筑州對面次第、(列)烈座、予綿、(三屯)持參、果子三

度給之、次退出、縁マテ送出也、最前爲勅使万里小路也、(異)被罷出、退出ハ各

同前也、(〇)萬里へハ三重送之、但庭上へハ不下、直ニ各令同道罷上、上邊所用

之間、(〇)旁同道了、(下略)長岡藤孝、歸國スルコト、(カ、ル)本月四日、(〇)條ニ收ム、

十一日、己丑、筑州未在京云々、

天正十一年十一月八日

秀吉妙顯
寺新邸ノ
普請場ニ
臨ム

勅使ヲ遣
サル

秀吉全宗
留ノ許ニ返ス

天正十一年十一月十日

二四〇

十二日、庚寅、○中略、勸修寺晴豐ノ息元服ノコト及ビ兼治加予向清少、自昨日筑州德雲軒ニ逗留、唯今下へ歸宅也、○下略、兼和、松井新介ヲ訪フコト

十三日、辛卯、○中略、越前出羽守使者甚四郎令下國返狀相渡之、筑州坂本へ下向之由申之間、尋遣之處、今日ハ延引也、

○秀吉、京都ニ新邸ヲ營ムコト、十月是月ノ條ニ、龜山ヨリ大坂ニ歸ルコト、本月六日ノ條ニ見ユ、

十日、子、戊辰、島津義久ノ老臣肥後八代ノ鎮將伊集院忠棟等、大隅禰寢ノ禰寢重張ニ參陣ヲ促ス、

〔新編禰寢氏世錄正統系圖〕○六薩摩 重張初重奏、重虎、菊十一、月十日、光宗、親貞、忠棟所贈之簡牘脫年號、故存于茲矣、

尙々、肥後表之儀、彌目出罷成候由、其聞得候、

○日、被仰渡候、肥州登之儀、可爲近々由、御談合相定候、儒者來廿日比可被成打立事專一候、自然其刻不可成候者、今月中ニ者、必可有御立候、聊御油斷有間敷候、恐々謹言、

十一月十日

光宗(花押)

親貞(花押)

忠棟(花押)

根占七郎殿御宿所

○忠棟等、相議シテ肥後ヨリ歸國スルコト、本月二十三日ノ條ニ見ユ、

十一日、丑、己未、曲直瀨玄朔ヲシテ、道三ト號セシム、

〔曲直瀨文書〕

去年若宮御方御不例、以良方靈術、忽御平愈、其後親王御方御惱、則以賢療御平醫、併名譽之所致、取譬無物、歡感餘愛、去年被成下法眼宣旨畢、○玄朔法眼醫、コト、十年末雜載、見ユ、然者當流之源派、其名爲道三云々、則令相續彼諱號、可爲道三法眼之由、重而有勅請旨、天氣所候也、仍執達如件、

天正十一年十一月十一日 左中將(花押)

道三法眼

〔寛政重修諸家譜〕

五百九

今大路正盛等、一、溪、

十一年十一月、勅ふよ

て、道三比名を男玄朔と讓り、一、溪、翠竹院比號を孫守伯と、曲直瀨の氏を

天正十一年十一月十一日

二四一

玄朔親仁
明和仁親
誠御病
王治療ス

一、溪、道三
ノ名ヲ玄
朔ニ讓ル

天正十一年十一月十三日

二四二

門人養安院正琳ニ啓迪庵此號を門人岡本玄治諸品ニあさへ致仕を託此後、亨徳院と號し、生涯編撰せる書甚多く、門人數百人ノいさり、あぬ縁く病腦を治せる此妙、あきてかぢを難し、○上略

毛利輝元、屬將伊豫能島ノ村上武吉ニ書ヲ遣リテ、同國來島ノ村上通昌ノ歸國ヲ許容セザルヲ告グ、

〔村上文書〕

○三周防

就都鄙和平之儀、來嶋事可有歸國之由風聞候哉、敢非許容之儀候間、可被心安候、委細之趣、具隆景可被申達候之條、不能詳候、恐々謹言、

毛利

輝元(花押)

十一月十一日

村上大和守殿御返報

○秀吉、穗田元清ニ通昌ノ歸國ヲ報ジ、其所領ヲ舊ニ復センコトヲ求ムルコト、十月十八日ノ條ニ見ユ、

十三日、辛卯筒井順慶、春日社造營段錢ヲ大和ニ課ス、

〔東大寺文書〕

三三十一

大佛殿灯油奈良田井反錢分

小路口
二段 此内一反者荒

三段

柳町荒

西口柳カ町 大役此外小荒

一段 西口芝カハナ 京ハテ春日琳方作、

同 一段 作就實院、

京ハテ南口 一段 西ノ屋作、

大 一段

ノト川ハタ 一段 大

下ウシヤ 二段

メウト橋 一段 此内大役小者荒、

大 一段

ホソフサ 一段 作大安寺、

センフシリ 一段

荷田四條 一段

天正十一年十一月十三日

二四三

天正十一年十一月十三日

二四四

佐保川下
一段
アスカ
二段
ヲリ橋
大モリ
安樂
三段
イコンハ
一段
上牛屋
三段

以上

地作

右之内地作一圓之分合三町四段半 反錢十貫三百五十文、
大之役合五ヶ所 反錢一貫文、
地之分合五ヶ所 反錢一貫二百五十文、

都合十貳貫六百文

此之外

クラノマチ
一段 滿田 二季ニ、三百文
荷田 一段 滿田 同、三百文

段錢八十
正宛

從筒井御造營付反錢之事堅固ニ被改出入、近年成外可申付候由、依申越如
此注之、

天正十一年癸霜月十三日

〔多聞院日記〕

○三和 天正十一年十一月十六日、

一奈良田井談義田ニ、悉國並ニ十足ツ、御造營反錢懸方々申事數多、筒井
上使ニテ譴責之間、不及異儀皆々出了、
十八日、夜前雨下、今日風吹了、酌翫へハ不出反錢付、大御堂田へ一圓可相懸
之由申事付、方々會合於當坊催了、

○春日社造作始ノコト、九月十九日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、美濃大垣ノ池田勝入、^恆清水ノ稻葉一鐵ト疆域ヲ争フ、是日、
羽柴秀吉、一鐵ニ知行目錄ヲ與フ、尋デ、境界ヲ明ニシ、互ニ和解セシム、

〔稻葉文書〕

後○豊

稻葉本知新知目錄

一六千三拾六貫百四拾九文

赤坂川より西

此内 貳千五百五拾三貫文

まき田川の北

天正十一年十一月十三日

二四五

三千四百八十三貫百四十五文 まき田川の南

一壹万五百八拾六貫四百四十三文 赤坂川と六川の間

此内 九千貳百九十九貫九百六十二文 道北

千貳百八拾六貫四百八十文 道南

一九千八百七拾五貫貳拾九文 六川と見多寺川ノ間

此内 八千拾六貫七百卅六文 ぶぶ川とくぜ川ノ間

千八百五十八貫貳百九十三文 見多寺川と六河ノ間

此内 九百十壹貫貳百四十文 道南

一貳千九百三貫六百八拾文 見多寺川といぼぬき川の間

千六百四拾九貫四百九十文 道北

此内 千貳百五十四貫百九十文 道南

一五千九貫七百七拾七文 いぼぬき川と江戸河之間

此内 四千八百八十壹貫九百廿三文 道北

百貳拾七貫八百五十四文 道南

一貳千八百卅三貫五百卅文 ぶん川といじら川間

段錢
小成物

だん川ノ東

段錢小成物
大垣帳面ノ此方へ可參分

夫錢

夫錢反錢在之

三千七十壹貫三百八十五文 不破分

三百九拾八貫九百十八文 勘右衛門分

十一月十日

勘右衛門分

稻葉重通
ノ所領

秀吉ノ裁
一定シタル
領一鐵ノ所

濃州内所々知行目錄事

東ハ六川ヲ切、西ハ赤坂山ヲ切、北ハいび川を切、南ハ岐阜海道大道
を切る、

一壹万參千六拾七貫九百文

此内參千七百六拾七貫八百九十文 池勝分

東ハやぬ川を切、西ハ六川ノ上くんぜ川を切、北ハ山中まで、

天正十一年十一月十三日

稻葉伊豫入道殿

二五〇

〔寛政重修諸家譜〕

六百

稻葉良通

伊豫守、入道、號一鐵、似齋、洪、圭、齋、法、印、

八月、池田勝入を

一鐵曾我
谷ニ敗ル

不破彦三
ヲノ西保城

よひ之助、森長一軍を出して江渡をせむ、一鐵兵をつらハして、曾我谷よ防戦せ、利をうしなひ、死傷すゑをの多し、一鐵まゝ男貞通をして、池田う家臣丹波助兵衛某う守れる九郷の壘をせむといへとも、下そことあゝハせ、十一月、太閤一鐵、勝入地をあらそひ、やゝもすきは兵を用ふるよいたをき、證書を兩將よをくりて和解せしむ、この比、一鐵、不破彦三某をせめて、西保城をおとし、あゝ池田乃領主國枝與三兵衛重元を撃て、おとくをその地をともし、略上

〔稻葉家譜〕

五

八月十日之朝、池田紀伊守信輝入道勝入起岐阜、同勝九郎

稻葉貞通
輕海ニ在

石河光康
鹽川十兵衛ニ撃タ

之助發大垣、森武藏守長一出金山、卒其兵五千許、來將攻江渡、一鐵聞之、設武備、使石河三左衛門光康驚見十兵衛、卒兵五十、相添鳥銃、遣曾我谷、時貞通在輕海而聞之、急嚮江渡、已聞石河等依一鐵之命、出張曾我谷邑、難曰、曾我谷行路不近、去江渡二町也、願置又丸十町也、而甚悔之、果石河驚見與彼先鋒戰于曾我谷、而死之、時石河二十歲、濃州厚見郡、石河爲森從兵、鹽川十兵衛被擊、此時一

ル

貞通石河
ヲ命ズ

貞通丹波
助兵衛ヲ
攻ム九郷城

鐵雖議遣援兵於曾我谷、依行程遠而不果、於是彼三將等擊石河、驚見爲功、各引兵而還、時人評曰、去年一鐵父子屢顯軍功、蓋怖之而止攻江渡、

一說、此日貞通欲令國枝小兵衛家次爲軍使、家次辭以吾馬蹄疼、貞通曰、汝欲建自己武功乎、此使當汝、乃與禰津鹿毛馬家次赴曾我谷、傳貞通之令曰、其備少則可退、石河等不肯、時池田、森之先鋒競來、以及一戰、石河果戰死、其隊亦崩、國枝氏蹈止、持鎗突一兵、石丸權兵衛亦在其場、與國枝共防敵兵、

此日貞通憤石河、驚見爲池田、森被擊、相議一鐵、從江渡歸揖斐之路、攻丹波助兵衛、勝入幕下、領六千、所守九郷城、助兵衛能防戰、我兵亦進而攻戰、首藤彦内腹被鎗疵、則死、稻葉伊在衛門通員、左手中鳥銃、加納源六郎面被鎗疵、石丸權兵衛亦所衝貫左腰、貞通謂以兵士不衆、不克拔城、大怒、既而勝入爲救九郷、發居城出軍、貞通見其旗、以爲衆寡不敵、乃引兵還揖斐、時池田村領主國枝與三兵衛重元、一鐵也、爲合力貞通、雖來九郷、依遲不遂其志也、今般助兵衛所圍良將、因能保城、世以譽之、

時人評曰、此戰貞通以兵少、不克拔城、若國枝氏疾來、合其兵而攻之、輒可得拔、

天正十一年十一月十三日

二五一

一鐵勝入
ト去年以
來境域ヲ
互ニフ家臣
ヲ出シテ
地域ヲ協
定ス

帳面繪圖
ヲ作ル

天正十一年十一月十三日

二五二

頃一鐵陷西保城、城主不破彥三直光治河之内、守光出奔他邦、乃立右近方通、一鐵男而爲後、則領其食邑、於是右近改氏、以爲不破也、少頃復本姓稻葉矣、彥三方通之婦同胞也、○中略、十一月十日附、一鐵知行目、錄ヲ載ス、前揭稻葉文書ニ同ジ、
(天正十一年)同年冬、秀吉公聞一鐵與池田勝入、去年以來論領地境、屢交兵、命一鐵勝入、令各出其臣、見分所論之地界、一鐵老臣那波和泉直治、古江加兵衛弘正、勝入家老片桐半右衛門、伊木長兵衛、四人相會、造地圖并簿書、繪圖加花押、憑尾藤甚右衛門、稻葉勘右衛門重通、呈秀吉公、其文曰、

今度池田殿與稻葉申分依在之、互知行被成御改、向後無申計樣(事力下同)ニ可被仰付旨、御諒ニ付而、爲上使片切半右衛門尉、伊木長兵衛兩人与立合、在々所々無殘所、道切、川切、山切、明白ニ仕、帳面米境目繪圖ニ致判形進上仕候、之れを以、雙方知行被成御分候之上者、秀吉樣無御最負偏頗、被仰付候段、致存知候、此繪圖之面申計在之時者、各罷出可申分候、自然相紛儀、御座候者、可被加御成敗候、以上、

十一月十六日

那波和泉

直治

一鐵ノ請書

古江加兵衛

弘正

尾藤甚右衛門尉殿

稻葉勘右衛門尉殿

公熟覽之、決斷論所、賜證文於一鐵及勝入、從是而後、兩家和平、其證文曰、○中略、天正十一年十一月十三日附、稻葉伊與入道宛、秀吉知行宛、行狀ニカ、ル、並ニ前揭稻葉文書ニ同ジ、稻則一鐵葉伊與入道宛、秀吉知行宛、行狀ニカ、ル、並ニ前揭稻葉文書ニ同ジ、拜見終而、就細井新助上書、謝其辱、其文曰、

今度池勝與申分依在之、知行方被成御改、無申事樣ニ被仰出候付而、爲上使、那波和泉守、古江加兵衛尉兩人出置、池勝使片切半右衛門尉、伊木長兵衛与立合、在々所々無殘所、道切、川切、山切、明白ニ、帳面並境目繪候面ニ、上使之者共加判形進上候、是を以、雙方知行分無御最負偏頗、有樣ニ御分候段、令存知候、誠被入御念段、致満足候、此上者向後申分在之間敷候、自然池勝与不寄多少、出入雖在之、右四人下見相究可申候、若此方滯儀在之者、被遂御糾明、不相屈与被仰出候、由御述懷有間敷候、爲其致言上候、此旨可預御披露候、

天正十一年十一月十三日

二五三

天正十一年十一月十三日

十一月十三日

細井新介殿

稻葉似齋

二五四

稻葉似齋
細井新介
一鐵國枝
重元ヲ逐
ヲ奪フ

頃一鐵逐其壻池田郡領主國枝與三兵衛重元遂有其采地

〔參考〕

〔新撰豐臣實錄〕

大坂城部

十 池田勝入父子與稻葉一鐵父子戰濃州附秀吉築攝州

秀吉安藤
道是ノ舊
領ヲ勝入
父子ニ與
一鐵父子
道是ノ舊
領ヲ押領
ス

國枝家次

同年七月池田信輝入道其子紀伊守(元同)之助自攝州移濃州大垣今按勝之岐阜按據之助之二壘安藤道足(屋下同)賀守是也伊賀伊之舊領又秀吉悉附池田父子然以道足滅後稻葉一鐵同右京亮貞通既押領之勝入告一鐵欲治其地一鐵曰吾以鋒得之何漫與之於是池田稻葉互鋒楯勝入使備兵於北方今按濃州地名也以下戶乾半里餘以推守之一鐵雖遣兵攻之却其兵敗績須藤彥內以下頗鬪死而退稻葉父子怒不堪自卒五百餘人入下戶壘以欲修城屹池田紀伊守之助森武藏守長一勝今按堀挖兵一萬餘將籠下戶稻葉聞之俾石子三左衛門遣二百餘騎於俣丸今按半里而防之石子出陣其場差失便利稻葉貞通考之不快令其土國枝小兵衛家次今按家次十六歲而初擊父讐自是一生武譽數般中在曰汝可假為敵而

鹽川十兵衛
ハ小野
お通ノ夫

勝入等曾
根城ヲ圍

一鐵道是
ノ舊領ヲ
ス勝入ニ返

試此備國枝往窺之來曰出張過度一町半而已貞通以不違其遠慮善之竊知敗兆乃使家次告石子曰可速納兵石子雖面從不用之貞通復使家次諭之石子嚤口不答家次歸告貞通暫曰石子不死惜哉果池田父子森長一等之兵競來擊之石子兵頗辟易石子以知既誤其備專忘其身憤戰遂為鹽川某(十兵衛)今按近須能書小野於殞命稻葉清藏又鬪死於是稻葉兵悉敗逃就中國枝家次重義勵勇便瀉而止屹黑鎧之敵一人進馬追來家次怒突忽傷右脇敵過去眼下而落馬見家次之止同僚河田八左衛門又返來家次曰我既傷敵子可取首河田即斬其首家次揮鎧彌進敵兵數輩為家次猶豫不得駢貞通士石生權兵衛又後殿降於馬與家次共昇居敵一人來欲與石生接鎧家次放聲罵敵敵驚走去石生國枝又退屹貞通觀國枝石生之浮沈令左右急救來感二士之勇功少焉稻葉敗兵五十餘人大反戰須藤權右衛門今按稻葉使士卒荐發銃敵彌躊躇不慕之故稻葉繚兵安入城其兵僅不充六百云々池田森及班師稻葉父子殫兵追之斬頸七十餘級而歸于曾根城乃以秀吉之令為池田悉返安藤之舊領矣今按此役也其支流者未詳之者曾聞真柄加介弟宮壽丸昔年幼任不破河內守成童任稻葉一鐵以下此屹既籠下戶壘列其軍克記其始末傳子孫故今訪其家乞見之

天正十一年十一月十三日

二五五

天正十一年十一月十四日

二五六

則不_レ違_三余之所_二兼聞_一於_レ是
騰_三田之以_二備_三後見_一而已

蘆名盛隆、越後赤谷ノ小田切彈正忠ニ書ヲ與ヘテ、物ヲ贈レルヲ謝シ、
之ニ越後口ノ形勢ヲ問フ、

〔伊佐早文書〕〇_二羽前

如例年之魚壹掛到來、悅目之至候、然間近日越國口之儀無異儀候哉、珍敷子
細候ハ、注進尤候、恐々謹言、

霜月十三日

盛隆（黒印）

小田切彈正忠殿

十四日、辰_二壬大友義統ノ弟田原親家、片山八郎ノ參陣ヲ褒ス、

〔片山文書〕後〇豐

就今度乘陳之儀、雖爲無足、別而可抽軍勞事可爲祝著候、依忠儀淺深、不誤自
他國、何様可加扶助候、可得其意候、恐々謹言、

天正拾一

十一月十四日

親家（田原）

片山八郎殿

小出秀政

○義統豐前ニ出陣シ、是則ノ岩ヲ拔クコト、十月十六日ノ條ニ見ユ、
十五日、巳_二癸羽柴秀吉、攝津平野莊惣中ヲシテ、其請米ノ事ヲ安堵セシメ、
領内ノ切代ヲ納メシム、尋デ、禁裏御藏立入立佐ヲシテ、近江志賀郡ノ
買得分ヲ安堵セシム、

〔末吉文書〕津〇攝

當庄請米之儀、秀吉任折番旨、諸事不可有異儀候、仍領内切代無別儀、其庄
可被納候、已來不可有相違候、狀如件、

天正十一

小出甚左衛門尉

十一月十五日

秀政（花押）

平野庄

惣中

〔立入文書〕城〇山

江劔志賀郡之内山中在之、其方買得分六石二斗事、任當知行旨、彌可被領知
狀如件、

天正十一年十一月廿二日

秀吉判

天正十一年十一月十五日

二五七

天正十一年十一月十五日

立入立佐

二五八

京都ノ奉行前田玄以、舊ノ如ク、小西次郎右衛門尉ニ、洛中ニ於ケル臨時ノ課役及ビ諸公事ヲ免除ス、

〔天正十一年折紙跡書〕路〇淡

於洛中、臨時之課役并諸公事等之儀、任秀吉御判形之旨、令免許之狀如件、

天正十一

十一月十五日 狀〇玄以法印下知、十二月ニ作ル、

小西次郎右衛門尉殿

徳川家康、駿河江尻ヨリ府中ニ入ル、

〔家忠日記〕三 霜月十三日、卯、殿様明後日十五日ニ駿州（府方）へ御越候由申來

候、〇コノ時、家忠深溝ニ在リ、

〇家康、甲斐ヨリ江尻ニ歸ルコト、十月二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔武徳編年集成〕二十 十五日（十一月）、駿府城へ渡御、々往還共ニ廿日ヲ歴テ歸御、

十〇創業記考異、十九日ニ作ル、

十六日、甲午織田信雄、近江園城寺ニ之ク、是日、近衛信輔（信尹）モ之ト相見ントシテ亦、同寺ニ抵ル、

〔兼見卿記〕五 十一月十六日、甲午、〇中自近衛内府御使、三井寺へ御越也、

御借馬之儀被仰下之間、牽進了、及暮牽歸也、

自伊勢三介殿三井寺へ御上、爲御禮御成之由使申也、於万里小路聞之、〇略

十七日、乙未是ヨリ先、山城賀茂社、市原野ト貴布禰山ヲ争フ、是日、羽柴秀吉、裁シテ、之ヲ賀茂社ニ與フ、

〔賀茂別雷神社文書〕〇三山城

貴布禰山之儀、先年從市原野雖申懸、被遂糺明、理運無紛之上者、此方へ誰々申來候共、不可能承引候、如有來可被仰付段肝要候、恐々謹言、

羽柴筑前守

十一月十七日

秀吉（花押）

賀茂

社中

天正十一年十一月十六日 十七日

二五九

天正十一年十一月十七日

二六〇

秋月種實、萩原山城入道ニ書ヲ遺リテ、豊前ノ形勢ヲ問フ、

〔萩原文書〕前〇豊

態令啓候仍先日豊衆打入候以來、其表無異儀之由尤可然候、併珍儀共候之哉、示預度候、至香春節々被仰遣候之趣、銘々令承知無餘儀存候、旨趣從香春可申達候、隨而喉輪壹懸進之候、誠補音信計候、恐々謹言、

秋

種實(花押)

萩原山城入道殿御宿所

○大友義統、豊前ニ出陣シ、是則ノ砦ヲ拔クコト、十月十六日ノ條ニ見

ユ、

筑後鷹尾ノ田尻鑑種、使ヲ肥後八代ノ鎮將上井覺兼等ニ遣シテ、糧食ノ贈與ヲ謝シ、併セテ龍造寺隆信トノ和平ニツキ、島津氏ノ命ニ依ランコトヲ請フ、是日、覺兼等之ニ答フ、

〔上井覺兼日帳〕〇日向 天正十一年十一月、

一十二日、〇中略、城一要、島津忠長、覺兼ニ使ヲ遣ヌコト、及ビ忠長、覺兼ヲ連

秋月種實
島津龍造
寺平氏ノ
旋和ス

隆信鑑種
ト和ヲ計

ム、田尻殿より山くゞ書狀持來候趣、彼境無替儀候、前日荷藏之禮儀あり、又秋月媒介を以龍造寺々御和平之由候、必定其儀ニ候ハ、彼方之事ハ同前ニ宜様ニ被頼入之由也、〇下略、山田新介、覺兼ヲ見舞フコト等ニ

ム、收

一十五日、〇中略、覺兼、連歌ヲ張行スルコトニカ 此晚田尻殿より山くゞ

來候、同書狀預候、彼堺無替儀之由也、龍造寺々和平之儀、彼方へ迄熟通を以被申懸候、然共鑑種事爰元御下知次第をへく候、萬端頼之由候也、

一十七日、〇中略、連歌ノ條附録ニカ、ル、本 田尻殿返事仕、持を候也、〇下略、肝

納忠元ノ子ヲ養ハントシテ、覺兼ニ諸ルコトニカ、ル、本月二十三日ノ條附録ニ收ム、

○島津忠長等、鑑種へ糧食輸送ノコトヲ議スルコト、十月十一日ノ條

ニ、鑑種龍造寺隆信ト和シ、隆信、政家父子、鑑種ノ子長松ニ誓書ヲ贈ル

コト、本月二十七日ノ條ニ見ユ、

十八日、丙京都ノ奉行前田玄以、京都桶座、紅粉座、惡錢座及ビ近江粟津座等ニ安堵狀ヲ付ス、

〔天正十一年折紙跡書〕〇淡

天正十一年十一月十八日

二六一

天正十一年十一月十八日

當職事、任綸旨并御代々證文、其外補任等之旨、諸口振賣以下事、如在來、堅令停止上者、如先々、爲座中可存知、若違背之族、可爲曲事候狀如件、

天正十一

十一月十八日

桶座惣中

紅粉座事、任御代々證文之旨、以先祖相續之筋目、可致商賣、若背座法之族在之者、爲座中堅可申付之狀如件、

天正十一

十一月十八日

上下京

紅粉座中

上下京惡錢賣買事、如春長軒折昏、爲前々座方可致其沙汰、若違背之族在之者、可加成敗之狀如件、

天正十一

十一月十八日

上下京惡錢

座中

〔古文書集〕

○京都帝國大學所藏文書所收

粟津座中事、爲禁裏供御人帶御代々綸旨并數通之證文上者、彌向後至東口商買人在之者、如先々、爲座中堅可令停止之、依而違背之輩者、可加成敗狀如件、

天正十一

十一月十八日

粟津座中

玄以(花押)

〔天正十一年折紙跡書〕

○淡路

石清水八幡宮住京神人油座事、帶御代々證文上者、洛中洛外可致商賣、并破座法致商賣者於在之者、可加成敗、然者今度中村賣子彌次郎与母背座法之條、令成敗了、彌以如先々、爲座中堅可申付之狀如件、

天正十一年十一月十八日

天正十一年十一月二十日

天正十一

十一月日

當宮住京神人中

上杉景勝、片切内匠助ヲシテ、柿崎千熊磨ノ家事ヲ管セシム、

〔歷代古案〕^十

其方若輩之間、家中爲横目片切内匠助差添候處、少地出置候由肝要候、然者片切如前々、簾本ニ於召使者、知行無相違可返付者也、仍如件、

天正十一年

霜月十八日

御朱印
柿崎千熊磨

二十日、^戊本願寺光佐、^顯如、德川家康ノ將、^顯神原康政ニ、使ヲ遣シテ、家康ヘノ斡旋ヲ請フ、

〔神原家文書〕

後〇越

只今家康ヘ以一翰申候、宜様取成可爲喜悅候、仍連々一禮之儀、乍存知、菟角遅引、失本意候、就其以使節申候、右之趣被得其旨、此已來別而預御入魂様馳

走憑入候、隨而太刀一腰、馬一疋、縮甘端進之候、祝儀計候、猶下間刑部卿法眼可令傳語候、穴賢、

霜月廿日

光佐(花押)

神原小平太殿

三河風説アリ、織田信雄屠腹ストイフ、

〔家忠日記〕

三

霜月廿日、^戊小田三介殿上^總よて御腹めされ候風説候、

廿二日、^庚會下へまいり候、三介殿御事せつよて候、

肥後霜野ノ内空閑鎮房、同國隈本^熊ノ守將北郷忠虎ニ頼リテ、島津義久ニ降ル、

〔上井覺兼日帳〕

〇十一日向

天正十一年十一月、

一廿日、早朝忠棟へ參候、隈本より北郷殿内衆來候、内空閑^{鎮房}下野をうらく候、此方へ御奉公之由被申由也、儒者近日中此方之人衆指出於中途談合

させられ返事也、彼方よりいとく御出勢之砌御奉公之由也、^{略、深}

二十二日、^庚子、羽柴秀吉、山城賀茂社及ビ妙心寺等ヲシテ、各其所領ヲ安

水三河守宿ニテ連歌ノコトニカ、ル、本月二十三日ノ條附録ニ收ム、

天正十一年十一月二十二日

天正十一年十一月二十二日

堵セシム、

〔賀茂別雷神社文書〕

〇三山城

國々當社領事、年來任當知行旨、彌不可有相違之狀如件、

天正十壹

十一月廿二日

秀吉(花押)

賀茂社

惣中

賀茂社

賀茂社領境內六郷并所々散在等事、從先規三社領內爲守護使不入、度々任
ヲ守六郷社境
不ヲ入トシ
課テ非分ノ
止課ス

賀茂社領境內六郷并所々散在等事、從先規三社領內爲守護使不入、度々任
御下知御朱印旨、山林竹木人足非分課役以下、如先々、彌令停止者也、仍如件、

天正十一年十一月廿二日

羽柴筑前守
秀吉(花押)

賀茂社

惣中

賀茂社領境內六郷并所々散在等事、從先規三社之內爲守護使不入、度々御
下知被帶御朱印、殊秀吉御折紙被遣上者、山林竹木人足非分之課役以下、如
先々、令停止之狀如件、

天正十一

十二月廿三日

玄以(花押)

賀茂

惣中

賀茂社領能州羽咋郡內五ヶ村在々分、并賀州金津庄持ヶ村事、如先々、可被
相渡候、分國中何も無相違申付候條、如此候、恐々謹言、

羽筑

秀吉(花押)

十一月廿二日

前田又左衛門尉殿御宿所

〔妙心寺文書〕

〇七山城

妙心寺、龍安寺、大心院諸塔頭領寄進、買得所々散在祠堂錢徳政并剪採竹木、

天正十一年十一月二十二日

能登加賀
賀茂社領
金津庄

妙心寺
龍安寺
大心院

天正十一年十一月二十二日

二六八

臨時課役等事、任數通之御下知御朱印旨、令免除上者、彌全可有寺納之狀如件、

羽柴筑前守

天正拾壹年十一月廿二日

秀吉(花押)

當寺

雜掌

門前被官
人夫

妙心寺、龍安寺諸塔頭領寄進、買得所々散在祠堂錢徳政并剪採竹木臨時之課役、門前被官人夫等事、被任數通之御下知御朱印并今度秀吉御判形之旨、不可有異儀之狀如件、

天正十二

卯月七日

玄以(花押)

當寺

雜掌

〔龍安寺文書〕

城○山

龍安寺

當寺領攝州太田郡内溝杭村貳拾八石八斗四升、同國能勢郡内倉垣村五拾八石參斗事、任當知行旨、彌寺納不可有相違候狀如件、

天正十一

十一月廿二日

秀吉(花押)

龍安寺

〔久能木文書〕

當御寺領攝州四ヶ庄内貳拾石事、被任御當知行旨、彌御寺納不可有相違狀如件、

天正十一

十一月廿二日

秀吉(花押)

寺殿 雜掌

〔參考〕

〔賀茂社記錄〕

城○山

先年承候太閤様秀吉公様之當社境内諸役御免除之書物共、御自筆之御判、御朱印之寫共御所望之由候間、寫進入申候、老眼目霞分見へり、可申候へ共、
本文ハ惣中へ度々ニ進候條、可有之事、
天正十

天正十一年十一月二十二日

二六九

四ヶ莊

天正十一年十一月二十二日

二七〇

一年十一月廿二日附、賀茂社惣中宛、秀吉免許狀及同日附、前如此調、あい
殿、宗二同道我、と參、直ニ秀吉申入候へハ、毎年ニ馬二疋つゝ御上せ可
有之由候間、我々申候ハ、馬ハ此方にて借可申候、此入用公用御上候様こと
申候へハ、さ候へハ、貳十石つゝ可有御上せ由御申候、加州百姓共皆々存候
毎年罷下直務ニ仕候間、以御分別、御祈禱候つかと御上せ候様こと、我々申
候へハ、何も御心得可被成之由御申候キ、あい殿、さつまや宗二も取合共有
之候也、○中略、天正十一年十一月二十二日附、賀茂社惣中宛、如此之調惣中
へ進之候、何も我々一分ニ申調候間、御禮一切入不申候、又其後如此之御朱
印調惣中へ進之候、

上杉景勝、屬將色部長眞ノ在府ヲ免除ス、

〔別本歴代古案〕 十三

任佗言之旨、國中靜謐之上、諸士膝下ニ召寄候へ共、於其方者、在府可令免許
候、但至軍役等者、如前々、嚴重ニ可勤之者也、仍而如件、

天正十一年

霜月廿二日

景勝

色部修理大夫殿○上杉年

諸關勘過

色部修理大夫者貳拾人、諸關渡上下共、無相違、可令勘過者也、仍如件、

天正十一年

十一月廿二日

景勝御朱印

所々領主中○上杉年

北條氏直、上野甘樂郡ノ地ヲ宇津木氏久ニ與フ、

〔宇津木文書〕江○近

於福嶋之内六拾貫文之地出置候、可致知行候、隨走廻可加重恩候、仍狀如件、

天正十一年未癸

十一月廿二日

坪和伯耆守 奉之

宇津木下總守殿

二十三日、御月待、

〔兼見卿記〕五

十一月廿二日、庚子、○中今夜當番也、先日以萬里小路仰云、
廿三日御月待之間、今日之番明日廿三日之番、致相摸、明日廿三日可致

天正十一年十一月二十三日

二七一

天正十一年十一月二十三日

二七二

祇候之由仰之間、今日不參、明御樽爲持參土器之物五、三荷之用意申付之、
廿三日、辛丑、略○今夜御月待祇候、持參之土器五、仰左馬允調之、マン中、シイ
タケ、檳柑、牛房、コンニヤクフノコサシ、以上五色也、

番帳
圍碁

三條西公
國

戌刻參内、持參之御樽以萬里小路披露之、予直垂、各其分之由萬里被申也、
先參御番所、番帳書之、今夜當番西園寺實益可也、予早參之間、書之、宿ハ次
第也、次參御方御所、若宮、二宮、五宮、各御座申御禮了、圍碁若宮様与五辻源
三位遊之、源三品負、次予与若宮様可遊之由、罷出打之、若宮様五被置之、予
勝之、次上乘院与予打之、勝次第匂香一貝ツ、可被下之旨仰也、次予勝之、
一貝拜領、次源三位与予打之、源三品五目置之、予勝之、一貝拜領、次四辻亞
相与予打之、四亞相六目置之、予負之、四亞相一貝拜領之、次四亞相与萬里
小路打之、萬里萬里勝之、一貝拜領之、次上乘院与予又打之、各依所望也、予
勝之、一貝拜領之、此内御通在之、次粥、上段之妻戸ヲ立、次之間ニテ各給之、
月出而又御盃在之、積善院今夜之御月待御名代也、仍御盃最前ニ頂戴之、
次各次第ニ御通也、又御盃參、予頂戴之、御前各之儀ニヨテ如此、次各次第
ニ御通也、次入御退出、御番所宿直、三條西公國駿河三條祇候也、實益卿相摸云々、

肥後八代ノ鎮將等相議シ、花山ノ砦ニ兵ヲ置キ、國ニ歸ル、是日、島津忠
長、伊集院忠棟、上井覺兼等、八代ヲ發ス、

〔上井覺兼日帳〕

○十一日 天正十一年十一月

一二日、早旦より各普請也、敵少々道善寺之尾迄來候て、爰元様子見候歟と
見得候、從此方々人數一人も不出、普請專ニ仕罷居候、此晚稅新八城より
歸也、先等平田殿返事拵取事成候哉目出候、就夫主取之事承候、何ヶ様も御
談合次第候、乍去鹿兒島へ被伺御意候て可然お不され候、其上寄合中
今一人御番候て、領掌可有之由也、トニカハル、本條附録ニ收ム、
一三日、早朝より忠棟宿よて諸口番盛又ハ當拵番盛等談合共申候、光宗へ
又々當所御主取被成候而可然候、其衆ハ甲斐頭、小野、守山と格護之爲
ニ拵候、專爰元人數御番可被仕候間、自餘之寄合中者、似合間敷候歟、境目
役よて候間、とく濃州御下知之外ハ難有候、又鹿兒嶋へ御意請られ
き由候へとも、是又此拵取之事濃州如御存知、爰元談合よてこそ執り候
へ、（後久）聊鹿へ者無御存知儀候、然者主取之事と御意請る共、御納得有間敷
候、今少御校量おされ、光宗御領掌肝要之由、平田新左衛門殿を以申候也、

忠棟覺兼
平田光宗
等議シテ
山ノ塞ヲ
守ラシメ

天正十一年十一月二十三日

二七三

天正十一年十一月二十三日

二七四

此日宇都役人本郷甲斐守乘陣之祝言として、被來候也、忠棟宿よて參會申候也、各宿へ酒肴持せ候也、

一四日、普請等無緩候、忠棟先々小川邊まで歸陣よて可然候、一兩日者拙者爰元見廻する由申候條歸陣あり、鹿兒島衆其外彼手之衆召列、歸被成候當拵番衆、有馬表番衆と、談合を以盛て銘々申渡候、此晚平田新左衛門八城より被歸候、濃州當拵主取之儀猶々罷成まじき由あり、忠棟へ途中よて被逢候、光宗存分被聞せ、此上談合共可入候間、拙者先々明日急候而可罷歸之由也、

一五日、普請等無緩候、敵少々道善寺之尾に見得候也、無何事候、此日忠棟より野村新七郎を以承候趣者、各校量次第昨日歸陣候、尤今日普請見廻せ登り被成候すとも、指無題目候條不用候、當者我々歸陣いつとるべく候哉、光宗當拵主取之儀無領掌候、然者此一節番大將之儀、又ハ諸口番盛等如何有へく候哉之由也、新武、伊野、上長談合申候て、忠棟へ返事申候、其趣慰懃之御使札著候、諸篇御談合可入存事候、然者明日小野まで、右之衆同心よ可罷下候、乍去辛勞御出合可目出之由申候也、此晚右之衆と

へめし振舞候、御酒よて閑談共也、此夜新武、伊野、洞庵拙者發句よて、四吟仕候也、半夜計ニ各歸也、此夜中忠棟より書狀到來候趣、出合談合之由、野新よて申候得共、堺目衆下よてハ、迷惑ニおほされ候、普請等見廻、被是忠棟拵へ可被登せ之由也、當者ともろくも御校量次第之由返事申候也、
一六日、普請等前同シ、忠棟拙宿へ來儀也、各折合談合共なり、當拵之儀先々此度御出勢ニ遲參之諸所可召置之由定候、新武之事、五日者見合肝要候、吾々も談合共可入候間、先々忠棟同處へ歸陣可然之由定候、其外諸口之番盛等大方被成候、吾々へ食振舞會尺共申候、爰うしこより到來候珍酒珍肴無申計候、宇都隈本とより音信共候、うれ等之繁多之儀、あるしあへす候、明日隈庄口働之儀相定候へとも、豊福衆之内逃去候之條留候也、

一七日、普請等同前、伊野州陣屋へ可參之由候間、新武、上長、山新同心よて參し候、朝食振廻なり、從夫種々會尺之中、四吟之連歌共少々仕候也、此日宇都隈本、又と家とより使書多々到來候、あるしあへす候、此晚小野まで歸陣仕候也、此日も忠棟よて兩通到來候、番盛等被是細々之儀候間、不

天正十一年十一月二十三日

二七五

及起候報下略、稻留新介來リテ、有馬表ノコトヲ覺兼ニ
 一八日、藥師へ祈念別而仕也、小川へ忠棟御座候間、彼方迄打立候也、然處こ
 中途迄忠棟使僧預候、宿等被仰置候條、早々小川へ可參之由也、此日忠棟
 宿よて終日談合也、其衆伊野州、上長、本刑、新右、稅新此衆也、此夜忠棟より
 使こ而承候、明日拙宿こ而談合之由也、何ヶ様も御校量次第之返事申
 候也、

諸番盛ヲ
 ナス
 覺兼熱病
 フ患フ

忠棟八代
 ニ歸ル
 山ヨリ
 花ニ
 歸ル

一九日、此日於拙宿御談合あり、其衆忠棟、伊野州、上長、新右、稅新、拙者也、終日
 諸番盛等被成候、各へめし振舞申、終日酒宴也、此日花之山に敵出候由聞
 得候而、各若キ衆續也、無何事之由きこ得候て、懸而續衆歸也、其後ま拙
 宿へ忠棟入御候て、碁將碁まよて閑談也、此夜忠棟宿へ可參之由候間
 參候、今日被成候番盛等未事果事候間、然々盛候て可然之由候間、伊野、稅
 新、拙者盛候也、從夫拙者ハくさこ振付候間罷歸候、
 一十日、早朝忠棟よ使よて、夕くさ之様こ候つる、如何候哉、忠棟御事ハ、先
 々如八城今日御越之由也、尤可然之由申候、伊野、本刑ま各くさ見こ御
 出候、又花之山ハ二番衆被歸候、諸地頭ま暇乞こ各御座候あり、終日く

覺兼等義
 久ニ花山
 ノ岩ノ出
 來番盛歸
 陣等ヲ報
 ジテ命ヲ
 待ツ

歸陣ノ衆
 多シ

さ不醒候て休居候、此夜亭主御酒振舞候、種々之儀共也、此日花之山へ當
 番衆へ辛勞之事、又ハ二三ヶ條御用之事共候間、上原長州被差登候、鹿兒
 島へ後拵取事就候、當者番盛被成、各歸陣被申候、忠棟、拙者事者、上意次第
 可罷歸之由申上候也、本田野州、忠棟替こ御立可然之由也、秋月より無事
 之儀到來未聞得候、是ハ必此方よて各不承候共、不苦候、彼方使鹿兒嶋ま
 て參候て、可然候、又本野州、平濃州此方へ御入候ま、爰元こて可被聞
 せ事こ、其分さるへく候間、やうく忠棟吾々へ罷歸候する哉之由、伺御意
 候也、此夜亭主夫婦出候て、種々肴よて御酒振舞候、

一十一日、如恆、天氣惡候て、くさ養性申、此日、小川へ逗留申候、上長州花之
 山より歸よて候、彼方之衆辛勞之段態申候、祝著之由共也、御酒參會良
 久閑談共候、從夫長易ハ如八城打立也、此日、後陣歸之衆多々被來候也、
 略、覺兼、碁將碁、本條附録ニテ遊ブコ
 トニカ、ル、本條附録ニ收ム、

一十二日、○中略、覺兼、藥師ニ看經スルコ、城殿よ使也、其後無沙汰之由也、
 酒肴送預候也、天草殿よりも使書到來也、各返事即申候、圖書頭殿より御
 使こて、爰元へ歸著仕候、目出被思召候、當者先刻御有増共候キ、
 長連歌ヲ

島津義虎
忠棟等立
出ラニ立
寄ラニ立
請フコ

吉利澄
高千穂
計策ニ從

平田光宗
花山守
備御ノ
莊人實
忠棟等
議ル

義久忠棟
覺兼ノ勞
陣ヲ命ズ

島津龍造
寺兩氏和
平ノ使者
下向ノ傳

和議ハ龍
造寺氏ヨ
リノ懇望

天正十一年十一月二十三日

二七八

張行セントシテ、覺兼ヲ招クコトニカ、ル、本條附録ニ收ム、

一十三日、○中略、忠棟宿於ケル連歌ノ此座中從義虎、忠棟、拙者へ御狀預候、諸境目之儀共也、又ハ歸宅之刻、泉へ兩人同心よて可參之由也、○下略、連歌酒宴ノコトニカ、ル、本條附録ニ收ム、

一十四日、如恆、忠棟御宿にて談合共也、吉利殿三城（新武）口より高知尾境計策共被成候、左様之事共出合也、○下略、連歌ノコトニカ、ル、本條附録ニ收ム、

一十七日、○中略、肝付兼寛、新納忠元、ル、本條附録ニ收ム、シテ、此日新武陣よて當所迄歸宅也、

一十八日、○中略、覺兼、觀音ニ讀經スルコト、此日伊野州被歸候、暇乞承候也、平田濃州より同名駿河守殿よて承候、當所衆御番之儀、於花之山談合共候哉、可然候役人衆之事、一人つゝハ爰元へ罷居候えてハ、諸篇御不知案内之條難成候、然者番替一人つゝハ、此方へ可召置之由也、三舟隈庄之質人是亦當所衆番等させられ候事、拵之御番取合難成候内端とへ可被召置、御談合頼さるゝ之由也、忠棟より捻よて承候、○下略、忠棟宿ニ於カ、ル、本條附録ニ收ム、

一廿一日、○中略、忠棟、茶湯ヲ催ニ收ム、此晚從鹿兒島本野州書狀到來候、忠棟、拙者兩人拵取彼是辛勞之儀被仰出候、當ニ諸口無替儀候哉、諸番手等被仰調候上、兩人之事早々歸宅仕候て可然之由あり、

一廿二日、如恆、本刑被來、金吾様より伊集院伊與介役之佗被申候、就夫平濃州拙者へ意得被成候得との御自筆之御狀、他見有間敷由よて候へ共、拙者可見申之旨よて持來あり、披見申候、與州へ、濃、拙者異見可申之由御書越候間、即本刑へ書狀認させ申、濃、拙書狀よて、異見申候也、此日志岐兵部太輔殿返書申候也、○中略、覺兼、深水三河守ニ一萬句連歌ヲ發句ヲ送フルコト等ニカ、ル、六月二十九日、此晚忠棟宿ニ參候、新武、上長、本刑、養田信濃守と被有合候て、種々肴よて御酒宴也、龍造寺當郡和平之儀ニ付、先日之使一兩日中罷下也、彦山伏傳（山鹿カ）ニ當庄宿處へ申越間、新武被聞付由候、然者各逗留之事、五日（五カ）而ハ可然候すらんかと出合候、就夫右ニ承候者被召寄尋ささる候、不紛急度此方へ可參之由よて傳言申候、必定と不存由也、○秋月種實、使者ヲ島津義久ニ遣シテ、龍造寺隆信ト、當ニ先々明日各歸宅被成候て、可然之由定候、其故ハ無事儀彼方々懇望仕事候、さ

天正十一年十一月二十三日

二七九

を寄合中此方へ待居候而ハいづゝをるへく候、猶々懇篤之儀候て、秋月之使ろこし、向へ參候て肝要之由、各被申候也、深更まで閑談共よて、各明日歸宅に定、宿々へ罷歸候也、

一廿三日、早朝從義虎御使書也、爰元辛勞之儀、又ハ歸宅之刻を、各鹿兒島へ參上之志に候て、泉へ頻に可參之由也、其外御戲言共也、相應之御銀申候、此日打立忠棟同道に罷歸候、高田よて芝居者御酒也、從夫佐敷へ著候、殊之外大雪也、今夜月待申候也、忠棟捨を以承候、今日ひちこ此磯よて思ひ出さされ候とて、書付預候、浪立て雪を汀の嵐うち、懸而、一むらこのむうけの蘆鴨と脇を申候、其次長旅中徒然之式共狂歌よて申候、懸而返歌共被成候、大明友賢其席へ有合候て、詩共作候とて預候、懸而拙者和韻共仕候也、

一廿四日、早朝打立候、山中雪深候而、爰うしまよて酒のミちとして、漸久木野へ著候、圖書頭殿、彼所へ御一宿也、然者彼御宿へ參候、其後拙宿へ被懸御意候、終夜御閑談也、御酒宴也、

一廿五日、早朝打立候、大口よて破籠之御酒ちとをへ候、其次地下衆一兩人

忠棟覺兼
八代ヲ發
シ佐敷ニ
到ル
大雪
月待
忠棟覺兼
贈答ノ連
明人友賢

覺兼久木
野ニ著ス

般若寺ニ
宿ス

小林ニ弟
ヲ訪フ

宮崎ニ歸
ル

御酒共預候、參會候て、賞翫申候、此晚漸々般若寺へ著候、門前ニ宿仕候、別當被聞付、自身御出候すれ共、當時禁足に而候間、使僧預由よて御酒もとせられ候、其後風呂焼せられ候由候間、懸而入候て慰申候也、

一廿六日、小林よて愚弟次郎左衛門處へ著候、於中途鐵放よて雁一仕候、此夜衆中悴共ちとハ、三ヶの山迄遣候、拙者ハ二郎左衛門所へ留候、終夜會尺閑談共也、

一廿七日、夜を籠打立候、紙屋之町、本庄萬福寺こゝろしこよて、御酒ちとへさせられ候間、遅々として、亥刻計宮崎へ著也、

一廿八日、寺家衆其外衆中又者已下之者共迄、歸候とて來候、皆々酒肴持せ候ちり、恭安齋一兩日此方へ御逗留候、能仕合拙者歸候見參被成、此日御歸也、

一廿九日、越より罷歸候、源左衛門殿水鳥うけられ候而、我々直に振舞也、此日金剛寺御酒持せ上候也、參會候て賞翫申候、此晚小鷹仕候、鳴三とらせ候、從夫直に夕越に立候、此夜檜村に留候、池田志摩、種々會尺仕候、越之鳥ちと賞翫申候、

鹿兒島ヨ
リ殿舎修
造ノ材木
ヲ徴ス

天正十一年十一月二十三日

二八二

一卅日、朝食池田志摩、搦振舞候、種々會尺あり、爰ウシコヨリ酒肴と到來候、終日碁將碁にて慰候也、此晚如城之罷歸候也、從鹿兒島清武傳ニ本野州より書狀預候、趣ハ此間永々旅中辛勞之儀、又ハ殿中作材木、葺板釘と從所々未來候、各出張留守にて候へ共、涯分急候て進上可申之由也、

○阿蘇惟將、義久ト和スルコト、七月三日ノ條ニ、忠棟、覺兼等、鹿兒島ヨリ八代ニ向フコト、八月二十四日ノ條ニ、堅志田ヲ攻ムルコト、九月十七日ノ條ニ、義久ニ阿蘇氏ト斷タンコトヲ請フコト、十月一日ノ條ニ、征久等再ビ堅志田ヲ攻ムルコト、同月七日ノ條ニ、忠棟等、碁ヲ花山ニ築キ、以テ堅志田ニ迫ルコト、同月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔附録〕

〔上井覺兼日帳〕

○十一日 向 天正十一年十一月

一二日、○中略、花山、磐普請ノコ、此晚殊之外雪ふり也、新武劔拙宿にて閑談也、然次柴屋之霰之躰、被參向座發句ニ申候而相尋申候也、○一本、相尋申シ、さふきのうきも玉敷あらむ哉と申候、廳而武州脇をされ候、うり場の月よ來てとまり山、第三伊野州、分くらす駒、水さへ野ハウれて、如此

肥後雪降
ル覺兼新納
忠元等ト
連歌ス

將閣碁
狂言

連歌師珠
長

猪一丸

忠長連歌
ヲ興行ス

共也、

一十一日、○中略、上原、尙近、花山ヨリ歸、雨中之間、終日碁將碁とさせ候て見候、又ハ石原方へ狂言物語をとさせ候て慰候あり、

一十二日、藥師へ看經別而仕候、石原へ食寄合候而、種々戯言共申慰候、○中略、一、要及ビ忠長、覺兼ニ使ヲ遣、珠長御會尺之一折拙者相待せられ候、今日罷歸候間、明日御興行可被成之由也、忝令存之由申入候、○中略、田尻、鑑種

トニカ、ル、本月、十、山新よりも、くさ氣之由、い、候や之使と、川上左七日ノ條ニ收ム、猪一丸持を御座候、御酒參會申候也、忠棟、濃州京亮殿親父三州よりとて、猪一丸持を御座候、御酒參會申候也、忠棟、濃州へ、使にて歸候由申候て、くさ養性仕候也、明日連歌之再篇持せられ候間仕候而、廳而忠棟へ進入申候也、

一十三日、圖書頭殿於御宿御連歌也、其座躰、客居忠棟、次珠長、深水三川守、紹意、簀田紀伊介也、主居麟臺、次拙者、伊野州、稅新、福屋日向守也、○中略、義虎、ルヲ遣リテ、境目ノ上ニ收ム、報ズ、御連歌過候而、御酒と種々參、戯言共也、各罷歸候也、

一十四日、○中略、忠棟、覺兼等、境目ノ上ニ收ム、談、此日珠長宿へ行候會尺ニ、明天正十一年十一月二十三日

二八三

天正十一年十一月二十三日

二八四

後日一折興行申度存候、然者發向所望之由申候也、乍斟酌可被案之由あり、此晚伊野州宿へ忠棟御出候間、可參之由候之間、其分よ候、種々肴よて御酒也、其半こ誹諧ふと、深更こ罷歸候也、此日志岐兵部太輔殿より使書預候、北絹一端預候也、

吉利忠澄ノ出陣

一十五日、看經等別而仕候、平田濃州無沙汰候とて御座候、御酒參會候也、珠長發句出來候とて被持來候也、其砌吉利殿陣へ御座候、暇乞こ登候て御出ちり、珠長同前こ御酒參會候、其間こ脇案し候也、即申候て、圖書殿第三あそそされゑき由申候て、本田治部少輔殿へもよせ申進入候、廳而ほそそちも候するとの御返事也、此日忠棟濃州へ御禮よ參し候也、明て一順連衆等申定候也、○下略、田尻鑑種ヨリ書狀來ルコト

一十六日、於拙宿連歌也、座躰客居圖書頭殿、伊野州深水三川守、稅新宗珠あり、主居忠棟、珠長、拙者、本刑、蓑田紀伊介也、發句珠長、山柴の枝うつりするあらむの羽、脇拙者、羽風比音も寒き朝鳥、第三圖書頭殿、瀧津よのちみや氷をあへさらん、如此也、夜入候て成就候、終日御會尺如常、

風呂

一十七日、如常、忠棟風呂焼さられ候、可參之由候間、其分候、風呂過候て、碁將

肝屬兼寛
忠棟ノ子
ヲ養子ニ
望ム

茶湯

碁ふとよて慰候、夕めし振廻也、此日之懷紙珠長被來候て再見之、種々沙汰共承候也、○中略、田尻鑑種ニ返書ヲ遣スコト、此夜佐多宮内少輔殿被來、物語共也、其由肝付彈正忠殿養子こ忠棟子息懇望之内儀別而被仰候、使被成候由也、霜臺よ拙者へ談合被成由彈もし被仰候由物語也、然ハ拙者前よりも次よて候間、彈之事使よて候儘、近比目出存候通、少輔殿よて申候也、○下略、新納忠元、花山ヨリ歸

一十八日、如恆、觀音へ別而讀經共申候也、○中略、平田光宗、覺兼ニ花山守備、收圖書頭殿風呂へ入御候、其後御茶湯會尺とるへく候、可參之由也、廳而參候、即四帖半之座へ圖書頭殿御案内者仕といは候、亭主之御手前あり、薄茶こ圖書頭殿御手前也、圍爐裏よて種々御會尺とよて閑談共也、深更こ罷歸候也、○下略、相良忠房、義久ノ病平癒祈願ノ爲メ、一萬句連歌、一十九日、如恆、忠棟御宿よて、碁將碁よて慰候、從夫茶湯之座よて、各よてのきよ稽古共申候、左候處こ、珠長被來候、明日之連歌一順共仕候也、夜入候て歸宿、阿多掃部助殿同心申、夕食ふるまい候、然處こ上原長州より酒肴持せられ候、彼各寄合賞翫共仕候、閑談共也、

天正十一年十一月二十三日

二八五

天正十一年十一月二十五日

二八六

一廿日、○中略、内空閑鎮房降ルコトニ收ム、從夫忠棟同心申、深水殿宿へ行候則
 連歌始候也、座躰客居圖書頭殿、新納武州拙者、宗郁、宗珠、蓑田紀伊介、主居
 忠棟、珠長、稅新、奥野、越前守、深水、三河守也、終日會尺共也、深更ニ各罷歸候、
 一廿一日、○中略、覺兼、加判、役辭、退ノコトニツキ、易者ヲシテ、深水方昨日之
 禮ニ被來候、犬童美作入道御酒持、被來候、則賞翫仕候、愛甲方御酒持、
 被來候也、志岐殿より拵取祝言之使僧預候也、此晚圖書頭殿より忠棟拙
 者御茶湯被成候、可參之通被仰候間、忠棟同心より參候、御亭主御手前也、
 閑談共也、夜入候て罷歸候、○下略、鹿兒島ヨリ書狀來、
 二十五日、○癸、遠江橫須賀ノ大須賀康高、同國龍巢院及ビ宗有寺ニ寺領ヲ
 寄進ス、

〔龍巢院文書〕 江〇 遠

遠州城東郡笠原庄長岳龍巢院領之事

合拾壹貫文

右寺家門前屋敷田畠并山林竹木共、今度改而如前々奉寄附了、然則永不可
 有相違、自今以後雖有他之競望、不可及其沙汰、以此旨寺家御建立勤行等、不

龍巢院
笠原莊

可有退轉者也、仍如件、

松平五郎左衛門尉

天正十一年癸未十一月廿五日

康高(花押)

龍巢院

龍頼和尚

〔宗有寺文書〕 江〇 遠

遠州城東郡笠原庄岡崎之郷舟原宗有寺領之事

合八貫文

右寺中山林之竹木共、今度改而令寄附了、然上者永不可有相違、自今以後雖
 有他之望、^(競望カ)不可及異儀、守此旨、寺家御建立勤行等、不可有退轉者也、仍如件、

松平五郎左衛門尉

天正十一年癸未十一月廿五日

康高(花押)

宗有寺

龍造寺隆信、政家父子、肥前高城寺ヲシテ、寺領ヲ安堵セシム、

〔高城寺文書〕 書〇 佐賀文

書〇 佐賀文
書 築所 收

天正十一年十一月二十五日

二八七

宗有寺
岡崎郷

天正十一年十一月二十七日

高城寺御領南里米納津其外至御寺領其領主郷司聊違亂之儀申仁向後有間敷候殊此節質券買地之取沙汰武領(誰カ)可相替候悉皆可被任御存分候若違亂之儀申者於有之者以彼一通可被仰澄候爲後日之狀如件

天正十一年

龍造寺山城守

霜月廿五日

隆信(花押)

高城寺

參

春日山高城寺御寺領之事

南里米納津其外所々在之

然者至御寺領相當之領主郷司等押妨之儀不可有之自然質券買地等之取沙汰雖爲出來寺免之事武領仁不可致混亂若至理不盡之族者以此證狀可被仰達者也仍爲後日之狀如件

天正十一年十一月廿五日

政家(花押)

高城寺

二十七日、龍造寺隆信、政家父子、筑後鷹尾ノ田尻鑑種ト和ス、是日、隆

信父子、鑑種ノ子長松丸ニ誓書ヲ贈ル、尋テ、長松丸モ亦隆信父子ニ誓書ヲ致ス、

〔田尻家譜〕

七

一田尻丹後守鑑種籠城スル夏今年十一月下旬ニ及ビ己

ニ五百日也然ルニ去比ヨリ豊後へ通シ其援兵ヲ待シカ共如何ナル子

細ニヤ更ニ不來斯ル半鍋島信生公情御思案アツテ其比百武志摩守信

兼ガ蒲船津ノ城へ在番セシヲ築河へ被相招御相談アリケルハ田尻鑑

種近年當家ニ屬シテ忠節不淺畢竟肥後筑後手ニ入りシモ彼ノ鑑種ノ

勳功也然ルヲ唯今攻崩シテ數代ノ家業ヲ滅亡サセンハ武道ノ本意ニ

非ズ尤無情夏也ヲコトハ兼テ田尻了哲ト無二ノ會釋ト聞ク是ヨリ江

浦へ赴キ了哲へ對面シテ飛驒守加様々々ニ存ル由ヲ得ト云聞セ鑑種

心胸ヲ和ゲ何トゾ無夏ニ一著シテ下城アル様ニ申誘へ見ルヘシト被

仰ケリ志摩守承リ内々某モ左様ニ存ル由ニテ則江浦へ來リ右信生ノ

仰ヲ一々了哲へ語ル了哲委ク是ヲ聞テ信生公ノ御心底忝キ夏ニ思ヒ

シカハ早速鷹尾ノ城へ入テ鑑種へ内談ス於爰鑑種モ信生公ノ仰ヲ感

シ同十一月廿七日然ト和平ニ一著シケリ此時自隆信公御父子鑑種ノ

天正十一年十一月二十七日

鍋島信生
百武信兼
了哲田
尻了哲
説カシム

了哲鑑種
ニ議ル

天正十一年十一月二十七日

二九〇

隆信政家ノ誓書

嫡子長松丸へノ神文ニ云、
再拜々々敬白天罰起請文

今度了哲以御裁判、既長松殿致赦面候之上者、當末對長松殿爲隆信政家不可有心疎候事、

付、從其許御表裏之時者、彼神文不可有其實之事、

(朱書)神文有略之

龍造寺山城守

天正十一年

隆信判

霜月廿七日

同民部太輔

政家判

田尻長松

田尻長松殿參

○中略、田尻一族九人ノ起請文ノコトニカ、ル、後掲藤龍家譜ニ異事ナシト

一鑑種へ同十二月三日、百武志摩守ヨリノ狀ニ云、

其以後者遙不申談候、誠不慮之儀ニ候、然者長松殿御進退之事、了哲依御入魂、信貫(小可)取成之段、無緩之處、悉皆被申段御成就候、尤目出候、當時御世外之由候、至御進退も、自爰許向後被存疎儀間、敷候段、諸神八幡愛宕も御照覽無偽候、依此已前一人得御意候辻こと、聊無忘却、此内可啓一行之處、

信兼和平ヲ賀ス
鑑種ハ世外ノ體

互之嗜存候、故無其儀候、自今以後無他事可申承候間、委細用口達候間、不能詳候、恐惶謹言、

百武志摩守

信兼判

十二月三日

鑑種參人々御中

〔藤龍家譜〕

四 同十一月、政家公肥後ヨリ柳川へ御歸城有テ、又田尻ヲ攻

政家江浦ヲ攻陷ス

ラルベシト、江浦ノ城ニ田尻了哲カ籠リタルヲ、直茂公御計略ヲ以攻落サ

レシカ、鑑種ハ猶コラヘテ降參セズ、故ニ去冬籠城ノ時、柳川ノ城へ捨置

タル同名内記ガ子長松丸ヲ殺サルベキニ相極リシカ、田尻一族ハヨリ、

達テ相詫ケル故、御赦免有テ返サレケルニ、長松丸并田尻一族九人、同十二

月朔日連名ノ神文ヲ差出シケリ、○中略、鑑種鷹尾ヲ去ルコトニカ、ル、

再拜々々敬白天罰起請文

一此節依遂御詫言、長松事被成御赦免候、然間田尻親類中改非以御神文申

候、何様當末無表裏惡心奉對隆信公、政家公、不可存心疎妄、

一於虎口等、田尻親類中其外被官何様可抽忠儀之事、

田尻一族ノ誓書

天正十一年十一月二十七日

二九一

天正十一年十一月二十七日

二九二

一若當末爲田尻親類被官中、至隆信公、政家公於企〔 〕各以一味同心可
加成敗

右條々若於違犯者、○田尻家譜、コノ前書
及ビ神文ヲ載セズ、

天正十一年癸未十二月朔日

判○田尻家譜、大
藏助ニ作ル

田尻大藏太輔鎮富

久保右京亮鎮氏

田尻彌(マ)郎鎮永

○田尻家譜
ニハナシ、

田尻左京介鎮永

田尻常陸入道了哲

○田尻家譜、但
馬入道ニ作ル

田尻右近亮鎮盛

○田尻家譜、進
士允ニ作ル、

田尻外記鎮増

瀬戸右馬助鎮祐

○田尻家譜、
鎮和ニ作ル、

田尻石見守鎮直

○田尻家譜、コノ次
ニ千代松丸アリ、

小河信貫

進上

小川武藏守殿(河信貫)
宛○田尻家譜、
名ナシ、

再拜々々敬白起請文

長松丸ノ
誓書

一奉對隆信公、政家公、當時行末等不可有不儀緩怠之儀之事、

一虎口等之儀、親類被官申進、相當之馳走不可有緩之事、

一若長松身上有讒人申上子細候者、至此方被仰聞邪正相糺可分候、若亦風
說共於承付者、何ケ度モ申詞相晴シ可申事、

右條々於令違犯者、○以下神
文關ク、

天正十一年十二月一日

田尻長松丸

隆信公

政家公進覽

〔鍋島直茂譜考補〕

四 田尻下城

一同十一月、政家公肥後ヨリ柳河へ御歸陣有シ後、彌田尻ヲ被攻、江ノ浦城
ニ田尻但馬入道了哲カ有ケルヲ、直茂公ノ御計略ニテ被攻落シカハ、鑑
種カ楯籠リタル鷹尾ノ本城モ次第ニ力盡テ見ヘケル間、直茂公情々思
召ケルハ、田尻カ多年ノ忠功言語ニ及ヒ難ク、寔ニ莫大ノ事也、然ルヲ唯
今攻潰シテ、數代ノ家業ヲ滅亡サセンハムゴキ事也、如何ニモシテ我等
鑑種ヲ賺シ、和平ヲナシテ下城サスヘシト御思案アリ、其頃百武志摩守

天正十一年十一月二十七日

二九三

天正十一年十一月二十七日

二九四

カ浦船津ノ城ニ在番シテ居ケルヲ、柳河へ被相招、足下ハ兼テ田尻了哲ト無二ノ會釋也、了哲へ行テ、飛驒守加様々々ニ思フ旨ヲ細ニ語り聞セラレヨ、鑑種カ性ハナマナカニテ金折（行カ）セヌ者ナルソト、懇ニ被仰含ケリ、志摩守モ御同意ニ存ル由ニテ、了哲カ其砌江ノ浦ヲ下城シテ在シニ對面シ、直茂公ノ御心入レヲ具ニ語ル、了哲承リテ、偕モ忝キ御心底カナト泪ヲ流シ、鷹尾ノ城へ入テ、鑑種ニ右ノ次第ヲ申聞ケリ、鑑種モ公ノ御心底能ク存知ノ事ナレハ、無子細領掌申ス、又此時鑑種カ許ニ勝屋宗機ト云浪人アリ、元來中國ノ者ニテ、勝屋勝一軒カ弟也、小賢キ者ニテ、是モ雙方御使ヲ致シ、斯テ鑑種仰ノ儘ニ下城可仕由御請合申シ、十二月朔日、田尻一門歴々九人田尻大藏助鎮富、久保右京亮鎮氏、田尻左京亮鎮永、田尻了哲入道、田尻進士允鎮盛、田尻外記鎮增、瀬戸右馬助鎮和、田尻石見守鎮直、同千世松丸、各血判ヲ堅メ、直茂公迄神文ヲ出ス、公ヨリモ神文ヲ被差出、○中略、鑑種、鷹尾ヲ去ルコトニカ、ル、十二月十日ノ條ニ收ム、

或記ニ云、田尻鑑種此時、江浦ノ城ニ在テ防戰シケルカ、直茂公ノ御計略ニ勇氣ヲ被碎、百武志摩守ヲ頼ミ、和ヲ乞テ下城ストアリ、非也、江浦

鑑種下城ヲ諾ス

信生頻リ
鑑種ヲ

信生ノノ室
鑑種ノ子

千世松成
長ノ後信

秋月種實
隆信鑑種
トノ問ニ
幹旋ス

ハ同名但馬入道カ抱ノ城也、鑑種ハ本城鷹尾ニ最前ヨリ籠城セシ也、又御和平ノ事公ヨリ神文七通迄被相送シ上ニテ、鑑種領掌申セシ也、公此鑑種ヲ御宥メ、重テ御手ニ附ラレシハ、深キ御思慮アリシト也、略ス、

又云、去年八月、鑑種籠城ノ時、柳河ノ城へ捨置タル人質同名千世松ヲ、今年ノ秋隆信公御殺シ可被成ヨシ被仰、既ニ敷草ノ上ニナヲリシカ、（氏カ）モ、僅四歳ニ成シ幼稚ノ者ニテ、直茂公ノ御内室、陽泰院殿餘リ御不便ニ被思召、頻リニ被仰乞シニ依テ、命相助カリ、今度御和平ニ成シ上ハ、彌安穩致シ、後ニ田尻善左衛門ト申ケルカ、寛永六年正月八日、陽泰院殿御逝去ノ砌、命ノ御恩ヲ唯今奉報由ニテ追腹致シケリ、他國者ノ追腹ハ珍敷事也、

同七月中旬、秋月長門守種實、田尻トハ同シ大藏姓ニテ、鑑種此度家滅亡スヘキ事ヲ歎キ、和平調達ノタメ、家人惠利内藏助ヲ鷹尾へ差遣シ、雙方ニ相談シテ、七月廿一日、己ニ和平ニ相決シ、兩家互ニ神文ヲモ取替シケリ、然ル處ニ、又入組六ヶ敷事有テ破談シケレバ、鑑種

天正十一年十一月二十七日

二九五

天正十一年十一月二十七日

二九六

鑑種義統
ヲ通ジ統

義統ノ授
兵來ヲザ
ル義久ノ
テ義請フ

再ヒ鉢楯ニ及ヒ、彌籠城日ヲ重ネケリ、○中略、信生、江浦ヲ攻ムルコト及ヒ、隆信、鑑種ト和スルコト北肥戰誌ヲ引ク、後揭
密記云、田尻鑑種去冬以前ヨリ、舊主大友義統ニ通シテ、龍造寺へ逆意ヲナシ、籠城中ニモ大友へ音通シ、豊後ヨリノ見次勢ヲ頼ミテ居タリ、然レモ義統愚將ニ依テ、兎角ニ滞リ、其加勢延引ス、依之其間ヲ延サンタメ、小時島津へモ加勢ヲ乞ケル、然レモ大友勢猶延引ニ付テ、田尻籠城今ニハ難堪思ヒシ半、了哲ト百武裁判ヲ以テ、幸ヒニ下城スト見ヘタリ、此時義統并朽網宗歴入道ヨリ鑑種へノ狀ニ委シ、
略之治
亂記

公四十六歳ノ御時也、

〔肥陽軍記〕 八 田尻攻事

鑑種力竭
キテ降ヲ
乞フトテ
説ク

○上略、田尻鑑種、島津氏ニ授クテ、信生公コノ弊ニノリ、柳川ヲオシ出シ、田尻ニ取カケ、責玉フ、石井伊豆守、大塚主計、馬場孫九郎先ガケシテ討死ス、中野式部下村生運ス、ミ入テ戰フニ、鑑種事不意ニ出テ防戦スルニ及バズ、シキリニ降ヲ乞、十二月下旬下城シタリ、後天正十二年肥前ニ來リ、

高尾村ニテ四百三十餘町ヲ玉ハリ、翌年本領ヲアソシケルガ、關白殿下九州入ノ御時、領地ニ放レ、一向ニ肥前ノ臣下トナリテ、西肥前山代ヲ玉ハリケルナリ、

〔北肥戰誌〕

二十 田尻鑑種龍造寺ニ降參ノ夏

同十一月、田尻丹後守鑑種今ニ至リ、五箇城ヲ持テ籠城ス、然ルニ政家ハ、頃日肥後ヨリ築河へ歸陣アリ、彌田尻ヲ攻ラレケリ、中ニモ鍋島信生ハ、田尻了哲カ在番シタル江浦ノ城ヲ取圍ミ、僅カ堀一重ニ詰寄ラレ、蘆萱竹木等ヲ以テ山ヲ築立、其蔭ヨリ段々仕寄テ、鐵炮ヲ打セラレ、又釣勢樓ヲ用意シテ、城内ノ鐵炮ヲ除ンタメ、鐵ヲ多ク集メ、其鐵ヲ以テ、彼勢樓ノ表ヲ圍ヒ、内ハ綿ニテ能誘ラヘ、是ヲ釣上テ城内ヲ相伺ヒ、堀ハ芥草ヲ以テ是ヲ埋メラレ、又右ノ勢樓ヨリモ鐵炮ヲ城内ニ打込セラル、然ルニ城兵是ヲ防カンタメ、大鐵炮ヲ以テ、件ノ釣勢樓ヲ打落シ、夜ルハ續松ヲ投掛テ、彼築山ヲ燒崩シ、又ハ堀ノ部艸ヲハ、岸ヲ穿テ大鑰ヲ以テ引マクテ、敵味方互ニ種々ノ行ヲ廻ラシ、防キ戰フトイヘモ、更ニ勝劣ナカリケリ、然ル間、田尻カ籠城已ニ五百日ニ及ヒヌ、爰ニ鍋島信生情々被思ケルハ、彼鑑種カ此年月ノ忠功誠

信生江浦
ヲ力攻ス

釣勢樓

了哲克ク
拒グ

大鐵炮

天正十一年十一月二十七日

二九七

ニ莫大ノ哀也然ルヲ今度攻潰シ數代ノ家ヲ滅センモ流石無情哀ナルヘシ所詮彼等ヲ賺シ和平ヲナシテ下城サスヘシト被思シカハ頃日百武志摩守カ蒲船津ノ城ヘ在番セシヲ被差招足下ハ田尻了哲ト無二ノ會釋ト聞ユルノ間了哲ヘ行テ鑑種何トソ和平致シ以前ノ通當家ヘ隨ヒ候様ニ内談アルヘシト被申シカハ志摩守其意ヲ得急キ江ノ浦ヘ赴キ了哲ヘ對面シ鑑種和平ノコト色々談合ス了哲尤ノ哀ニ思ヒシカハ鷹尾ノ城ヘ入鑑種ヲ様々宥メ教訓シケル間鑑種モ於今ハ心解了哲カ申旨ニ隨ヒテ和平スヘキニソ決定シケリ斯テ百武方ヨリ鑑種カ所存ノ通リヲ小河武藏守信貫マテ一々相談シケルニ隆信父子信生ヘモ其旨披露アリ鑑種ヨリ願ノ通りニ一著シテ同月廿七日隆信政家ヨリ無別儀由神文ヲ送ラレ和平シカト調ハリ十二月朔日田尻一門九人連判ヲ以テ神文ヲ差出シ略、鑑種、鷹尾城ヲ去ルコトニカ、ル、十二月十日ノ條ニ收ム、

○隆信、鑑種ヲ攻ムルコト、十年十月四日ノ條ニ、鑑種、誓書ヲ島津義久ニ致シテ、援ヲ請フコト、同年十二月十八日ノ條ニ、義久、伊集院若狹守ヲ遣シテ之ヲ援クルコト、本年正月十三日ノ條ニ、隆信、政家父子、鑑種

ニ誓書ヲ贈ルコト、七月二十一日ノ條ニ、鑑種、大友義統ニ援ヲ乞フコト、八月十七日ノ條ニ、島津忠長等、鑑種ニ糧食輸送ノコトヲ議スルコト、十月十一日ノ條ニ、鑑種、使ヲ八代ニ遣シテ、隆信トノ媾和ニツキ、島津氏ノ命ニ依ラント言フコト、本月十七日ノ條ニ、鑑種、鷹尾ヲ去ルコト、及ビ隆信父子、長松丸ニ地ヲ與フルコト、十二月十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔普聞集〕

六 (天正十一年)

十一月

肥前勢、田尻鑑種ヲ圍ムコト年アリ、信生軍旅久シク、上下ノ疲勞ヲナケキ、江浦ニトリツメ、急ニ攻テ堀一重ニ攻ナシ、土俵埋草ヲ以テ堀ヲ埋ムトイヘ、ソノ驗シナシ、信生アヤシンテ、釣勢樓ヲツクリ、城内ヲウカハ、ハント工ム、勢樓ステニ作り出シ、マツ人ヲ不入試ニツリ上ク、城内ヨリ大鏡炮ヲ以テ打トホス、信生歟ヲ多クアツメ、其鏡ヲ以テ勢樓ノヲモテヲ張、内ヲ綿ニテカコヒ、人ヲ其内ニ入テツリ上、城内ヲ見セシム、數月ノ埋草土俵等城内ニ山ノ如ク積ヲケリ、土居ノ下ヨリ大鑰ヲ以悉ク引上ル故如斯、信生是ヲ案シ、大木ノ枝シケキヲ多ク堀ニトリ入レ、土俵埋草ヲ以堀ヲウツム、城ヨリ取ントスレ、大木ノ枝ニサヘラレテ不叶、寄手

大鏡炮

天正十一年十一月二十八日 二十九日

三〇〇

急ニ埋テ堀ツヒニ平地ト成、鑑種是ニ届シテ和ヲコヒ、前非ヲ悔ナケク、百
武志摩守是ヲアツカヒ、田尻終ニ降參、

二十八日丙午神祇大副吉田兼和兼見ノ子兼治、和仁王ニ物ヲ上ル、

〔兼見卿記〕

五

十一月廿八日丙午出京、若宮様へ碁石白黒一面之分進上

之侍兼治從致進上之旨申入了、万里少路披露之清少舟橋國賢(吉田譯勝)盛法罷向、

二十九日丁未前大德寺住持宗訥嶺笑寂ス、

〔紫巖譜略〕

龍寶山大德禪寺

百七

笑嶺 諱宗訥、與州人、越智姓、高田氏、嗣大林、永祿元戊午十月十七日出世、永

祿三庚申四月朔日開堂、正親町帝敕特賜祖心本光禪師、住聚光院、自號喝

雲子、天正十一癸未十一月廿九日寂、頌曰、喝雲呵雨七十九年、斬卻魔佛吹

毛靠天、塔聚光院、安牌於祖堂、

〔延寶傳燈錄〕

三十

大德大林宗套國師法嗣

京兆大德笑嶺宗訥禪師、號喝雲叟、豫州河野之族、高田氏之子、幼投州之宗昌

寺剃染、及長徧參、掛搭南禪、掌書記、聞古嶽和尚旺化大德、即往依之、復居記室

參侍十年、一日聞舉不與萬法侶話、忽爾投契、嶽命居第二座、抵泉之南宗、請益

碁石

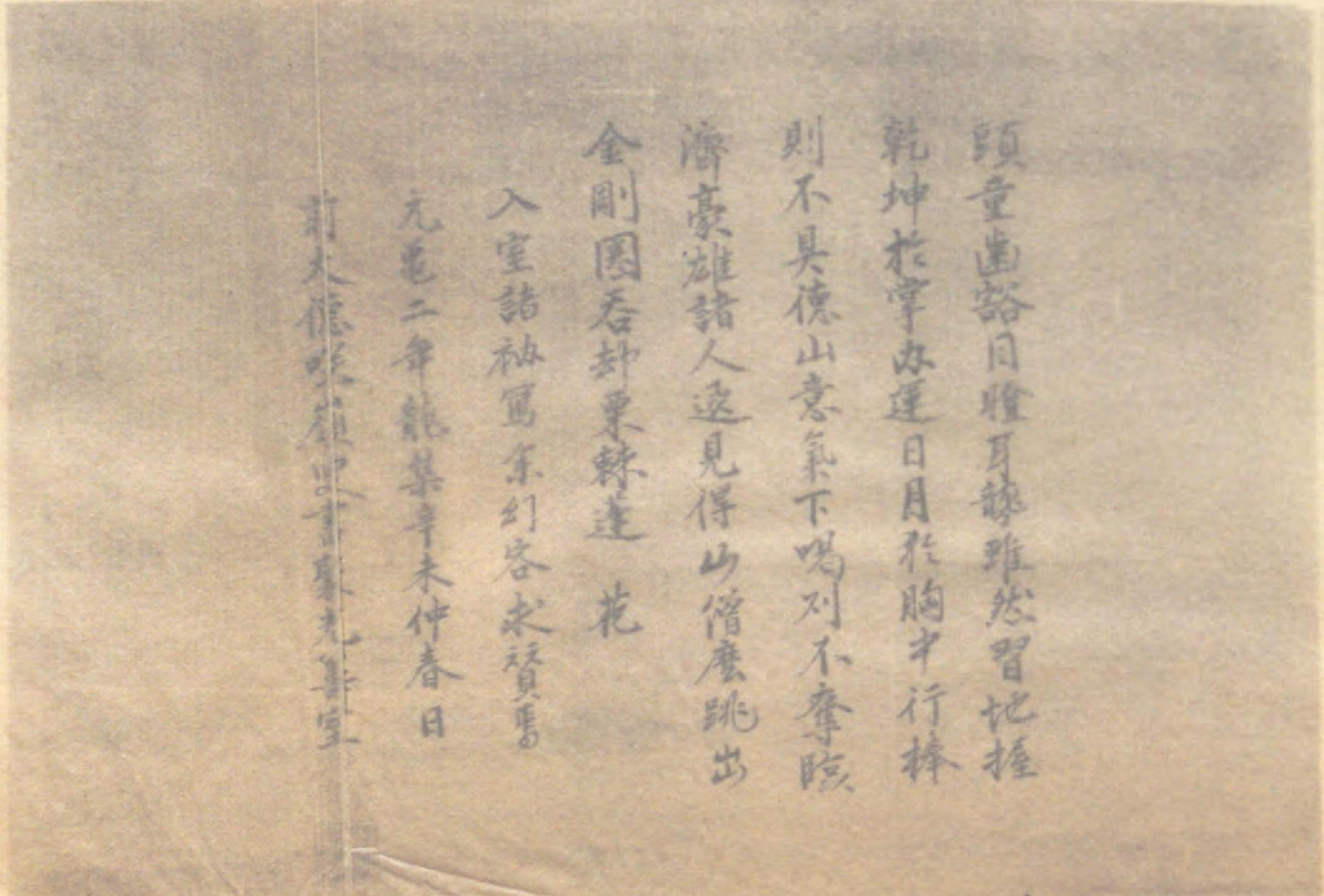
祖心本光
禪師

南禪ニ掛
塔ス
古嶽和尚
ニ參ズ

笑嶺宗新頂相

京都大德寺聚光院所藏

頭童齒豁日增耳聾雖然習地挂
乾坤於掌办運日月於胸中行捧
則不具德山意氣下喝对不奪臨
濟豪雄諸人遠見得山僧麼跳出
金剛圈吞却東絲蓮花
入室諸袖寫东幻容求賢馬
元龜二年龍集辛未仲春日
前大德寺鎮東書院元善堂



原寸

縦 ○・九八〇
横 ○・四五八



基石

祖心本光
禪師

南禪ニ掛
塔ス
古嶽和尙
ニ參ス

天正十一年十一月二十八日 二十九日

急ニ埋テ堀ツヒニ平地ト
武志摩守是ヲアツカヒ田

二十八日午神祇大副吉田兼
〔兼見卿記〕五 十一月廿

二十九日未前大德寺住持宗
〔紫巖譜略〕龍寶山大德禪

笑嶺 諱宗新與州人越智

祿三庚申四月朔日開堂

雲子天正十一癸未十一月

毛靠天塔聚光院安牌於

〔延寶傳燈錄〕三十 大德

京兆大德笑嶺宗新禪師號唱

寺剃染及長徧參掛塔南禪堂

參侍十年一日聞舉不與萬法

天正十一年十一月二十八日 二十九日

三〇〇

急ニ埋テ堀ツヒニ平地ト成、鑑種是ニ届シテ和ヲコヒ、前非ヲ悔ナケク、百武志摩守是ヲアツカヒ、田尻終ニ降參、

二十八日、丙午神祇大副吉田兼和兼見ノ子兼治、和仁王ニ物ヲ上ル、

〔兼見卿記〕五 十一月廿八日、丙午出京、若宮様へ碁石白黒一面之分進上

之、侍從致進上之旨申入了、充房万里少路披露之、海國宮(吉田禪師)清少盛法罷向、

二十九日、丁未前大德寺住持宗訥嶺寂ス、

〔紫巖譜略〕 龍寶山大德禪寺

百七笑嶺 諱宗訥、與州人、越智姓、高田氏、嗣大林、永祿元戊午十月十七日出世、永

祿三庚申四月朔日開堂、正親町帝敕特賜祖心本光禪師、住聚光院、自號喝

雲子、天正十一癸未十一月廿九日寂、頌曰、喝雲呵雨七十九年、斬卻魔佛吹

毛靠天、塔聚光院、安牌於祖堂、

〔延寶傳燈錄〕三十 大德大林宗套國師法嗣

京兆大德笑嶺宗訥禪師、號喝雲叟、豫州河野之族、高田氏之子、幼投州之宗昌

寺剃染、及長徧參、掛搭南禪掌書記、聞古嶽和尚旺化大德、即往依之、復居記室

參侍十年、一日聞舉不與萬法侶話、忽爾投契、嶽命居第二座、抵泉之南宗、請益

碁石

祖心本光
禪師

南禪ニ掛
塔ス
古嶽和尚
ニ參ズ

原寸

縦 ○ 九八〇
横 ○ 四五八



龍寺聚光院所藏

地握

行捧

不奪臨

廣跳出

春日

善室

笑嶺宗新頂相

京都大德寺聚光院所藏

頭童齒豁目眩耳聾雖然習地握
乾坤於掌內運日月於胸中行捧
則不具德山意氣下喝對不奪隘
濟英雄諸人遠見得山僧麼跳出
金剛圈吞却栗棘蓬 花
入室諸衲寫余幻答求資馬
元龜二年龍集辛未仲春日
前大德笑嶺叟書聚光善室



原寸

縱〇九八〇
横〇四五八

南禪六掛
塔入
古嶽和尙
二參天

〔延寶傳燈錄〕

京兆大德笑嶺宗新禪
寺剃染及長徧參掛搭
參侍十年一日開舉不

毛嶽天塔聚光院

靈子天正十一癸未

三庚申四月朔日

笑嶺宗新禪

人

念一塔ヲ建ツセシ平城ノ宮ニ遷シ一層ヲ和ヲコヒ前非ヲ悔ナケク百
武志摩守是ヲアツカセ田原路ニ遷シ

二十八日神祇大副吉田兼和和仁王ニ物ヲ上ル

兼見卿記十一月廿八日宮様へ碁石白黒一面之分進上

之侍從致進上之旨申入了清少盛法混向

二十九日行前大德寺住持宗新宗新

〔紫巖譜略〕龍寶山大德禪寺

笑嶺百七諱宗新與州人越智姓高田氏嗣大林永祿元戊午十月十七日出世永

祿三庚申四月朔日開堂正觀町帝敕特賜祖心本光禪師住聚光院自號喝

雲子天正十一癸未十一月廿九日寂頌曰喝雲呵雨七十九年斬卻魔佛吹

毛靠天塔聚光院安牌於祖堂

〔延寶傳燈錄〕二十大德大林宗套國師法嗣

京兆大德笑嶺宗新禪師號喝雲叟豫州河野之族高田氏之子幼投州之宗昌

寺剃染及長徧參掛搭南禪掌書記聞古嶽和尚旺化大德即往依之復居記室

參侍十年一日開舉不與萬法侶話忽爾投契嶽命居第二座抵泉之南宗講益

雲石

祖心本光
禪師

南禪ニ掛
塔ニ
古嶽和尚
ニ參ズ

原寸
縱〇九八〇
横〇四五八

聚光院所藏



地握
竹棒
奪眩
跳出

室日

大林和尚
參大德
世出

三好義繼
聚光院宗
建光宗
訴開山

大林增加精彩林付以正印授笑嶺號曰雨後青山似展眉滿顏和氣對相宜寥寥不許白雲白萬仞崔嵬獨秀時永祿元年春奉敕出世大德拈衣曰庾嶺雲一片個無縫團々將謂落山僧手裏和風搭在玉欄干上堂記得大燈國師上堂拈拄杖曰此事無去來因甚昨日春去今朝夏來迄乎道物性住一世肇公也是盲龜入空谷拈曰山僧昔日若在拗折拄杖便道錯下座攝之廣德虛席衆議請師以寺主懇請移住近邑之棲賢左京兆源義繼三好建聚光院於龍寶山內延師主焉又移泉之南宗海眼二寺丞相義昭源公陸南宗爲十刹之列永祿十年秋朝廷特賜祖心本光禪師號十一年十一月二十九日得老病遺誡門弟作辭偈曰喝雲呵雨七十九年斬卻魔佛吹毛靠天書畢吉祥就化壽如偈臘六十五門人諸檀奉全身葬乎南宗先師塔側焉

〔龍寶山志〕

三 歷代住持籍

百七 笑嶺宗和尙開嗣大林永祿元年十一月十七日出世同三年四月一日塔聚光院

〔龍寶山志〕

四 大德派

大德百七 笑嶺宗新 南宗三世再興栖賢廣德二刹祖心本光禪師塔聚光天正十一年九月廿九日化七十九號喝雲

天正十一年十一月二十九日

天正十一年十一月二十九日。

三〇二

〔龍寶山大德寺誌〕

乾

聚光院 四十二石八斗九升七合

笑嶺和尚 嗣大林、天正十一年九月廿九寂、七十九、祖心本光禪師、

〔聚光院文書〕

城〇山

喝雲呵雨七十九年、斬却魔佛吹毛靠天、

宗新花押

天正十一年十一月廿九日

一衆珍重○本書ハ宗新ノ筆ニカ、ル

○勅シテ宗新ニ本光禪師ノ號ヲ賜フコト、永祿十二年九月五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔聚光院文書〕

城〇山

本有天真性顯、天地未分前、出陰陽造化功、挺拔清靈兼然、物外上人契證此田地、起居幽邃、受用太堅確矣、長養靈廓性體、大機大用、捧喝交馳、相逢相去、飲氣吞膾、他時異日、綿密護惜、至老成之時、弘吾道而以光輝矣、深念好念、

天文二十一年壬子仲冬初二爲宗新首座爲證云、

大林叟宗套書



○本書ハ宗套ノ筆ニカ、ル

宗新辭世ノ偈

大林宗套ノ印可狀

職錢

尙々、常德大番振舞各催促仕由程首座雜□候、然之見閑談合候而、從□光合力可有之候、但無奉公ニ之無用歟、

幸便之條令啓候、程首座下向、其方様躰承大慶候、

一攝之事笑止、廣德寺如形建立仕候處ニ、可成焦土存令迷惑候、

一陽春伊豆ヨリ職錢早々下候様ニ、才覺專用候、緣ノ下ヨリ屋上并東ノ縁

通ニ著壁、還關□北ノ縁通ニモ著壁、此外懸御目度存事候、朝暮申候、日夜

大盜用心肝要迄候、恐惶不宣、

十一月十七日

宗新(花押)

聚光院

机右

南宗寺ノ〇以下三點ハ、宗新自筆ニカ、ル

ワリ

般公緇郎、年少當紀綱之官、古應庵十八而司此官、便作偈云、人言洞裡桃花癩、予今當矣、彼與彼年相若也、道相似也者乎、猥賦拙偈、祝遠大云、
咲擲

天正十一年十一月二十九日

三〇三

天正十一年十一月三十日

三〇四

洞裡桃花先賀正、乃翁昔日既佳名、誰言幽谷黃鶯嬾、天下知春第一聲、

喝雲子

元日口號

靄々東風橫翠嵐、

須彌試筆打玄談、

吾門入室無人勸、

庭上梅花叫罷參、

喝雲子

三十日、申戌德川家康、駿河惣社及ビ八幡村八幡社ヲシテ、各社領ヲ安堵セシム、

〔駿河國志補遺〕二〇朝野舊聞哀藁 二百七十七所載

駿州府内惣社領之事、

右如先規、領掌不可有相違之者也、仍如件、

天正十一年十一月晦日 御居判

惣社神主殿

〔駿府古文書〕二〇朝野舊聞哀藁 二百七十七所載

駿州府内淺間領村岡大夫分之事

右如先例之領掌、訖者守此旨、流鏑馬御神事等、無怠慢可相勤之狀如件、

天正十一年 十二月十日 大久保新十郎 奉之

御朱印有

村岡大夫

〔稻川文書〕河〇駿

駿州稻河大夫職之事

右如先規之領掌、不可有相違之者也、仍如件、

天正十一年

十一月晦日

稻河大夫殿

〔駿府巡見記〕二〇朝野舊聞哀藁 二百七十七所載 八幡村八幡宮貳百五拾石、權現様御判形

天正十一年十一月三十日

三〇五

村岡大夫

稻河大夫

天正十一年十一月三十日

三〇六

天正十一年十一月晦日、

〔駿府覺書〕

二〇朝野舊聞哀藁
二百十七所載

有渡郡八幡神主安西主殿社領貳百五十四

石、天正十一年十一月晦日權現様御判、樓門神樂殿二ヶ所權現様御造營被遊候由、

○家康、駿河安養寺、甲斐熊野社等ヲシテ、各所領ヲ安堵セシムルコト、便宜左ニ合斂ス、

〔駿府古文書〕

二〇朝野舊聞哀藁
二百十七所載

駿州有度郡安養寺領貳拾貫文、并諸末寺如舊規寺中山林見伐殺生禁斷、

狼藉其外門前三百國次人足諸役等免許之事、

右如前々、領掌不可有相違之者也、仍如件、

天正十一年十一月六日

家康 御書判

安養寺

玄徹長老

〔熊野早玉神社文書〕

二〇紀伊

熊野社

甲斐國之内熊野領之事

右如前々、領掌不可有相違之者也、仍如件、

天正十一年十一月十一日

家康(花押)

鵜殿孫次郎殿

信濃松本ノ小笠原貞慶、日岐丹波守ヲシテ、本領ヲ安堵セシメ、且之ニ新知ヲ加フ、

〔御證文集〕

〇笠系大成
附錄所收

(朱書) 本書折帯

今度就被抽忠信、爲重恩北山冊貫文、日岐山四拾貫文、大穴冊貫文、堀之内冊貫文、一日市場冊貫文、本領吉方七拾貫文、右合貳百冊貫文所進之候、彌於勵戰功者、先手よて一所可申付候者也、仍如件、

天正十一年十一月晦日

貞慶 御判

日岐丹波守殿

一日市場

天正十一年十一月三十日

三〇七

天正十一年十一月是月

右日岐彌市右衛門盛房家藏

三〇八

○貞慶丹波守ニ誓書ヲ與ヘテ、身上ヲ保證シ、所領ヲ與フルコト、八月七日ノ條ニ見ユ、

是月、京都ノ奉行前田玄以、山城妙心寺ニ禁制ヲ下ス、

〔妙心寺文書〕

○七山城

禁制

妙心寺

一伐採竹木事、

一殺生事、

一當寺領違亂事、

右條々不可有相違之狀如件、

天正十一年霜月 日

玄以(花押)

來迎院亭順、攝津四天王寺ノ堂塔ヲ再興セントシテ勸縁ス、

〔秋野房文書〕

○津

勸進沙門

敬白

特請蒙貴賤道俗助成、營造攝津國四天王寺佛閣、祈國家安全狀

夫惟傳佛法於日域、施利益於吾朝、大悲利物之善巧、聖德太子方便也、仰慕其德、高於妙高八萬、伏思其恩、深於溟瀛九萬、是以蘇我渴仰三寶者、流淚而結紹隆之契、守屋破壞寺塔者、含悲而祈再興之運、悲喜敢非太子之悲喜、損益悉以衆生之損益、恩德廣大也、何劫報謝、各仰大悲應現之志、可勵涯分興隆之思者也、抑天王寺者、人王三十二代用明天皇二年之草創、推古元年重於此地、被移起倩案事、濫觴爲弘通佛法、護持王法、守國土安人民、守屋逆臣追罰之時、造護世四天王之像、置於頂髮、而發願曰、今使我勝軍、命起立寺塔、放四天王矢、定弓和順、惠失遠逸、中守屋胸、今及千歲天下和平也、太子神人仰四王護持、猶得大軍勝利、凡愚癡人、非三寶冥助、爭得武運之佳名、本願緣起曰、斯處者、昔釋迦如來轉法輪所、爾時生長者、身供養如來、助護佛法、以是因緣、起立寺塔、此地數七寶、故青龍恆守護、麗水東流、號曰白石玉出水、以慈悲心飲之、爲法藥、分寶塔金堂、相當極樂東門、中心一輪露盤、三粒佛骨、爲衆生之福田、爲遺法之壽命、然則一稱南無之念佛者、無智易勤、四天王門之往詣者、無行易到、寧非希有難思之靈地乎、雖然、世及澆季、衆生薄福之故、天正四年五月三日、不圖爲兵火災、寶塔露盤、雜塵芥、金銅救世觀音、登銅煙、三面僧坊、一時頓滅、見之者濕袖、聞之者斷

天正十一年十一月是月

三〇九

天正十一年十一月是月

三一〇

賜爰羽柴筑前守秀吉朝臣、達武將深智略、而暴逆之輩速疾誅罰、御國家以仁壽之化、撫民屋以憲章、猷擇賢良輔治、用善哲攝政、加之欲興隆佛教、紹耀玄風、頻驚當伽藍再興之計策、遮而爲□□可加下知諸國云云、是併太子之善巧、濟度利生之第一也、仍憑貴賤上下芳志、勸一紙半錢合力、以漸々勞功、即欲遂造營之本懷、若爾僧俗男女、各成隨喜之思、預御奉加者、二世悉地可成給者也、則本願緣起曰、若有興隆輩、官位福榮、自以相續、子孫世々常安常樂、悉殖勝因、若擎一香一華恭敬供養、若以一塊一塵拋入此場、如此等者、結緣一淨土云云、御願深重也、寧虛妄乎、然則信心施主、現世安穩、後生善處、得益無疑、仍勸進狀如斯、

秋野來迎院法印

天正十一年十一月日

亭順朱印

○四天王寺炎上ノコト、天正四年五月三日ノ條ニ、秀吉、太子堂奉加錢ヲ寄進スルコト、本年七月十一日ノ條ニ、淺野長吉等ヲシテ、再興ヲ奉行セシムルコト、文祿三年是秋ノ條ニ、再興就ルコト、慶長五年三月二十七日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、紀伊根來寺及ビ粉川寺僧徒、雜賀ノ一揆等、屢出デ、和泉ヲ侵ス、是月、岸和田ノ中村一氏等、迎へ撃ツテ之ヲ破ル、

〔中村一氏記〕

天正十一年

州大坂城へ和泉侍湫仁清寺田又右衛門、松浦安太夫、眞鍋次郎、桑原清輪以下不殘被召寄、秀吉ヨリ尾藤甚右衛門、戸田民部御使ニテ仰出サレ候ハ、紀州表根來、粉川雜賀ノ一揆トモ御下知ニ隨ハス、チカコロ曲事ニヲホシメシ候、サリナカラ四方ノ大敵トモ御退治ナサレ候ハ、以後紀州一揆トモ御成敗ナサレヘク候、若其内大坂邊へ一揆トモ出張仕、狼藉仕リ候へハ、イカ、ニ思召ル、ニツキ、ヲサヘトシテ泉州岸和田ニ中村式部被爲閣候ハン條、其意ヲ得ラルヘク候、ソレニツキ、泉州中寺社領ノコラス召上ラレ、式部ニ下サレ候ヘトモ、中村手勢三千餘コレアルニツキ、知行少ク兵糧ニモ不足ニ候間、泉州地侍ノ本知ケンシテ二ツ分下ナレ候、殘ル所モミナ、モ式部ニ下サレ候間、其意ヲ得タテマツルヘキヨシ仰付ラレ候ニ付、和泉侍皆々式部ニ合屬、其年四月、江州柳瀬表志津カ嶽合戰、柴田勝家切腹、其月中、中村式部少輔岸ノ和田城へ入、式部手勢二千四

天正十一年十一月是月

三一

天正十一年十一月是月

三二二

百許、與力七十騎、雜兵二千、都合五千ニ不足故、秀吉ヨリ加勢トシテ、明石與四郎、黒田甲斐守御越備前ノ宇喜多秀家モ人數五番ニワケ、一組ツ、岸和田加勢ニテ、式部手前都合八千ホト御座候、紀州一揆三萬餘ノヲサヘナリカタク候ヘトモ、中村式部少輔ハカクレナキ大將故、堅固ニ在城被仕候、

一揆岸和田對シテ付城ヲシテ構フ

一 紀州一揆トモ、右ノ旨承リ、根來、雜賀申合セ、泉州表へ出張ツカマツリ、中村、澤、田中、積善寺、千石堀五ヶ所ニ附城ツカマツリ、岸和田ト何モ五十町ハカリヘタテ、日々ノカケ合御座候、一揆大將ハ根來杉坊、赤井坊、粉川御池坊、雜賀、中村、木本、的場、損庄司、駕皆一味ニテ打出申候、其年中ハ三國切腹、駕方々ニテノ取合、式部人數骨ヲリ申候、

真鍋貞成

〔真鍋眞入齋書付〕

真鍋眞入公有增御一生之御書付

一天正十一年之秋の頃、紀州口四郡根來下泉一揆、申候而、岸和田之城中村式部殿被仰付候、此時眞入公ハ御年十五才ニテ御座候、

一 紀州根來下泉之一揆共、以上二萬計も可有之候哉、

一 同年十月初、泉州何も人持之衆中へ、式部少輔殿御申渡有之候、皆々敵

中切坂村一氏ヲ夜襲ス

地ハ夜討待伏せ、思々にいとし可被申候、先々式部少輔殿より御初め有之とて、切坂と申敵地ハ式部殿自身夜討を御討被成候而、則首數三十討捕被申、何れ御さし被成候御事、

真鍋貞成ハかはらヤヲ夜襲ス

一 然所眞入齋も、同十月此上旬、下泉此かゝらやと申敵地ハ夜討を舟にて

討申候事、則首十四討捕申候、以上二拾人計乗申候小舟十船程(艘力)にて討申

候、夜一番鳥之時分、舟はさほへに申候、舟の兩方より六尺計の繩を附、磯

に著申候と舟をそのまゝ、沖一丁計に乘出し、此き時分ハ皆々海へと

び入、沖中にて舟のり申候様こいとし申候、扱舟より何れ上り、敵

地ハ切込、以上十四首數討捕申候、然者敵ども四五百起り出申候所、

早々海へ飛入、後繩もと付、舟沖にまき出申候故、壹人も損し不申、

皆々うちを返し申候、其内伏山又大夫ハ、小兒の首をと申候由、式部殿

是一入之事あり、夜討とは敵此迷惑がり申候事第一、并場所へまい

申候印さへ有之候得者能候、小兒ちと被討候ハ、いぢらう其父迷惑

いとし可申候哉、此時分眞入齋家來百五六十も所持仕候事、是真入齋十

五之時、泉州にて一番にて候事、當地(時力)九十六七年よな申候事、此時常空

小兒ノ首ト一氏ノ意見

天正十一年十一月是月

三二三

天正十一年十一月是月

三一四

よも首壹つ御と_り被成候由、
 一 同年十一月の初_め、紀州根來者五十計出申候而合戰有之候、岸和田よ_り皆々出申候而、早々追崩シ申候、此時真入齋家中首五つと_り申候、多賀井左吉衛門ハ見事之杉形の鍵をいとし申候、此と_り常空よも高名をされ候御事、
 一 同年十一月のすへ、又敵五千計よ_り出申候、岸和田よ_りも、我先々にと_り出追崩シ、惣手へ首五十計取申候、真入齋家中へも首五つ捕申候、此時常空よも首壹つ御と_り被成候、

十二月 大 己酉 朔 盡

一日、_西德川家康、駿河顯光院ニ、同國醫王寺居屋敷ヲ與フ、尋デ、同國安西寺ニ安堵狀ヲ付ス、

〔顯光院文書〕_河〇_駿

駿_河中田之内上嶋郷醫王寺屋敷之事、


合五貫七_百文、_{但、門前沙彌屋敷三間、跡役御免許者也、}


右居屋敷永被下置候、是者去午之年、江城穴山殿_ハ御使被申候、御奏者柳原小平_殿被仰付候之者也、仍如件、

天正十一癸未年

名 倉 若 狹花押

十二月朔日

倉橋三郎五郎 

小栗二右衛門尉 

顯光院

〔安西寺文書〕_河〇_駿

駿河國府内安西寺寺中門前屋敷拾五間之地子令寄符之、殊於寺内叨伐採竹木、狼藉之族禁法之、并寺中棟別以下之諸役免許等之事、

天正十一年十二月一日

三一五

上島郷

天正十一年十二月一日

三一六

右如前々領掌不可有相違、彌以此旨有梵宇建立、勤行等不可有怠慢者也、仍如件、

天正十一年

三宅彌次兵衛尉

十二月二日 (家康) 朱印 福徳印文

安西寺

○三十日、家康、駿河富士大宮段所ニ屋敷ヲ還付スルコト、便宜左ニ合

〔宮崎文書〕

河駿

本段所屋敷、大宮司殿道より西うふ木川之内返渡申候、御請取可有候、爲後日仍如件、

天正十一年

井出甚之助

十二月卅日

正次(花押)

清彦三郎

徳長(花押)

段所殿

二日、庚辰是ヨリ先、北條氏政老シ、子氏直嗣グ、吉田兼和、兼氏直ノ爲メニ武運長久ヲ祈禱シ、是日、祓ヲ送ル、

〔兼見卿記〕

五 十二月四日、壬子、相州北新九郎今度自氏政與奪家督也、爲

幸田大藏丞

代替禮御祓大鷹之條之書狀見于左、奏者幸田大藏丞方へ御祓筆十管遣之、

左近士令下向、每度此便宜ニ遣御祓也、

爲御代替御祈禱、神道祕法之御祓進之候、可有御頂戴候、武運長久、國家

安全、於神前抽丹誠ヲ候、如意感應勿論存候、隨而御鷹之條一筋、進入候、

微志憚入候、併呈祝例候、猶幸田大藏丞可被申入候、恐々謹言、

十二月二日

兼(花押) 惣別判不可在之義也、先年牧鹿異見之間如此、

北條新九郎殿

妙心院自山城歸寺、山ノイモ 二把、ホロミソ 一重、持來、青女方へ牛房、山ノ

イモ、一把、侍從方へ音信云々、每度各々氣遣也、

御代替最珍重存候、仍神道之御祓并、條一筋、進入候、可然様御執成憑存

候、連々申入義候條、不相替御入魂可畏入候、隨而貴所へ御祓菟毫十管、

進之候、少微之至憚多候、併表例祝計候、猶左近士可申上候、恐々謹言、

天正十一年十二月二日

三一七

天正十一年十二月三日

十二月二日

幸田大藏丞殿

兼(花押)

三一八

安田右近允持遣之、後刻罷歸、左近士ニ體相渡之由、申歸也、

三日、亥、羽柴秀吉、蜂須賀正勝、黒田孝高等ニ答へテ、速ニ毛利輝元ノ屬城ヲ請取ラシム、

〔黒田文書〕七

去月廿九日書狀、昨日二日到來令披見候、(黒田)安國寺、(林)林奎并毛利家老之者共、猿懸迄相越由得心候、先手寄之城四五ヶ所相渡へき由尤候、早々可請取候、おも口成方候間、悉同時ニ相渡候様ニハ在之間敷候間、高山おとのやうなる肝要之城々よ、渡次第ニ可請取候、不可有油斷候、尙追々可被申越候、恐々謹言、

十二月三日

秀吉 御書判

蜂須賀(正勝)右衛門殿

黒田(孝高)官兵衛尉殿

○安國寺惠瓊、林就長等、佐世元嘉ヲシテ、境界決定、諸城引渡等ニツキ、

先ノ如ク高山
要ノ城キ肝
要ノ請取ル
ベシ

輝元ノ決斷ヲ促サシムルコト、本月十五日ノ條ニ、秀吉、正勝、孝高等ニ、速ニ輝元ノ屬城ヲ請取ランコトヲ命ズルコト、十二年正月二日ノ條ニ見ユ、

毛利輝元、安藝嚴島社ニ地ヲ寄ス、

〔野坂文書〕○安藝

御嚴嶋之内御寄進田之事

合 御判在之、神崎給

分米

中す	一田壹段半	分米五斗五升	作人 手作
大道ノ地	貳段	七斗五升	作人 九郎兵衛
柿ノ木ノもと	壹段大	五斗五升	作人 七郎三郎
尾カ追長安準人様内	半	壹斗五升	追四郎

以上 田數五段大
分米貳石定

天正十一年

十二月三日

江田因幡守

井頭宗右衛門尉

天正十一年十二月三日

三一九

天正十一年十二月三日

三三〇

井上肥前守

嚴嶋

棚守左近衛將監殿

是ヨリ先、大友義統、老臣田原紹忍ヲシテ、豊前宇佐八幡宮ノ社職等ヲ
擊タシム、是日、義統、久保大藏少輔等ノ功ヲ褒ス、

〔大友家文書錄〕

義統

十二月、先是宇佐社職等叛義統、命田原紹忍、下妙見

城鎮之、久保大藏少輔、飯田麟清、都甲三河入道等從紹忍有功、義統翰作感狀、

宇佐社中之者共企一雅意之條、田原近江入道以下城相閉目候、然者其方
事妙見岳留守番被遂其節由候、辛勞之儀候、忠意之段必追而一稜可賀之
候、恐々謹言、

□子三月三日

義統 在判

久保大藏少輔殿

久保大藏
少輔妙見
嶽ヲ守ル

中之者共企一雅意候條、閉目之儀、
取鎮一稜可賀之候、恐々謹言、
近江入道以同陣、別而馳
走之段

義統 在判

飯田但馬入道殿

□佐社中之者共企一雅意候條、閉目之儀申、
而馳走之段感、□候、必其境取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十二月三日

義統 在判

都甲三河入道殿

四日、壬子德川家康、駿河ヨリ遠江濱松ニ歸ル、

〔家忠日記〕

三

十二月八日、

丙辰殿様去四日ニ駿より御歸候由候、

略下

○家康、江尻ヨリ府中ニ移ルコト、十一月十五日ノ條ニ見ユ、

蘆名盛隆、伊達政宗ノ老臣片倉景綱ニ書ヲ遣リテ、政宗ノ援助ヲ謝ス、

〔片倉代々記譜錄〕

一○磐城

景綱

九月大

此月廿一日の日付にて、葦名盛隆ノ書を賜ふ、

態啓之候、前日者自政宗爲御使御懇切之御理共、寔以本望之至候、勿論於
自今以後ハ、猶可申合外無之候條、取成畢竟任置候、内々如斯之趣使を以

天正十一年十二月四日

三三一

使

天正十一年十二月四日

三二二

可申候へとも、其迄遅々候條、先以脚力申理候、態々馳走尤候然ハ前立日町馬共之儀、嚴密ニ被相通、是又祝著候、御當日町ニ諸商人共指越可申候、恐々謹言、

九月廿一日

盛隆判

片倉小十郎殿

十二月大

此月四日の日付よて、右御同人ノ書被給ふ、

尙々、乍毎度申事、政宗ニ向後彌可申合外無之候、無御服藏被相談様、執成任入候、

其以來依指儀無之、音絶意外候、よつて今度鹽松家中取亂之處ニ、自其口被及助勢之上、彼洞堅固之儀、盛隆所ニ御入魂之筋目一段本望候、猶政宗被入御念、彼口御抱之儀任入之由、内々馳走專用候、委曲彼口上申含上、不具、恐々謹言、

極月四日

盛隆判

片倉小十郎殿

鹽松ノ家中取亂ス

脚力

日町

五日、癸丑、猿樂觀世元忠歿ス、

〔重猿樂傳記〕 仁 觀世

七代目

觀世左近大夫元忠

天正十一癸未年十二月五日同斷、後號宗節、

〔四座系圖書并家々次第〕 觀世

道見

元廣

世系 當大夫

宗節 東照神君參州に被御座時勤、
弟 寶生 太方江、
養子、後號寶山、

宗金 寶生、寶山子也、
元之、左近太夫、

〔觀世累葉履歷〕 元忠 稱當大夫、後號宗節、元廣三男也、元龜元年將軍家申樂、元忠與金春大夫勤御能、天正十一年癸未十二月、七十五歲終、

〔觀世家譜〕 七世元忠 宗法名、左近元忠代、嗣く、元忠は、世ニ當太夫と稱號せり、後更て一安齋宗節と號す、一生娶らざる故、子なし、かき弟、寶生、寶生四郎重勝、稱小、一子三郎元尚を養ひて、業を續しめぬ、さて左近元忠は、能謠とを、當時の上手よて、觀家ニ有とあらゆ、大夏の能とを、凡て殘さ

天正十一年十二月五日

三二三

略歴 一安齋娶
ラザル故
子ナシ

天正十一年十二月五日

三二四

似我與左衛門傳書贈元忠

細川幽齋西行櫻

ずよし人あり、と亂拍子は、公方義晴上意あるに依て、宮増彌左衛門親賢相傳より、或年京五條原今の松玉造の社地にて、初て勸進能行へり、觀世彌次郎長俊未生をせり、も、年月を欠き追て考ふるに、元忠杜若の能よ、自囃子をせらばし、夏あつ、其時の相手は、大鼓大藏二介、小鼓觀世彦右衛門、太鼓似我與左衛門、笛春日市右衛門、市右衛門は、笛彦兵衛の弟子よ、扇屋某と云ふ、通都は、笛字を貫ひて、春日と名告ふり、今春、ちり、細川幽齋殿近江國青龍寺よ、能行されし時、元忠西行櫻をせしむ、其西行櫻よ舞働あり、此時笛師牛尾玄笛樂屋にて元忠よ向ひて云、回まわ合あをよ依て、御能よ逢ふ夏こそ忝く侍せ、如何やうよも仰せさとし給ふしと云、其時元忠笛をば鞘ふさゝで居させまよと云、とあむ、さて西行櫻よ、すこや數そふ時の鼓と謠ひあるらよ、鼓と太鼓の方をさして、働をば舞せしとなり、或時元忠、與左衛門と同道よ、他行よし時、與左衛門は長袍道服を著たりけり、路よ、田舎人見答て、あせり、與左衛門と云上手ありと云しとあり、與左衛門行跡は、宜ら、付て、とかく言をす、た、言しとあり、卒す、みぎ、遺言して云、後々、觀座よ、吾太鼓の條を學むむと思ふ者あらば、授さあきりしとて、我書寫せし、傳書八冊、其餘よ、觀世與左衛門と記たりしをば、遺物として、殘らぬ、氏よ、は、其書どもよ、觀世與左衛門と記たり、然きども與左衛門は、觀世の氏よ、は、

高安與左衛門

北條氏康松原社氏法樂ノ能

六角定頼

疎物

らざりし、さ、故、存命、中奈良よ、て樂屋よ、在し時、觀家同苗の座、は居む、さ、故、吾座、危行ありと云て、地謠衆の方よ、居たりし、とあり、長、元忠の時専らと撃し、大鼓の上手は、高安與左衛門よ、と云、喜、大鼓の筒をば、大形よ、好と初し人あり、す、ち、觀世彌三郎元供、の弟子あり、高安與左衛門は、謠をば、記憶せざり、人よ、て、弟子よ、鼓教ゆ、時、聊を失念ふ、り、し、と、奇、特、の、裏、ふ、り、ま、と、常、よ、物、書、よ、は、片、假、字、よ、の、み、書、と、り、た、系、の、書、状、の、通、便、も、凡、て、片、假、字、あり、し、と、る、を、攝、津、國、平、野、村、よ、の、住、人、々、稱、して、高安、惠、比、須、と、云、し、と、あり、天、文、十、四、年、三、月、廿、二、日、小、田、原、の、北、條、氏、康、籠、城、の、櫓、を、慰、む、が、爲、よ、四、座、の、太、夫、を、召、よ、ぎ、て、松、原、大、明、神、の、廣、前、よ、く、法、樂、の、能、七、番、行、を、し、め、能、終、り、て、後、伶、人、舞、童、四、人、出、て、泰、平、樂、を、ぞ、舞、納、め、け、り、同、じ、く、十、五、年、十、二、月、十、九、日、近、江、國、坂、本、の、神、職、樹、下、成、保、が、宅、よ、く、新、將、軍、家、義、御、元、服、の、儀、式、行、を、せ、ら、る、に、依、て、元、忠、祝、賀、の、爲、よ、伺、候、申、し、ぬ、同、月、廿、二、日、彈、正、少、弼、六、角、定、頼、の、旅、館、を、新、將、軍、家、御、成、あ、る、に、因、り、能、樂、行、を、せ、ら、る、左、近、元、忠、今、春、八、郎、喜、勝、と、俱、よ、伺、候、申、し、ぬ、御、能、の、次、第、高、砂、觀、世、、田、村、同、野、宮、今、春、、大、會、觀、世、、東、岸、居、士、同、舍、利、今、春、、道、成、寺、今、春、、羽、衣、觀、世、、山、姑、觀、世、、同、殺、生、石、今、春、、立、田、觀、世、、芭、蕉、同、岩、船、同、松、蟲、同、猩、々、同、凡、て、十、五、番、あ、り、日、出、よ、及、ひ、て、終、り、録、物、萬、匹、舞、臺、よ、積、を、ら、る、に、依、て、左、近、元、忠、よ、下、し、賜、を

天正十一年十二月五日

三二五

田樂長阿彌

松永久秀

三好長慶
ハ亂舞= 堪能連歌
ハ名義人 三好義長

天正十一年十二月五日

三二六

今春八郎より三千匹、日吉太夫より三千匹、各こを頭載す（頭載カ）御供衆是を渡さ
 せと日吉太夫、嵐太夫、并に田樂長阿彌、元阿彌三人御庭より伺候せり、これ舊
 例より因り故あり、各折紙千匹ばし、是を贈らる、同じく廿三日、元忠より金春、
 喜勝兩人を召て、御能行せらる、御能は難波梅元、經政、同、熊野、喜、春日龍神、
 元忠、二人、靜、向、野守、同、郡、郡、喜、吳、服、元、忠、凡て八番あり、日出し及て御能終る、舞臺
 の樂屋以下折紙千匹相副を、常在寺を遣はさる、弘治二年七月十日、松永久
 秀布引山の城を結構して、主君三好長慶を請待し、饗應奔走の上より、左近
 元忠を能樂行せしめ、此時能終る、百韻の連歌あり、長慶本より亂舞、堪能
 永祿四年二月廿三日、三好筑前守義長が宅を、將軍義輝御成ありて、御能行
 せり、御覽あり、御能凡て十四番、纏頭の鳥目一萬匹下し賜せられ、同じく三
 月晦日、三好義長立賣の御館を、將軍家御成ありて、御能御覽あり、四獻より御
 簾を揚て、御能始めらる、貞孝、舞臺を通り、樂屋に入り、罷出ると申さる、則ち始り
 御供衆御取あり、庭上より、日吉太夫、嵐太夫、元阿彌、冬阿彌、甫阿彌、御能は日
 内より一番仕る、脇の能より細雨降る、御能數の夏、老松、八島、熊野、春榮、松風、春日
 龍神、三輪、張良、野宮、野守、當麻、自然居士、猩々、黒主、凡て十四番、吳服仕、觀世大

式三番

樂屋料

相國寺石
橋ノ勸進
能

芝居

堀池宗室

天正十一年十二月五日

三二七

夫御座敷を召上られ舞申あり、御能以後を御縁よりうたひ申あり舞臺、狼
 煙も二所、御能過て、鳥目舞臺より積せらる、五千匹は左に積せらる、御能過て、御
 謠の時雨降り付て、大夫御縁を上げて謠ひ申す、座の者は舞臺の端よりう
 たひ申あり、田樂、猿、樂、千、四、遣、能、過、て、三、百、四、折、紙、一、重、上、調、進、の、同
 じく、閏三月二日、後宴として、御供衆少々、攻衆少々、御部屋衆少々、申次同朋
 衆招請あり、廣橋殿、藤宰相殿、竹内三位殿（孝光）光儀ありて、觀世太夫能行せせら
 る、初獻の御肴參りて、能始め申さる、能はじめさせ候、式三番以下常の如
 し、三千匹下し置る、當日樂屋料五百匹、三合三荷下し賜せらる、能數十番あり、
 同じく六年、相國寺の際石橋より、左近元忠、子息三郎元尚と俱し、日數四日
 の勸進能行ひぬ、將軍義輝棧敷を構へて御覽あり、脇は觀世小次郎元頼、大
 鼓は高安與左衛門など出て勤む、第二日の能より、小次郎の張良を、二度芝居
 より所望しけむば、後の度は弟子の堀池宗活と云者よりさきたりとあむ、堀
 池宗活は、虎屋立巴と云者の弟なり、立巴は元忠の弟をせしめ、能をせしめ、宗活は、
 堀池へ養子より行し、小次郎元頼の弟子より、能をせしめ、宗活は、
 世の人は、能をせり、宗室一子あり、左兵衛と云、同じく能をせり、同じく七年、
 相國寺石橋より、子息元尚日數四日の勸進能行ひし時、元忠も俱し勤む、第

三井寺

山姥

通小町

雨夜ノ翔

報恩寺ニ

法名

天正十一年十二月五日

三二八

二日三井寺の能元忠勤し、一聲の中、公方御棧敷より上意ありて、御左弟
 よして大夫出座き旨よ付て、一聲をば長々と撃しとあり、小鼓は大藏仁介
 衛門第三日、元忠山姥を勤む、翔の中、中々御棧敷を召ゑ、さて御名残をし
 やと謠ひて、舞臺を歸りたきば、上下感じたりとあり、さて三輪の能御乞よ
 依て、元忠これを勤めぬ、此三輪の能よ開口あり、金剛與次郎勤めぬ、三輪の
 能御乞ありし時、似我與左衛門御棧敷より、芝居を押し通りて、御所望よて
 まるり通ふぞと云、觀世彦右衛門は棧敷の裏通りを通りたりし、與左衛
 門の仕方をば、梅第四日、元忠通小町の翔の中、元忠を御棧敷を召れし、元
 忠流きむとしけゑを、彦右衛門意得て、鼓を流し打けゑ内よ、落たゑ笠を
 取上て、あら暗の夜やと謠ひて仕舞けきば、上下感ざしとあり、是いとゆる
 雨夜の翔の濫觴ぞかし、元忠入道して一安齋宗節と號せ、天正十一年十二
 月五日、元忠卒す、行年七十五、洛陽報恩寺に葬る、○中略、老人
 雜話ヲ引ク、
 法名 自在院觀譽竹窓一安齋宗節居士、

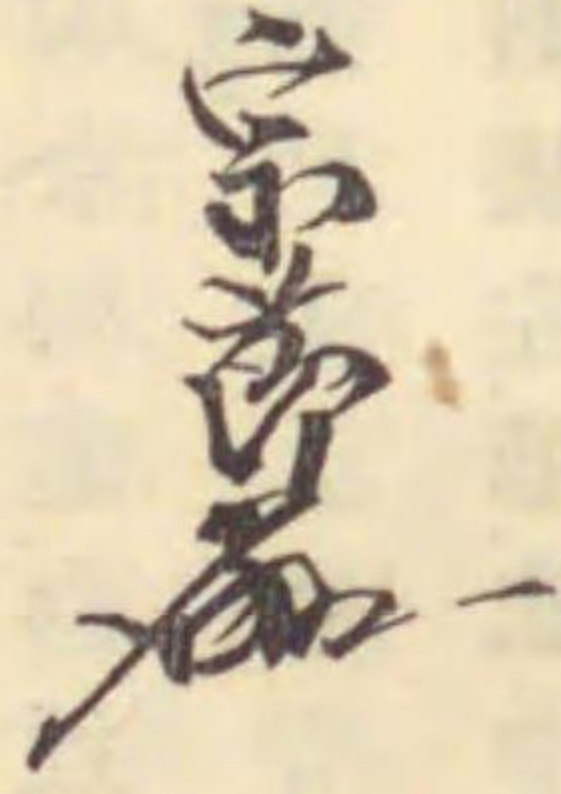
〔参考〕

〔花押彙纂〕

部カ之

觀世宗節

花押



○觀世宗節自筆風姿花傳第七別番口傳與書
 天正六年十月吉日附

伊勢家犬
 馬場ニ於
 ケル勸進
 猿樂

宗節ト連
 歌

〔言繼卿記〕

十七

天文二十一年三月廿七日、己酉、天晴、天一下良、土用、

一自今日於伊勢守犬馬場、勸進猿樂有之、大夫觀世云々、伊勢守取持、真如堂

勸進云々、

〔言繼卿記〕

四十

永祿六年八月一日、丁未、天晴、天一天上、

一○中略次寶鏡寺殿へ參奉、公衆十餘人、觀世大夫、同與左衛門祇候、音曲有之、

及大飲及黃昏了、○下

〔言繼卿記〕

七十

永祿九年正月九日、壬寅、天晴、時々雪降、天一天上、

一從早日細川馬同第十加賀入道所へ連歌罷向、倉部同道、人數予、倉部高伊與入道、淨
 林院、慶順、宗節、宗淳、宗家、卜清、乘高、成能、堯、執筆、元順等也、亭主從去、夜持病
 氣云々、兩三度出座、先朝飡、午時入麵、後こ又小漬、よて酒よて未下刻終了、

〔言繼卿記〕

八十

永祿十年二月四日、庚寅、自辰刻雨降、十方暮、自未刻天晴、

天正十一年十二月五日

三二九

天正十一年十二月五日

三三〇

音曲

觀世彦右衛門

一鳥丸へ罷向之處、各被呼朝食有之、相伴了、亭主、予、庭田、正親町中將(實邊)、是齋、鳥丸辨(光直)、富小路權佐(稱直)、觀世入道宗節、同三郎、同彦右衛門等也、中酒之後音曲有之、次盃出及數盃、庭田早沈醉歸宅、淨土寺殿之奥坊中酒以後來、同早歸宅、觀世彦右衛門同兼約有之、早歸、七過時分酒終、觀世父子歸了、次鳥丸父子之腰刀脇指等三四つ、被見之、及黃昏歸宅了、

十九日、乙巳、天晴、一天上、

一鳥丸へ罷向之處、世續彌二郎元服云々、各朝食有之、人數鳥丸、予、正親町、是齋辨、富小路權佐、淵田入道玄少、世續入道宗德、同三郎、觀世入道宗節、三宅入道隆近、桑垣助左衛門、庄田、友田、久河彌介、同與七郎、福壽坊、皮屋彦四郎、大工二郎三郎、白川之中山等相伴、濟々儀也、後又盃出、音曲囃等上手衆聞事也、及數盃、予禁裏召之間、未刻罷歸、終日之儀云々、

三月廿六日、壬午、天晴、天一乾、

一急朝食、予、倉部、薄等令同道、參近衛殿、早能始了、貴賤男女之見物群集也、御座敷殿下、聖護院新門主、大覺寺殿、久我入道、鳥丸、久我右大將、予、藤宰相、內藏頭(高倉)、千菊丸、是齋、同權佐、薄、法中若王子以下數多有之、大夫久我入道(通興)、一番、

近衛家ノ能

囃

堀池彌二
耶虎屋隆巴

同右大將(通興)、二番、觀世入道宗節、一番、同三郎(實邊)、五番、堀池彌二郎(通興)、七番、虎屋入道

隆巴(宗德)、二番、等也、ワキ大和宮内入道、富小路權佐、河村民部入道、堀池、大工二

郎三郎以下也、笛、久右大將(宗德)、二番、藤宰相(宗德)、二番、粟津式部丞(宗德)、七、與太郎(宗德)、六、

澁谷城可(宗德)、一番、等也、小鼓殿下(宗德)、二、吉田侍從兼和(宗德)、一番、觀世彦右衛門、桑垣

助左衛門、辻新右衛門、庄田與三郎、大鼓殿下(宗德)、一番、和久新介(宗德)、七、辻父子(宗德)、一番、

宛、庄田新四郎(宗德)、五、觀世彦右衛門(宗德)、一、中村與三(宗德)、一、等也、大鼓高倉千菊

丸(宗德)、一番、賀茂勝願院弟子兒(宗德)、一、古川彌二郎(宗德)、一、大和治部少輔(宗德)、二、進藤

三郎左衛門(宗德)、一、等也、以上人數六十餘人也、午時於内々飴飯有之、殿下御

兄弟三人、予父子三人、若王子等御相伴也、其外面々各有之云々、猿樂衆樂

屋之儀、鳥丸振舞云々、其外御盃五參了、夜半二終、各罷歸了、

六月一日、乙酉、天晴、十方暮、

一近衛殿へ御禮ニ參、御見參御盃被下了、飛鳥井中納言、藤宰相等被參了、次堀川近江守令同道入江殿へ參、御盃賜之、次同道寶鏡寺殿へ參、御兩所御見參、飛中、藤宰、上池院、觀世入道以下祇候御酒有之、音曲有之、

〔言繼卿記〕

一三十

永祿十三年正月四日、壬申、晴、自未下刻雨降、

天正十一年十二月五日

三三一

天正十一年十二月五日

三三二

一今日之禮者中山竹内左兵衛佐申柿一富小路是齋宮内卿大和和治部少輔御末小田刑部少輔竹藤備後守同真下式部少輔飯尾右馬助春阿疋田彌七郎出納大藏大輔佛師法眼同兵部陰陽頭有修、山井筑前守景長、木村越前守觀世入道宗節

五月五日壬申天晴

一武家高政參賀坊城三條令同道大名畠山尾張守三好左京大夫以下御供衆十五六人御部屋衆以下濟々也申次飯川肥後守也公家鳥丸一位予飛鳥井黃門雅致同中將富小路權佐竹内佐兵衛佐日野廣橋坊城三條新少將藤侍從等也次一臺參次大藏卿局公家各尾州奉公衆少々觀世入道宗節以下九人歟酒有之

六月十七日癸丑天晴

一南御所參瑞花院二香齋散一包一兩同永勝庵同一兩進候干飯又酒有之次寶鏡寺殿同半一兩持參又愛洲藥御所望一包進候御酒有之觀世入道宗節同彦右衛門祇候了次入道殿同半一兩持參御佛詣云々同賢春二一包一兩與之次歸宅了

松尾社ノ能

〔言繼卿記〕

三十一

元龜二年四月十八日己酉天晴天一下良

一急朝食松尾社爲見物罷越社務以下悉出仕各肩衣袴也翁ハ矢田又太郎也能ハ大夫細川兵部大輔子三淵彌四郎一色四郎朽木彌十郎曾我又二郎觀世宗節同三郎等以上十二番西王母經正定家昇西行櫻東岸居士三輪楊貴妃通小町百萬一狸々等也公家富小路權佐奉公衆細川兵部大輔曾我兵庫頭一色式部少輔竹内治部少輔松井新二郎等以上五十餘人驚目者也太秦真珠院同道於芝居見物自方々錫以下十餘度酒有之申刻終了次予ハ葉室參向令逗留薄同道了

〔兼見卿記〕

二

天正七年七月廿三日丁卯如兼約村井作右衛門尉來舞曲

上下京數輩召具召寄觀世宗節同彦右衛門尉又二郎貳百人計客來也申刻初舞曲鶉羽予舞曲也二番經政侍從三番遊屋以上十一番及明旦終各歸京了

廿八日戊辰村作參罷向面會夜前之義相話了宗節今日歸

〔兼見卿記〕

四

天正十年十月廿六日辛亥五郎左衛門上洛延引長兵在京候間罷向盛方院逗留候間直罷向宗節其外地下人各來入夜亂舞及深更

天正十一年十二月五日

三三三

亂舞

吉田社ノ能

芝居

天正十一年十二月五日

歸宅

三三四

門ノ能
藝能

〔多聞院日記〕

〇七 大和

天文十二年二月九日

一 京觀世人數八十人計ニテ下了、寶生大夫上洛了、無人數也、今日門ノ能、藝能悉以出來了、

- 一、白樂天、寶生ワキ彌九郎、寶生大夫二、舟辨慶、觀世三、柳、金春七郎四、ソトハ小町、長正丸五、童永殿、觀世六、張良、一七、キワカ子、

十日、社頭へ參リ、能一向不出來了、

一門ノ能見物了、

宮王大夫

一 宮王大夫、同三郎、同與四郎上了、

- 一門ノ能見物了、一、難波梅、觀世二、田村、金剛子三、コカウ、觀世四、御惱楊貴妃、今春五、三輪、七郎ワキ彌九郎、觀世大、觀世座六、是害、觀世七、目クラ、觀世大、長正丸カケキヨ、八、カキツハタ、

十二日、

薪能

一 薪能見物了、脇、寶生二、千壽、一シケヒラ、寶生三、當麻、觀世四、松虫、寶生五、キソヤノ

十郎、七郎六、藤タイコ、寶生七、クマサカ、觀世八、紅葉カリ、

十四日

一 今度觀世太夫宗節薪能ニ罷下ニ付テ、去年燒失ニ逢フ裝束悉以失墜ノ處ニ、

依公方義晴様御申ニヨリ、所カ金ラン、純ス以下ノ裝束十七具調テ被下了云々、難

有事也云々、舊冬唐土ノ王ヨリ、金沙金觀世繻以下ノ物百廿端被送了、以之沙

汰之云々、依公方宗節ハ小袖十重、座衆二重ツ、被下了云々、美麗無極者也、

〔老人雜話〕

三 一 觀世黑雪ハ、宗雪宗雪ハ子あり、宗雪ハ子あり、保生大夫保生子

を養子とシ、三郎といふ、黒雪ハ三郎三郎子あり、宗雪も三郎も東照宮御懇

よて、兩人共ニ參河にて死せ、今ニ至て觀世の家、御家の大夫あるハ此ゆ

へ也、相國寺石橋兩度の大能あり、初度初度よて宗雪後宗雪の度ハ三郎三郎大

夫あり、是ハ百年をあり以前此事也、脇ハ小次郎、大鼓ハ高安道善高安道善と出

り、小次郎一の弟子小次郎堀池宗室といふ者あり、二日此能ニ張良を二度芝

居よ居よ所望しけむハ、宗室宗室よさせたり、

〔老翁物語〕

上 觀世大夫宗節三郎吉田へ罷下御能之夏

觀世大夫宗節、同三郎罷下候、月迫に候へ共、中旬に一座登城仕、被成御對面、

御拍子御拍子など候て、同廿三日、郡山之麓興禪寺興禪寺よて、舞臺被仰付、御能御座候、前

天正十一年十二月五日

三三五

義晴宗節
ノ爲メニ
義晴宗節
ノ爲メニ
義晴宗節
ノ爲メニ

宗節安藝
吉田ニ下
興禪寺ニ
舞臺ヲ張

天正十一年十二月五日

三三六

芝居
毛利元就
宗節ノ演
能ヲ見ル

世阿彌ノ
風姿花傳
ノ奥書

家康花傳
ノ奥書
ヲ藏ス

々日より大雪よて、今日ハ御能可相延と大夫衆も存候處、御兩三殿各夜中ニ御棧敷被成御下、大夫所へ御使者被遣付而、大夫衆仰天候て、取あへず樂屋入仕候、日出より初り、極晩ニ御能絶候て、被成御登城候、各うへへ之御供衆其外國衆之供之者共迄、雪之上ニ敷皮よて伺公仕候、其日ハ天氣能候て雪とけ、寺中大木之枝より雪落候て、芝居之衆伺公之上へ落懸り、庭之雪もとけ、水之中ニ終日罷居暮候、御前御酒なども、まかへ不參、御能被成御見物候、其段觀世宗節一廉忝由申上候、舞臺へ之引出物黄金貳百兩、御小袖百許廣ぬと入、猿樂衆一人宛罷出頂戴仕、其ぎした申も中々疎よて御座候つ、○本條永祿九年、

〔觀世宗節筆風姿花傳第七別番口傳奥書〕

一此別番條々、先年弟四郎ニ相傳するといへ共、元次きい乃ふ盛人とるよよりて、是を又傳所也、祕傳々、

應永廿五年六月一日

世阿在判

此本十郎大夫方之を書寫也、又此家之本も有、同之、
以上十ヶ條少もちうハす、十郎うとの書ハ家康ニ御所持也、二札の外あ

觀世元忠宗節筆蹟

京都片山善雄氏所藏

原寸

縦〇二五二
横〇三五三

此花傳抄信忠様宗康ノ御筆也、沙阿在判
んて守りし書切ハ、その一

一はあつちのほのほのまゝにしてあつちのまゝに二つ二つ
 のほのほのまゝに二つ二つとまゝにまゝにまゝにまゝに
 けいふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 あつちのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 妙に記さすことしむるは女つ

貞永大具年六月一日 世阿弥判

けいふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 妙に記さすことしむるは女つ

天正六年十月十日

宗筆

妙に記さすことしむるは女つ
 んてふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

